

春秋穀梁傳范甯集解譯稿（二）

〔莊公元年～僖公二十五年〕

要 旨

本稿は、『春秋穀梁傳』及び范甯『集解』の日本語譯である。原稿はすでに完成しているが、今回はとりあえず、前回〔隱公・桓公の部分〕にひきつづいて、莊公・閔公・僖公の部分に掲載する。以後、數年にわたって連載する豫定である。

岩 本 憲 司

凡 例

一、底本には、嘉慶二十年江西南昌府學開雕の阮刻十三經注疏本「臺灣藝文印書館影印」を用いた。

一、本稿の目的はただ一つ、『穀梁傳』及び『集解』の論理に筋を通すことにある。したがって、譯注の類「校勘、訓詁名物、出典等」は、必要最小限に止めた。

一、本稿の體裁は、大きく、〈主部〉と〈附錄〉とにわかれる。その内譯は、

〈主部〉

經 原文

傳 原文

④ 『集解』の譯文

附 所謂譯注の類

〈附錄〉

經 原文

傳 『傳』の譯文

附 所謂譯注の類

である。

『傳』の譯文を〈附錄〉にまわした理由は、合理的に考えて『集解』がおかしい場合、『集解』だけでは解釋しきれない場合などがあつて、必ずしも『集解』に即しては譯出していない「むしろ、鍾文丞の『補注』によるところが多い」からである。

なお、『穀梁傳』及び『集解』という書物については、周知のこととして、解説を省くが、一つの事柄だけをここで明らかにしておきたい。それは、譯者は春秋三傳の成立を、『公羊傳』↓『穀梁傳』↓『左氏傳』という順序で理解しているということである。つまり、『穀梁傳』の作者は『公羊傳』を見ていたと考えるのである。したがって、譯者は常に、『公羊傳』の模倣、あるいはそれへの異論の可能性を念頭において、『傳』を譯出した。

〔莊公元年〕

經元年春王正月

○繼弑君不言即位 正也

○繼弑君不言即位之爲正何也

○君は斷絶しないはずだから。

○傳曰先君不以其道終 則子不忍即位也

○三月夫人孫于齊

○桓公の夫人、文姜である。哀姜には子殺しの罪があり、(罪が)軽いから、僖公元年に「夫人氏之喪至自齊」とあるように、「姜」(だけ)をとり去って貶めるのである。文姜には夫殺しの罪があり、(罪が)重いから、「姜」「氏」を(ともに)とり去って貶めるのである。これが(罪の)輕重による等差である。

○傳孫之爲言 猶孫也

○「孫」とは、孫通し「のがれ」て去るということである。

○この注は、傳文の解として適當とはいえない。「孫通之孫 義近子孫之孫也」という補注の説に従うべきではあるまいか。

○傳諱奔也

○接練時錄母之變 始人之也

○夫人は(既に)前年に桓公とともに齊に行っていた。(それなのに)今ここでまた書いているのは、練時に際して、夫人が祭に参加しないことに心を動かされたため、始めて人道をもって記録したのである。

○傳「人之」を、范注では「以人道錄之」と解するが、意味が少しく不明確である。ここは、王念孫の説に従って、「仁之」「これをあわれむ」と解するべきであろう。

○傳不言氏姓 貶之也

○人之於天也 以道受命 於人也 以言受命

○臣子であれば、君父の命を受け、婦であれば、夫の命を受ける。

○傳不若於道者 天絶之也

○「若」は順の意味である。

○傳不若於言者 人絶之也 臣子大受命

○義として、夫人を貶めることが出来る、ということを使う。

○この范注は意味が少しく不明確であるが、疏によると、傳文の「臣」は群下を、「子」は莊公を指し、注文の意味は「臣、子が義として夫人を貶めることが出来る」ということになる。もし、范注の眞意がこのようであるとすると、范注はおかしい「補注もこれに近い」。「命」とは、貶せよとの命ではなくて、それ以前の「以道受命」「以言受命」という、一般的な命のことであろう。また、「臣子」とは、妻をも含めた、命を受ける側のことであろう。ちなみに、『春秋繁露』順命篇には「子受命於父 臣妾受命於君 妻受命於夫」とある。

○經夏單伯逆王姬

○「單」は姓であり、「伯」は字である。

○傳單伯者何 吾大夫之命乎天子者也

命大夫 故不名也

㊤ 諸侯は毎年、天子に土を貢獻する。(そうして) 天子が直接に爵命を興え、大夫として國にかえらせた者には、名をいわない。天子が國にいさせたまま、間接に爵命を興えた者は、名氏をもって(他國に)通じる。

團其不言如 何也

㊤ 僖公三十年には「公子遂如京師」とあって、「如」と言っているから。團其義不可受於京師也 其義不可受於京師何也

曰 君躬弑於齊 使之主婚姻與齊爲禮 其義固不可受也

㊤ 禮では、尊と卑とは匹敵できないから、「天子が女を諸侯に嫁がせる場合には、必ず同姓の諸侯に主人役をさせる」〔公羊傳文〕。魯の桓公自身が齊に殺されたのであるから、もし天子が(魯に)命じて主人役をさせたとすれば、非禮の大なるものである。《春秋》は尊者のために諱むから、(命令を)京師から受け(たように表現す)るわけにゆかないのである。

附傳文の「躬君」は、王引之の説に従って、「君躬」に改める。

經秋築王姬之館于外

團築 禮也 于外 非禮也

㊤ 「外」とは、城外のことである。

團築之爲禮何也

主王姬者 必自公門出

㊤ 「公門」は治朝の外門である。王姬の主人役は、宗廟に几筵を設け、迎えの者を待つことになっているから、公門の内側に王姬の館を築くのである。

團於廟則已尊 於寢則已卑 爲之築節矣 築之外 變之正也 築之外爲變之正何也 仇讎之人 非所以接婚姻也

哀麻 非所以接弁冕也

㊤ 親迎するのに祭服を身につけるのは、婚姻を重んじてである。莊公はこの時、桓公の喪中であつた。

附傳文の「變之爲正」は、俞樾に従って「爲變之正」に改める。

團其不言齊侯之來逆何也 不使齊侯得與吾爲禮也

經冬十月乙亥陳侯林卒

團諸侯日卒 正也

經王使榮叔來錫桓公命

㊤ 「榮」は氏、「叔」は字で、天子の上大夫である。禮では、九錫がある。第一が輿馬、第二が衣服、第三が樂則、第四が朱戸、第五が納陛、第六が虎賁、第七が弓矢、第八が鈇鉞、第九が柎鬯で、いづれもみな、徳を褒め功を賞するためのものである。徳に厚い薄いがあり、功に軽い重いがあるから、命にも多い少ないがあるのである。何休は(この注で)「桓公は弑逆の人で、王法によって誅絶すべき者であるのに、かえって命を興え、天道にさからった。だから『天王』と言わないのである」と言っている。文公五年の「王使榮叔歸含且贈」(の注)

では、「含は臣子の職分である。至尊の身でありながら卑事を行なった。だから『天王』と言わないのである」と言っている。(同年)三月の「王使毛伯來會葬〔公羊では『毛』を『召』につくる〕」(の注)では、さらに「ひきつづいて禮を失したことを譏る。だからまた『天王』と言わないのである」と言っている。甯〔私〕が考えるに、僖公二十四年の「天王出居于鄭」は、いけないことの最たるものである。禮では、天子に本來贈含をおくる制度がある。だから(文公五年の)傳は、二事を一使ですませたことを譏ったとするだけなのである。

「且」と言うのが、譏りを示すための書法であり、一つの事に對して二度貶するということは出来ない。天王という至尊の身で、人の妾祖母の葬に會した「文公五年三月」のは、たしかに禮を失した行ないであるが、任叔の子を來聘させた「桓公五年」こと、(及び)家父を來させて車を求めさせた「桓公十五年」ことがいけないのに比べて、どうであろうか「同様ではなからうか」。この三者「僖公二十四年・桓公五年・桓公十五年」はいずれもみな「天王」と言っているのであるから、明らかに「天」の有無はそこに)義が介在する問題ではない。舊史に詳略があったのを、夫子はそのままにして改めなかったのである。以上、曲説はいかに巧みであっても、つきつめると通じなくなる。ことがわかる。

團禮 有受命 無來錫命 錫命 非正也

⑨人を朝で賞するときには、士(衆)といっしょにするから、當然(京師に)召して與えるのである。『周禮』大宗伯に「王が諸侯に命を與

えるときには、諸侯を進める」とあるのが、(京師に?)來て命を受けるということである。

團生服之 死行之 禮也 生不服 死追錫之 不正甚矣

經王姬歸于齊

團爲之主者 歸之也

傳文の「中」は、補注に従って「主」に改める。

經齊師遷紀邢鄆部

團紀 國也

邢鄆部 國也

⑩この國は、三文字を名稱とする。

團或曰 遷紀于邢鄆部

⑩十年には「宋人遷宿」とあり、傳で「『遷』〔他動詞〕とは亡辭〔亡んだという表現〕である。(遷した先の)地をいわないのは、宿が二度と(經文に)現われないからである」と言っている。(この場合)「齊師遷紀」とあり(地をいわないのに)、四年にまた「紀侯大去其國」と書いて「〔經文に現われる〕のは、紀侯が賢であったから、齊の師が紀を亡ぼすことを許さないということで、文を變えて義を示したのである。邢鄆部の君は紀侯のように賢ではなかったから、二度と現われず、(つまり)常例に従ったのである。もし、齊の師が紀を邢鄆部に遷したのであれば、「于」と言って、その事を明らかにするのが當然であるし、また、そもそも地を書くはずがなく、「宋人遷宿」〔莊公

十年」「齊人遷陽」「閔公二年」のように表現されるはずである。(だから)「或曰」の説は、甯「私」には解せない。

輔范注から考えて、この經文に對する穀梁の普通の讀み方は「齊の師が、紀と邢鄆郡と(の二國)を遷した」ということになる。

〔莊公二年〕

經二年春王二月葬陳莊公

經夏公子慶父帥師伐於餘丘

⑩「慶父」は名であり、字は仲父である。

團國而曰伐 於餘丘 邾之邑也 其曰伐何也 公子貴矣 師重矣 而敵

人之邑 公子病矣 病公子 所以譏乎公也

其一日 君在而重之也

⑪邾の君がこの邑にいたから、邾につなげず、國のようにしたのである。

經秋七月齊王姬卒

團爲之主者 卒之也

⑫嫁ぐのに主人役をすれば、兄弟の恩が生ずるから、死んだ場合、服喪する。服喪するから、卒を書くのである。『禮記』に「齊から王姬の喪を告げてくると、魯の莊公は彼女のために大功した」〔檀弓下〕とある。

經冬十有二月夫人姜氏會齊侯于禚

⑬「禚」は齊地である。

團婦人既嫁不踰竟 踰竟非正也 婦人不言會 言會非正也 饗甚矣
⑭「饗」は四年にある。

經乙酉宋公馮卒

〔莊公三年〕

經三年春王正月溺會齊師伐衛

⑮徐邈が言う「傳例に『往「いき」に月をいうのは、往を危ぶんである』〔定公八年傳文〕とある。齊が天子の罪人〔衛侯朔〕を受け入れて、彼のために師を興こし、魯はその仲間になったのであるから、當然危険である」と。

輔經文の「齊侯」は、石經に従って、「齊師」に改める。

團溺者何也 公子溺也

其不稱公子何也

⑯二年には「公子、慶父帥師伐於餘丘」とあって、「公子」と稱しているから。

團惡其會仇讎而伐同姓 故貶而名之也

經夏四月葬宋莊公

團月葬 故也

經五月葬桓王

團傳曰 改葬

②もし本當に改葬したのであれば、「改」と言つて、そのことを明らかにするはずである。「郊牛之口傷 改卜牛」「宣公三年」とあるように。傳はおそらく、七年たつてようやく葬ったから、「改葬」と言つたまでであらう。

團改葬之禮總 舉下 緇也

③「總」は五服の最下級である。「下を擧げて（上を）緇（つく）す」と言うのは、總から（斬衰まで）いづれもみな、それぞれの本服をくりかえす「そのままやりなおす」のである。（この傳文は）「桓王を葬った」ことにちなんで、改葬の禮を記したまでで、桓王を改葬するのに總を服したはずであるということを書いてゐるのではない。これはちょうど、（僖公十五年の傳文が）「晦日に夷伯の廟に雷が落ちた」ことにちなんで、天子諸侯の制を明らかにしたまでで、夷伯が魯の大夫人ではないということを言つてゐるのではない、のと同じである。甯「私」の先君「范汪」と蔡司徒「蔡謨」とが、この問題について詳しく論じた。江熙が言う「葬には『公』を稱し、五等の最上級を擧げるのに、改葬の禮では總服し、五服の最下級を擧げるのは、死からはるか遠くへだたつてゐるからである。天子諸侯は服を易えて葬る。神明と交通するには全くの凶服ではいけないと考えるからである。まして、遠ければなおさらである。だから、改葬の禮では、その服は軽いものだけなのである。『緇』『遠い』と言ふのは、總服する理由を解釋したのである」と。

④改葬の服については、やかましい議論がある〔cf. 藤川正數『魏晉時代における喪服禮の研究』の第二章「改葬の服について」〕が、ここでは追求しない。傳文の解としては、江熙説の方が妥當と考えられる。

團或曰 卻尸以求諸侯

⑤尸を七年もそのままにしておいて、諸侯に會葬を要求するというのは、人の情としてありえない。

⑥范甯は「或曰」の説を非としているようだが、上の「傳曰」の説〔范甯によれば、實際に改葬したということではない〕と、どこに違いがあるというのだろうか。どうも范甯の眞意がわかりかねる〔もしかすると、「或曰」の説を非とするのではなくて、單に、桓王の葬は、人情に反するまちがつた行爲である、と説明してゐるのかもしれない？〕。とにかく、上の「傳曰」の説は、やはり、實際に改葬したという意味に解した方がよからう。そうして始めて、「或曰」の説との違いがはっきりするのである。なお「卻尸」について、補注では「卻」を退の意として、「下柩の時期を遅らせた」と解する。

⑦天子志崩 不志葬 必其時也 何必焉 舉天下而葬一人 其義不疑也

志葬 故也 危不得葬也

曰 近不失崩 不志崩 失天下也

⑧京師は魯から遠くないから、赴告の命は十日以内にとどく。（したがつて）魯の史官が崩を記さないとすれば、亂が生じたことがわかる。

⑨獨陰不生 獨陽不生 獨天不生 三合然後生

⑩徐邈が言う「昔の人は『萬物は陰を負つて陽を抱き、沖氣が調和をな

す』〔《老子》第四十二章〕と稱している。とすれば、傳の所謂『天』

とは、おそらく、沖和の功であつて、靈妙な理が由來するところのもの、を名づけたのであろう。二氣を調和し、美を發揮するものは、柔剛によってその働きを限定することが出來ず、陰陽によってその名を分別することが出來ない。だから、これを冥極にゆだねて、『天』というのである。いったい、生きものは、靈知を天から稟け、形を二氣からとる。だから、さらに『獨天不生』と言うのである。三者が合してはじめて、形・神が生じ、理が具わるのである」と。

團故曰 母之子也可 天之子也可

尊者取尊稱焉 卑者取卑稱焉

⑤王者は尊いから天子と稱し、衆人は卑しいから母子と稱する。

團其曰王者 民之所歸往也

經秋紀季以鄒入于齊

⑥「季」は紀侯の弟である。

團鄒 紀之邑也 入于齊者 以鄒事齊也 入者 内弗受也

⑦雍が言う「紀の國は微弱で、齊が并吞しようとしていた。紀季は存亡の分かれめを深く見て、國家が危くなることを大變心配した。それ故はるばる遠行して、鄒をひきいて齊に事えたのである。（その結果）

もろもろの子孫は泯びず、宗廟はながく存続した。《春秋》は彼を賢とするから、（「季」と）字をいつて褒めるのである。齊は他人の邑を受け、他人の國を滅した。だから、義として受けてはならない（と

する）のである」と。

⑧この注では、『公羊傳』に従つて紀季を賢としているが、補注にも指摘しているように、傳文の「入者内弗受也」というのは、一般にはむしろ、入った者を譏る表現である。なお、注の「庶」は、こいねがうの意味かもしれない。

經冬公次于郎

團次 止也 有畏也 欲救紀而不能也

⑨齊を畏れたのである。

〔莊公四年〕

經四年春王二月夫人姜氏饗齊侯于祝丘

⑩「饗」は食の意味である。二君が相まみえる禮である。一般に、會に月を書くのは、時事に危險があることを著わすためである。（傳文では）公の場合について例を發しているが、他の場合にも通用する。「祝丘」は魯地である。

⑪「公如 往時 正也 致月 故也 往月 致月 有懼焉爾」〔莊公二十三年傳文〕、「公如 往時致月 危致也 往月 致時 危往也 往月致月 惡之也」〔定公八年傳文〕等を指すか？

團饗 甚矣

⑫非禮がひどいので、謹んで月をいつたのである。

團饗齊侯 所以病齊侯也

經三月紀伯姬卒

④隱公二年に履緌が迎えにきた女である。内〔魯〕女の卒には例として日をいう。伯姬は國を失ったから略にする。それ故、月（だけ）をいうのである。

團外夫人不卒 此其言卒何也 吾女也 適諸侯 則尊同 以吾爲之變卒之也

⑤禮では、諸侯は傍期〔傍系の親族で期の喪に服すべきもの〕以下とは（喪服關係を）絶つ。（しかし）姑姊妹・女子子が國君に嫁いだ場合には、尊が自分と同じであるから、彼女のために大功九月の喪に服する。（つまり）服さないという例を變えるのである。とすれば、大夫のところに嫁いだ場合には、卒を書かない。

輔補注及び柯劭忞は、「變」を、日常から變わること、つまり服喪するの意であるとする。

經夏齊侯陳侯鄭伯遇于垂

⑥傳例に言う「約束せずに會するのを『遇』という。『遇』とは、お互いに氣が合ったということである」〔隱公八年傳文〕と。

經紀侯大去其國

團大去者 不遺一人之辭也 言民之從者四年而後畢也

紀侯賢而齊侯滅之 不言滅而曰大去其國者 不使小人加乎君子

⑦「滅」と言わずに、「大去其國」と言うのは、思うに、無道な強國を抑えて、有道の弱國をのぼす〔or無道な強國が有道の弱國にまさるの

を抑える〕ためであり、行くも止まるも自分達の考え次第であって、

齊が滅ぼせるものではない、かのように表現したのである。何休が言っている「《春秋》では、楚の世子商臣がその君を弑し〔文公元年〕、その後、江・六を滅した〔文公四年・五年〕が、『大去』とは言っていない。また、『大去』では、齊が滅したということははっきりしない。

（したがって、傳文からは）ただ、小人に君子をしのがせないために『滅』と言わず、（齊の）襄公の惡を見のがすためにかえて『大去』とした、ということがわかる」〔穀梁廢疾〕と。鄭君がこれを釋して言っている「商臣はその父を弑したのだから、大惡人であり、單に小人とすることは出来ない。江・六の君もまた、紀侯のような民心獲得の賢がなかったのだから、『滅』を變えて『大去』と言うことは出来ないのである。元年の冬に『齊の師が紀を遷した』とあり、三年に『紀季が鄆をひきいて齊に入った』とあり、今ここに『紀侯がその國を大去した』とある。これだけで、齊が滅したことを示すのに十分である。もしかりに、『滅』を變えて『大去』と言うのが、襄公の惡をみのがすことである、と考えるとすれば、それは經の方であって、傳ではない。それに、『春秋』は事に因って義をあらわすから、ここ以外でも、人を滅ぼすことを罪とする場合はおのづと多いのである」〔釋穀梁廢疾〕と。

經六月乙丑齊侯葬紀伯姬

團外夫人不書葬 此其書葬何也 吾女也 失國 故隱而葬之

⑤「隱」は痛の意味である。卒に日をいわず、葬に日をいうのは、紀の滅亡を閔んでである。

經秋七月

經冬公及齊人狩于郕

⑥「郕」は齊地である。

團齊人者 齊侯也 其曰人何也 卑公之敵 所以卑公也

⑦内「魯」の人間には、公を（直接に）貶することは出来ない。

團何爲卑公也 不復讎而怨不釋 刺釋怨也

〔莊公五年〕

經五年春王正月

經夏夫人姜氏如齊師

團師而曰如 衆也

⑧師が多人數で國のようであったから、「如」と言えるのであって、「如

齊侯」のようには言えない、ということを行っているのである。

師でも多人數でなければ「如」と言えないのであるから、補注にも指

摘するように、注の後半はあまり適當とは言えない。

團婦人既嫁 不踰竟 踰竟 非禮也

經秋邠黎來來朝

⑨「黎來」は名である。

團邠 國也 黎來 微國之君未爵命者也

經冬公會齊人宋人陳人蔡人伐衛

⑩惠公朔を納めようとしたのである。

團是齊侯宋公也 其曰人何也 人諸侯 所以人公也 其人公何也 逆天

王之命也

⑪王は朔を立てたくなかったのである。

〔莊公六年〕

經六年春王三月王子突救衛

⑫徐邈が言う「諸侯は王の命令をきかず、朔はそのまま篡奪することができ、王の威勢は地におちて、危険であった。だから、月をいったのである。衛を救援するのは義として善であるから、（名「or字」を稱して）子突を重んじたのである。（しかし）成功しなかったから、（月をいって）危険を著わしたのである」と。

團王人 卑者也 稱名 貴之也

⑬何休は「『子』と稱すれば、名ではない」「『穀梁廢疾』と考えた。鄭君はこれを釋して言っている「王人は賤者であるから、記録するときには、名を書けばよい。今ここでは、命令を奉じて衛を救援したから、貴んだのである。貴んだのであれば、『子突』が字であることが明らかにわかる。ここの『名』は『字』の誤りとするべきである」「『釋穀梁廢疾』と。徐乾が言う「『王人』とは卑者の稱であって、ただ『王

人』とだけ稱するのが當然である。今ここでは、よく天子の命を奉じ、衛を救援して諸侯を拒むことが出来たから、(特に) 名を加えて、貴んだのである。僖公八年に『公會王人齊侯』とあるのが、卑者の通常の稱である」と。

團善救衛也 救者善 則伐者不正矣

經夏六月衛侯朔入于衛

團其不言伐衛納朔 何也

⑨九年には「伐齊納糾」とあって、「納」と言っているから。

團不逆天王之命也

⑩諸侯が王の絶った人物を納めることを許さないのである。

團入者 内弗受也 何用弗受也 爲以王命絶之也 朔之名 惡也 朔入

逆 則出順矣 朔出入名 以王命絶之也

經秋公至自伐衛

團惡事不致 此其致何也

⑪襄公九年では、ちょうど穆姜の喪があったのに、諸侯と會して鄭を伐ったため、もどったことをいわないから。

附この注は、補注にも指摘するように、襄公九年の何休の注にもとづくものであり、襄公九年の傳文と矛盾する。

團不致 則無用見公之惡事之成也

經螟

經冬齊人來歸衛寶

團以齊首之 分惡於齊也 使之如下齊而來我然 惡戰則殺矣

⑫衛がみづから齊に寶をおくり、齊を經過した後にながに國に與えられた、かのように表現したのである。齊がその事的首領となれば、魯が王人と戦った罪は減じられる。

附「下齊」について。范注では、齊に寶をおくるとあるから、「(寶が)齊に下る」とでも読んでいるのであるか「？」。また補注では、齊がへり下るとしている。「(齊が)齊(自分)を下にする」とでも読んでいるのであるか「？」。

〔莊公七年〕

經七年春夫人姜氏會齊侯于防

⑬「防」は魯地である。

團婦人不會 會 非正也

經夏四月辛卯昔恒星不見

團恒星者 經星也

⑭「經」は、常の意味である。常の列宿をいう。

團日入至於星出 謂之昔 不見者 可以見也

經夜中星隕如雨

⑮「如」は、而である。星が隕ちたうえに、雨も降ったのである。

附「如」を而とするのは、劉歆・杜預による。『左傳』には「與雨偕」

とあるから、そう解せられるが、ここでは普通に「ごとし」と讀むべきであらう。

團其隕也如雨 是夜中與

④星が隕ちたうえに雨も降ったとなれば、暗かったにちがいない。(それなのに) どうして、夜の眞中であることがわかったのか。

團春秋著以傳著 疑以傳疑

④實錄であることを明らかにしたのである。

團中之幾也 而曰夜中 著焉爾

④「幾」は微の意味である。星が隕ちたうえに雨も降り、眞中は微妙でわかりにくいはずである。それなのに「夜中」と言っているからには、當然、實際に明らかだったのであって、憶測したわけではない。

④補注にも指摘するように、注の第二句「星既隕而雨」は不要である

〔眞中はいつも微妙でわかりにくいのであるから〕。

團何用見其中也

失變而錄其時 則夜中矣

④星の異變の始めはのがしたが、隕ちた時を録しておき、水時計ではかって、夜の眞中であることを知ったのである。

團其不曰恒星之隕 何也 我知恒星之不見而不知其隕也

我見其隕而接於地者 則是雨說也

④言わんとする意味は、上からやって来て下に接するのを見てはじめて、「雨星」といえるのであって、今ここでは、ただ下にあるのを見ただけだから、「隕星」というのである、ということである。

④この注はおかしい。補注にも指摘するように、ここは設問の辭であり、この段階では、未だ上下は問題にされていない。

團著於上見於下 謂之雨 著於下不見於上 謂之隕 豈雨說哉

④經が「雨星」と言えずに「隕星」と言うわけを解釋したのである。鄭君が言っている「衆星列宿は諸侯の象であり、これが現われないということは、諸侯が天子の禮義法度を棄てるということである」と。劉向が言っている「(星が)隕ちるのは、諸侯がおちぶれて、その地位を失うことの象であり、また、夜の眞中で隕ちるのは、その性命を完うできず、途中で命をおとすことの象である」と。

④「鄭君曰」について。『開元占經』卷七十六雜星占の「恒星不見」二の項に、「鄭玄曰」として、同様の文が引かれている。その直前に「許慎曰」として、違った内容の文が引かれていることからして、これはおそらく『駁五經異義』の文であらう。

「劉向曰」について。『漢書』五行志下之下に、同様の文がみえる。

經秋大水

團高下有水災曰大水

經無麥苗

團麥苗同時也

④麥と黍稷の苗とが同時に死んだのである。

經冬夫人姜氏會齊侯于穀

⑨「穀」は齊地である。

團婦人不會 會 非正也

〔莊公八年〕

經八年春王正月師次于郎以俟陳人蔡人

⑩時に、陳・蔡が魯を伐とうとした。だから、師を出して待ちかまえたのである。

團次 止也 俟 待也

經甲午治兵

團出曰治兵 習戰也 入曰振旅 習戰也

⑪「振」は、整である。「旅」は、衆である。

團治兵而陳蔡不至矣 兵事以嚴終

⑫嚴整をもって事を終えたから、敵はやって來なかつたのである。

團故曰善陳者不戰 此之謂也

善爲國者不師

⑬徳によって導き、禮によってととのえるのである。江熙が言う「鄰國がこちらをみて、親戚のように親しみを覚えるから、師など必要がない」と。

團善師者不陳

⑭師衆がもともと嚴整であるから、軍を見せびらかし列陳するまでもないのである。江熙が言う「最上の兵法は、謀略によって敵を伐つことである。どうして陳するに及ぼうか」と。

附『孫子』謀攻篇に「上兵伐謀 其次伐交 其次伐兵 其下攻城」とある。

團善陳者不戰

⑮軍陳が嚴整であるから、敵は見ただけで畏れをなし、戦おうとしないのである。

團善戰者不死

⑯兵を勝算のある所に投入するから、死ぬ者がいないのである。江熙が言う「備えのあるところを避けて、備えのないところを攻めれば、死なない」と。

附『管子』霸言篇に「釋實而攻虛 釋堅而攻脆」とある。

團善死者不亡

⑰民は自分の命を捧げ、逃げ去る者などいないのである。江熙が言う「（君・親の）危険を見て命をなげ出し、（臣・子の）義として君・親を生きながらえさせれば、死んでも、生きているのと同然である」と。

附『論語』憲問篇に「見利思義 見危授命」とある。なお、舊説では、「亡」を、國が亡ぶの意とする。

經夏師及齊師圍郕 郕降于齊師

團其曰降于齊師何 不使齊師加威於郕也

⑱郕は同姓の國であるのに、齊といっしょに伐った。これは用兵の過りである。だから、齊には武功がなく、郕が自分から降った、かのよう表現したのである。

補注は、『左傳』を参考にして、郕を伐ったのは齊だけであるとする。

經秋師還

團還者 事未畢也 遯也

④ 郕がすでに降ったのに、おわっていないという表現をとっているのは、思うに、同姓の國を滅したことをはばかって、その事を果さなかったというふうを示したのである。

補注は、『左傳』を参考にして、「遯也」を、「(魯は齊を畏れて、齊を伐たずに) 退き逃げたのである」と解する。つまり、范注とは「遯」の解釋が異なり、また「事」の内容も異なる。

經冬十有一月癸未齊無知弑其君諸兒

團大夫弑其君 以國氏者 嫌也 弑而代之

〔莊公九年〕

經九年春齊人殺無知

團無知之挈 失嫌也 稱人以殺(大夫) 殺有罪也

附王念孫は、傳文の「大夫」の二字を、衍文とする。

經公及齊大夫盟于暨

④ 「暨」は魯地である。

團公不及大夫

④ 《春秋》の義では、内〔魯〕の大夫は諸侯と會することが出来るが、

公は外の大夫と盟うことが出来ない。尊卑を明らかにし、内外を定めるため(の手立て)である。今ここでは、齊の國に君がおらず、その盟にあたる者が必要であった。だから、權宜の處置をもって(他國と?) 通じざるを得なかったのである。

團大夫不名 無君也

④ 禮では、君の前で、臣は名をいう。齊には君がないから、大夫に名をいわないのである。

團盟納子糾也

不日 其盟渝也

④ 盟を變えて、小白を立てたのである。

團當齊無君 制在公矣 當可納而不納 故惡内也

經夏公伐齊納糾

④ 「子糾」と言わずに、ただ「糾」と言うのは、魯にかくまわれていたことを明らかにするために、單舉したのである。《春秋》では、内〔魯〕の公子は、大夫である者に限って、その出奔を書く。子糾は大夫ではないから、その出奔を書かなかったのである。鄭の忽はすでに命を受けて位を嗣いでいたから、その出奔を書いたのである〔桓公十一年〕。とすれば、位が嫡嗣でない場合、官が大夫でない場合は、いづれもみな、例として省略する、ということになる。だから、許叔・蔡季・小白・重耳たちも、全て出奔を書かないのである。

附この注では、外の事例を問題にしているのに、なぜ「春秋於内公子爲

大夫者 乃記其奔」などと言うのか、よくわからない。

なお、注の「盟」は「明」の誤りと思われる「疏では「明」に作っている」。

團當可納而不納 齊變而後伐 故乾時之戰不諱敗 惡内也

⑩何休が言っている「三年では『溺が齊の師と會して衛を伐った』から、貶して名をいっている。四年では『公が齊の人と郕で狩をした』から、卑んで『人』と言っている。（ところが）今ここでは、みづから讎の子を納めるのに、かえって、それが晚いことをにくんでいる。これはどひどい恩義の相違はない」『穀梁廢疾』と。鄭君がこれを釋して言っている「讎に報復しなければ、怨みはとけないはずなのに、魯は怨みをといて、しばしば仇讎と會した。（しかし）一度その臣を貶し、一度その君を卑めば、魯の臣子を責めるのに充分であり、その他は同じであるから、二度は讒らないのである。『齊を伐って糾を納めようとした』ことに關しては、（容易に）納めることが出来る狀況であるのに、（すぐに）納めなかった、ことを讒ったのである。これはこれで正しいのであって、義が相反することはない」『釋穀梁廢疾』と。甯「私」が思うに、讎とはどんな時でも交通してはならないのであるから、たとえ、納めるのが晚くなって、讎の子の身を保全できなくとも、どうして魯をにくむ理由になるうか。とすれば、乾時の戦で「敗」を諱まないのも、「齊の人が子糾を取つて、これを殺した」のも、いづれもみな、その文を曲げず、その事を直書したまでであり、内「魯」の大惡が、貶絶を待たずに明らかなのである。二十四年に、公が齊に

行つて親迎したのも、同類である。「惡内」という言葉は、傳がおそらくまちがったのであろう。

經齊小白入于齊

團大夫出奔 反以好曰歸

⑪成公十四年に「衛孫林父自晉歸于衛」とある。

團以惡曰入

齊公孫無知弑襄公 公子糾公子小白不能存 出亡

⑫子糾は魯に奔り、小白は莒に奔った。

團齊人殺無知而迎公子糾於魯 公子小白不讓公子糾先入 又殺之于魯

故曰齊小白入于齊 惡之也

經秋七月丁酉葬齊襄公

⑬諸公子が争つて立ち「or立つことを争い」、國が亂れた。だから、危ぶんだ「つまり日をいった」のである。

經八月庚申及齊師戰于乾時 我師敗績

⑭「及」の上にくるはずの主語を言わないのは、魯の卑者だからである。

「乾時」は齊地である。

附『公羊』・『左氏』では、主語を公としている。

經九月齊人取子糾殺之

⑮「子糾」と言うのは、君となるべき身分であることを明らかにしたのである。

附この注は、公羊傳文にもとづく。

團外不言取 言取 病内也 取 易辭也 猶曰取其子糾而殺之云爾

④「自分たち齊の子糾を、今取って殺した」と言うようなものである。

魯が救護できなかった、ということ言うのである。

團十室之邑 可以逃難 百室之邑 可以隱死 以千乘之魯而不能存子糾

以公爲病矣

經冬浚洙

團浚洙者 深洙也 著力不足也

⑤齊からの兵難を畏れたのである。

附この注は、公羊傳文にもとづく。

〔莊公十年〕

經十年春王正月公敗齊師于長勺

⑥「長勺」は魯地である。

團不日 疑戰也

⑦「疑戰」とは、日をきめずに戦い、詐巧を用いて襲撃しあう、ことをいう。

團疑戰而曰敗 勝内也

⑧「勝内」とは、勝利が内〔魯〕にあったことをいう。

附俞樾は、「勝」を甚と同義として、「魯をひどいとする」と解している。

經二月公侵宋

團侵時 此其月何也 乃深其怨於齊 又退侵宋以衆其敵 惡之 故謹而月之

經三月宋人遷宿

團遷 亡辭也

⑨人に遷されてしまえば、國家〔or 國・家〕を回復することは出来ない。だから、「亡辭」というのである。閔公二年に「齊人遷陽」とあるのもそうである。

團其不地 宿不復見也

⑩國が亡んで、二度と經文にあらわれないのである。「滅」と言わないのは、「滅」と言えば、その君を弑し、その宗廟社稷を滅し、そこでそのまま所有し、その民を遷さなかった、ことになるからである。

團遷者 猶未失其國家以往者也

⑪自分で遷る場合をいう。僖公元年の「邢遷于夷儀」、成公十五年の「許遷于葉」の類である。その二つの傳で「『遷』とは、なおその國家〔or 國・家〕をたもち、以〔ひきい〕て（他所へ）往く場合である」と言い、この傳で「『遷』とは、なおその國家〔or 國・家〕を失わず、以〔ひきい〕て（他所へ）往く場合である」と言うのは、相通相補の表現である。

經夏六月齊師宋師次于郎

團次 止也 畏我也

經公敗宋師于乘丘

⑧「乘丘」は魯地である。

團不日 疑戰也 疑戰而曰敗 勝内也

經秋九月荆敗蔡師于莘

⑨「莘」は蔡地である。

經以蔡侯獻武歸

團荆者 楚也 何爲謂之荆 狄之也 何爲狄之 聖人立 必後至 天子

弱 必先叛 故曰荆狄之也

蔡侯何以名也

⑩僖公十五年には、秦が「晉侯を獲た」とあって、名をいってないから。

團絶之也 何爲絶之 獲也

中國不言敗

⑪宣公十二年には「晉荀林父帥師及楚子戰于郟 晉師敗績」とあって、

「敗晉師」とは言っていないから。

團此其言敗何也 中國不(言)敗 蔡侯其見獲乎 其言敗(何也) 釋蔡侯

之獲也

以歸猶愈乎執也

⑫中國のために、執えられたことを諱むから、「以歸」と言うのである。

⑬ここの傳文は、底本のままでも一應意味が通じるが、俞樾の説に従っ

て、()内を衍文とみることにする〔cf. 昭公二十三年傳文〕。

經冬十月齊師滅譚 譚子奔莒

⑭桓公十一年には「鄭忽出奔衛」とあり、その傳は「名をいうのは、國

を失ったからである」と言っている。十六年には「衛侯朔出奔齊」とあり、その傳は「朔に名をいうのは、悪いからである」と言っている。とすれば、出奔に名を書くことには、二つの義があることになる。譚子は國が滅んだのに、名をいわない。おそらく、罪がなかったからであらう。一般に、奔を書くのは、社稷と運命をともしなかったことを責めるためである。(ここで)「出」と言わないのは、「國が滅んでしまつて、そこから出るという根據地がないからである」〔公羊傳文〕。他の箇所もみな、これに倣う。

〔莊公十一年〕

經十有一年春王正月

經夏五月戊寅公敗宋師于鄆

⑮「鄆」は魯地である。

團内事不言戰 舉其大者

其日 成敗之也

⑯日をとりきめて列陳し、詐巧を用いて襲撃し合わず、師を敗る際の正しい方法にかなっていた。だから、「成」というのである。

⑰この注では、「成」の主語を魯として、立派に果すの意としているようだが、主語を孔子《春秋》ととり、成立・完成せしめる〔顯彰する〕の意とする方がよからう。

團宋萬(之)獲也

附王引之の説に従って、「之」を衍文とみる。

經秋宋大水

團外災不書 此何以書 王者之後也 高下有水災曰大水

經冬王姬歸于齊

團其志 過我也

〔莊公十二年〕

經十有二年春王三月紀叔姬歸于鄫

⑩「鄫」は紀の邑である。紀季がそれをひきいて齊に入った〔莊公三年〕ところのその邑である。紀國が減んでいたから、鄫に歸ったのである。

團國而曰歸 此邑也 其曰歸何也

吾女也 失國 喜得其所 故言歸焉爾

⑪江熙が言う「四年に齊が紀を滅した。『滅』と言わずに、『大夫』と言ったのが、(特に)義を示すためであってみれば、(實際には)國は滅んだのである。叔姬が『(魯に)來歸したことを書かなかったのは、歸省でもなく、離縁でもなかったからである』〔杜預の注〕。叔姬は節を守って何年も過ぎた。紀季は鄫をひきいて齊に入り、二心はいだかなかったけれども、(齊の)襄公は無慈悲であったから、むやみに信じるわけにゆかなかった。桓公が立つと、德行が天下にゆきわたりはじめた。それで、叔姬は鄫に歸り、魯はその女が希望をかなえら

れたことを喜んだのである」と。

附「喜」の直接の主語は、補注にも指摘するように、魯ではなくて、孔子《春秋》であろう。

經夏四月

經秋八月甲午宋萬弑其君捷

⑩「捷」は、宋の閔公である。

團宋萬 宋之卑者也 卑者 以國氏

經及其大夫仇牧

團以尊及卑也 仇牧閑也

⑩仇牧は、その君の扞衛〔守り手〕であったから、殺されたのである。桓公二年の傳に「臣が死ぬと、君はその名を稱するに忍びない」とある。今ここでは、仇牧に「orと」名を書いているから、宋の君が先に弑されたことがわかる。

經冬十月宋萬出奔陳

⑩宋はぐずぐずして賊を討たず、出奔させるようにしてしまった。だから、謹識して、月をいうのである。

〔莊公十三年〕

經十有三年春齊人宋人陳人蔡人邾人會于北杏

⑩「北杏」は齊地である。

團是齊侯宋公也 其曰人何也 始疑之 何疑焉

桓非受命之伯也 將以事授之者也

⑤諸侯が、しばらく齊侯を推して伯事を行なわせようとした、ということ言うのである。

附ここの主語は、補注にも指摘するように、諸侯ではなくて、孔子《春秋》であらう。

團曰 可矣乎 未乎

⑥邵が言う「『齊桓は受命した伯ではないけれども、諸侯は推している。それならば、伯としてかわまないだろうか、まだだめだろうか』と疑うのである」と。

團舉人 衆之辭也

⑦「人」と稱する。王命ではなく、衆人が伯事を授けた、ということ言うのである。

附注の「稱人」は、補注にも指摘するように、論理が不明である。また、「衆」を衆授と解するのは、齊も「人」と稱していることからして、補注にも指摘するように、おかしい。

經夏六月齊人滅遂

團遂 國也 其不日 微國也

經秋七月

經冬公會齊侯盟于柯

⑧「柯」は齊地である。

團曹劌之盟也 信齊侯也

⑨曹劌の盟のことは、(穀梁の)經・傳に記載がない。おそらく、信のある盟だったのであらう。『公羊傳』に「むり強いされた盟はやぶってもかわまないのに、桓公は反故にできなかった。曹子に復讐してもかわまないのに、桓公は怨まなかった。桓公の信が天下にあらわれたのは、柯の盟からである」とある。

團桓盟雖內與不日 信也

⑩公の盟には例として日をいい、外諸侯の盟には例として日をいわない。(齊)桓の大信が遠くまであらわれたから、公が盟に参加しても、日をいわないのである。

〔莊公十四年〕

經十有四年春齊人陳人曹人伐宋

經夏單伯會伐宋

團會事之成也

⑪討伐の事が完成してしまってから、單伯がようやくやって來たのである。

經秋七月荆入蔡

團荊者 楚也 其曰荊何也 州舉之也

州不如國

㊦「荆」と言うのは、「楚」と言うのに及ばない。

傳國不如名

㊦「楚」と言うのは、「介葛廬」「僖公二十九年」と言うのに及ばない。

傳名不如字

㊦「介葛廬」と言うのは、「邾儀父」「隱公元年」と言うのに及ばない。

經冬單伯會齊侯宋公衛侯鄭伯于鄆

㊦「鄆」は衛地である。

傳復同會也

㊦諸侯は、(齊)桓を推して伯にしようとしていた。だから、またいっしょにここで會して、相談したのである。

〔莊公十五年〕

經十有五年春齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯會于鄆

傳復同會也

㊦(齊)桓を推して伯にしようとしていたから、またここで會したのである。

經夏夫人姜氏如齊

傳婦人既嫁 不踰竟 踰竟 非禮也

經秋宋人齊人邾人伐鄆

㊦宋は兵をつかさどったから、齊の上におかれているのである。國をな

らべるときは、大小を基準にし、夷狄は下にくる。征伐の場合は、兵をつかさどったものが先にくる。これが《春秋》の常法であって、他の箇所もみな、これに倣う。

㊦この注は、莊公十六年の杜預の注と、ほぼ同文である。

經鄭人侵宋

經冬十月

〔莊公十六年〕

經十有六年春王正月

經夏宋人齊人衛人伐鄭

經秋荆伐鄭

經冬十有二月會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯滑伯滕子同盟于幽

㊦「幽」は宋地である。

傳同者 有同也 同尊周也

不言公 外内寮一疑之也

㊦十三年の春に北杏で會したとき、諸侯はみな「齊桓は受命した伯ではないが、いっしょに彼を推して伯事を行なわせたい。そうしてかまわないだろうか」と疑った。今、この年においては、諸侯はともに桓を推したが、魯は齊と讎の關係にあったから、外内同じく、公が齊に事

えてよいかどうか疑った。(だから)會に「公」を書かないことによ
って、その疑いを著わしたのである。同官を「寮」という。(ここで
は)諸侯のことである。二十七年に幽で同盟し、そのときに齊侯を伯
とするのである。

④十三年の「疑」の主語は、この注では諸侯とするが、補注にも指摘す
るように、孔子《春秋》とするべきであろう「十三年の注の「邵曰」
では、孔子としているようにみえる」。また、この年の「疑」の主語
も、この注では外内の諸侯とするが、補注にも指摘するように、やは
り孔子《春秋》とするべきであろう。それから、「一」について、こ
の注では同一の意とするが、疏に引く舊解のように、一度の意とする
べきであろう。

經邾子克卒

傳其曰子進之也

⑤齊に附隨して周室を尊んだから、王命によって、その爵を進められ
たのである。

⑥「進」の直接の主語は、補注にも指摘するように、王ではなくて、孔
子《春秋》であろう。

〔莊公十七年〕

經十有七年春齊人執鄭詹

團人者衆辭也 以人執 與之辭也

⑦執えることをゆるす「orゆるして執えさせる」のである。

團鄭詹 鄭之卑者 卑者不志 此其志何也 以其逃來志之也 逃來則何
志焉

將有其末 不得不錄其本也

⑧「末」とは、(下の)「逃來」をいう。

團鄭詹 鄭之佞人也

經夏齊人殲于遂

團殲者 盡也 然則何爲不言遂人盡齊人也 無遂之辭也 無遂則何爲言
遂

其猶存遂也

⑨齊の守備兵を殺すことが出来たから、遂が存在しているかのように表
現したのである。

⑩「猶」は、この注では「なおゝごとし」と讀んでいるようだが、柯
劭忞の説に従って、「それでもなお」の意とするべきであろう。

團存遂奈何 曰 齊人滅遂 使人戍之 遂之因氏飲戍者酒而殺之 齊人
殲焉

殲焉

此謂狎敵也

⑪「狎」は、輕と同じである。

經秋鄭詹自齊逃來

團逃義曰逃

⑫(春に)齊が「人」を稱して執えたのは、有罪を執えたということだ

ある。罪を得た者を執えたから、「義」と言うのである。(したがって)今ここで、そこから逃げたのは、「義から逃げた」ということになる。

經冬多麋

④京房の『易傳』に「正を廢して淫をなし、火をおこすのが明るくないと、國に麋が多い」とある。

⑤『漢書』五行志中之上に、ほぼ同文がみえる。

〔莊公十八年〕

經十有八年春王三月日有食之

⑥團不言日 不言朔 夜食也 何以知其夜食也 曰王者朝日

⑦王者の法制では、「天子は玄衣と冕を身につけて、(早朝)東門の外で日〔太陽〕に朝する」〔禮記〕玉藻。だから、日が出たとき、虧けたところが残っているのを目にし、それによって夜食がわかったのである。何休が言っている『春秋』が『月が日を食した』と言わないのは、形がないから、疑わしいものを取り去ったのである。夜食は何を根據に書くのか〔穀梁廢疾〕と。鄭君がこれを釋して言っている「一晝と一夜とが合っして一日となる。今ここは、朔日に日が出たとき、その食の〔orその食は、orその食されて〕虧けたところがまだ回復していなかったから、當然夜に食したはずだ、とわかったのである。夜食であれば、前の月の晦日のことに屬する。したがって、穀梁子は疑わしいものとはしなかったのである」〔釋穀梁廢疾〕と。

團故雖爲天子 必有尊也 貴爲諸侯 必有長也 故天子朝日 諸侯朝朔

經夏公追戎于濟西

⑧團其不言戎之伐我何也 以公之追之 不使戎邇於我也

⑨「邇」は近と同じである。戎を魯に接近させない。だから、境内に入つて遠くから様子をうかがい、ひきさがった、かのように表現したのである。

⑩團于濟西者 大之也 何大焉 爲公之追之也

⑪戎は遠く濟西までやって來たのであるから、徒衆が大勢であったにちがいない。公が自分で追い拂ったことから、たしかにそうであったことがわかる。ということを行っているのである。

⑫この注は「大」を大勢の意とするが、補注にも指摘するように、おかしい。『公羊傳』を參考にして、大とする〔尊ぶ、ほめる〕の意とするべきであろう。

經秋有蜚

⑬「蜚」とは、短狐である。おそらく、砂を口に含んで、人を射ったのであろう。京房の『易傳』に、「忠臣が善を進め、君がさとらなければ、その咎として國に蜚が生じる」とある。

⑭「京房易傳曰」以下は、『漢書』五行志下之上に、ほぼ同文がみえる。

⑮團一有一亡曰有 蜚 射人者也

經冬十月

〔莊公十九年〕

經十有九年春王正月

經夏四月

經秋公子結媵陳人之婦于鄆 遂及齊侯宋公盟

團媵 淺事也 不志 此其志何也 辟要盟也

⑨魯は本來、公子結に二國との盟を強要させ、自國を大國に託そうとしていたのだが、盟えるかどうか、はっきりしなかった。だから、婦に媵をおくることを名目にし、盟えれば盟うし、だめなら止めることにした。この行には、口實〔or 理〕があったのである。

團何以見其辟要盟也 媵 禮之輕者也 盟 國之重也 以輕事遂乎國重

無說

⑩輕事を重事が繼いでいて、他の異説がないから、要盟を避けたことがわかる。

⑪この「説」は、經文をいうのか、傳義をいうのか、よくわからない。

范注もはっきりしないが、一應、傳義と解しているようにみえる〔？〕。
なお、柯劭忞は「師無此義」と明言している。

團其曰陳人之婦 略之也

⑫事を繼ぐために、便宜上、媵事を記録したにすぎないから、略して「陳人之婦」と言い、その主名をおかない〔or きめない〕のである。

團其不日 數渝 惡之也

經夫人姜氏如莒

團婦人既嫁 不踰竟 踰竟 非正也

經冬齊人宋人陳人伐我西鄙

團其曰鄙 遠之也 其遠之何也 不以難邇我國也

〔莊公二十年〕

經二十年春王二月夫人姜氏如莒

⑬夫人は二年つづけて莒にいった。過ちを犯して改めないのは、無禮のひどいものである。だから、謹識して月をいったのである。

團婦人既嫁 不踰竟 踰竟 非正也

經夏齊大災

團其志 以甚也

⑭外災は（普通）記さない。「甚」とは、災が人に及ぶことをいう。外災には、例として時をいう。

經秋七月

經冬齊人伐我

⑮經文の「我」は、補注に従って、「戎」に改める。

〔莊公二十一年〕

經二十有一年春王正月

經夏五月辛酉鄭伯突卒

經秋七月戊戌夫人姜氏薨

團婦人弗目也

⑤鄭嗣が言う『弗目』とは、その地を名指して言わないことをいう。

婦人には外事がないから、居所は定まっている。だから、薨に地を書かないのである。僖公元年の傳で『夫人の薨には地をいわない』と言、ここで『目さない』と言っているのは、おそらく相通相補の表現であろう。定公九年に『得寶玉大弓』とあり、傳で『羞を目さない』と言っているのも、おそらくこの類であろう」と。江熙が言う「文姜には公を弑した罪があるのに、その罪を目さないのである」と。

經冬十有二月葬鄭厲公

〔莊公二十二年〕

經二十有二年春王正月肆大眚

團肆 失也 眚 災也

⑥『易』で「過ちを赦し、罪を宥す」〔解卦辭〕と稱し、『書』で「眚災を肆赦する」〔舜典〕と稱し、この經で「大眚を肆する」と稱して

いるのは、いづれもみな、罪人を放赦し、もろもろの古いものをあら
いおとすのであり、これは必要な時に（特別に）行なうことで、國を
治める常法ではない。

⑦この注は、杜預の注にもとづく。

團災 紀也 失 故也

⑧「災」とは、罪惡をいう。「紀」は、治めることである。罪のある者
は、當然治めるべきである。今ここで、それを赦免したのは、文姜ゆ
えである。

團爲嫌天子之葬也

⑨文姜の罪は誅絶に値し、誅絶の罪をえたものには葬をいわない。もし、
もろもろの惡人を赦免しないで、葬を書けば、天子が許可したかにま
ぎらわしい。赦免して始めて、葬れる〔葬を書ける〕、ということ
を明らかにしたのである。

經癸丑葬我小君文姜

團小君 非君也

⑩民を治めない。

團其曰君何也 以其爲公配 可以言小君也

經陳人殺其公子禦寇

⑪「禦寇」は、宣公の子である。

團言公子而不言大夫 公子未命爲大夫也 其曰公子何也
公子之重視大夫

④「視」は比である。

團命以執公子

⑤大夫は爵命を受ければ、公子（と同等）の禮を執る「氏を稱する？」ことが出来る。「大夫命以視公子」とするテキストもある。

經夏五月

⑥五月を時「夏」の首としているのは、甯「私」にはなぜだかわからない。

經秋七月丙申及齊高傒盟于防

團不言公 高傒仇也

⑦日を書いているから、公が盟ったのである。高傒は驕りたかぶって、公と匹敵した。このことを恥じるから、「公」を書かないのである。

經冬公如齊納幣

團納幣 大夫之事也

禮有納采

⑧女の徳性を采擇するのである。その禮で、鴈を贄として用いるのは、（鴈が）陰陽に順って往來することに取ったのである。

團有問名

⑨女の名をたずねて、これを卜い、吉凶を知るのである。その禮は納采と同じである。

團有納徵

⑩「徵」は成である。幣を納めて婚約を成立させるのである。

團有告期

⑪迎える期日を知らせるのである。

團四者備而後娶 禮也 公之親納幣 非禮也 故譏之

⑫公は母のための三年の喪がすんでいないのに、結婚を圖った。（それなのに）傳に、そのことを譏る文章がなく、ただ自分で幣を納めたことだけを譏っているのは、喪中の結婚はわざわざ貶絶しなくても、その罪惡が（おのづと）明らかだからである。

〔莊公二十三年〕

經二十有三年春公至自齊

團祭叔來聘

⑬「祭叔」は天子の寢内の諸侯であり、「叔」は名である。

⑭杜預の注に引く穀梁説では、ここを「祭叔が祭公のために魯に來聘した」と解する。つまり、祭叔は、寢内の諸侯ではなくて、その大夫ということになる。

團其不言使何也 天子之内臣也 不正其外交 故不與使也

⑮何休が言っている「南季〔隱公九年〕・宰渠伯糾〔桓公四年〕・家父〔桓公八年〕・宰周公〔僖公三十年〕の來聘には、いづれもみな、『使』を稱している。ここだけ、それをとりさっているのはなぜか」『穀梁廢疾』と。鄭君がこれを釋して言っている「もろもろの『使』を稱

する場合は、王命を奉じたのであり、その人に自分から来ようとする意志はなかったのである。(ところが) 今この場合、祭叔は王と意見を異にして「王の意見に従わないで」外交しようとし、王命を受けずに(勝手に) やって来た。だから、『使』をとり去って、そのことを表わしたのである」『釋穀梁廢疾』と。

輔鄭玄の説では、「使」を「王使」と解しているが、上にあげた穀梁説によれば、「使」は「祭公使」ということになる。また、鄭玄の説では、「天子之内臣」を祭叔のこととしているが、穀梁説によれば、祭公を指すということになる。

經夏公如齊觀社

團常事曰視

⑤「視、朔」「文公十六年」(の類)である。

團非常曰觀

觀 無事之辭也

⑥朝會の事がなかった、ということを用うのである。

團以是爲尸女也

⑦「尸」は、主「目的」である。女を目的に行ったのである。「觀社」を口實にして。

輔補注では、歌垣のようなものを想定し、傳文の「女」を一般化しているが、劉向の『古列女傳』の孽嬖の項に「哀姜者齊侯之女莊公之夫人也 初哀姜未入時 公數如齊 與哀姜淫」とあるから、「女」は、あ

るいは哀姜を指すのかもしれない。この注では、いづれなのか、はつきりしない。

團無事不出竟

團公至自齊

團公如

⑧公が(他國へ)行ったときの例を述べるのである。

團往時 正也

⑨「正」とは、危懼がないことをいう。(他の箇所も)みな、これに倣う。

團致月 故也 (如) 往月致月 有懼焉爾

輔傳文の「如」は、王引之の説に従って、衍文とみる。

經荆人來聘

團善果而後進之 其曰人何也 舉道不待再

⑩聘問の禮や朝宗の道に通曉するのは、(普通) 夷狄には難しいことである。だから、一舉に進めたのである。

輔注の「一舉」は、傳の「舉道」を解したのではなくて、「不待再」を解したようにみえる。とすると、「舉道」とはどういう意味であろうか。べつに根據はないが、譯者は「《春秋》が夷狄を進めるやり方」と解する。

經公及齊侯遇于穀

團及者 內爲志焉爾 遇者 志相得也

經肅叔朝公

傳微國之君未爵命者 其不言來 於外也

⑨穀に於いて公に朝した、ということ言うのである。

傳朝於廟 正也 於外 非正也

經秋丹桓宮楹

⑩「楹」は柱である。

傳禮 天子諸侯黝堊

⑪「黝堊」は黒色である。

傳正確には、「黝」が黒（柱）で、「堊」は白（壁）である。

傳大夫倉 土黼

⑫「黼」は黄色である。

傳丹楹 非禮也

經冬十有一月曹伯射姑卒

經十有二月甲寅公會齊侯盟于扈

⑬齊桓の盟には（普通）日をいわない。ここの盟に日をいつているのは、次のようなわけである。前に「公如齊觀社」とあり、その傳に「『觀』とは、事がなかったという表現である。この事件を、女を目的としたものである、とするのである」と言っている。（つまり）公は怠けて國政をとらず、しきりに非禮を行なって、甚だ憂慮するべき状況にあったのである。（それを）霸主「齊桓」はへり下って自ら公と盟い、

大いに弘濟の功績をあげ、（そのため）魯は罪を免れることが出來た。

臣子の喜ぶべきことで、これほど重大なものはない。（そして）當時が重んじたことは、文の上でも詳しくするべきである。だから、特に日を謹書して、この事を著わしたのである。

〔莊公二十四年〕

經二十有四年春王三月刻桓宮桷

傳禮 天子之桷 斲之礱之

加密石焉

⑭きめの細かい砥石でみがくのである。

傳諸侯之桷 斲之礱之 大夫斲之 土斲本 刻桷 非正也

夫人所以崇宗廟也 取非禮與非正而加之於宗廟 以飾夫人 非正也

⑮「非禮」とは、讎の女を娶ることをいう。「非正」とは、桷に刻し、

楹に丹塗りすることをいう。本來宗廟にふさわしいものではないから「加」と言ったのである。親迎するにあたって、夫人のために飾ろうとするのも、また非正である、ということ言うのである。

傳「以飾夫人」の語があるから、注のように「非禮」を讎の女を娶ることと解するのはおかしい。廖平の『古義疏』の説に従って、「非禮」

は丹楹を指し、「非正」は刻桷を指す、とすべきであろう。

傳刻桓宮桷 丹桓宮楹 斥言桓宮 以惡莊也

⑯新宮と言わずに、「桓宮」と言っているのは、桓公が齊に殺されたのに、宗廟を飾って讎國の女に見せびらかしたから、莊公の不孝をにく

んだのである。

經葬曹莊公

經夏公如齊逆女

團親迎 恒事也 不志 此其志何也 不正其親迎於齊也

經秋公至自齊

團迎者 行見諸 舍見諸

④「諸」は之である。夫人の車を見守る、ということを使う。

團先至 非正也

經八月丁丑夫人姜氏入

④哀姜である。

團入者 内弗受也 日入 惡入者也 何用不受也 以宗廟弗受也 其以

宗廟弗受何也

娶仇人子弟以薦舍於前 其義不可受也

④「薦」は進である。「舍」は置である。

經戊寅大夫宗婦覲用幣

④「宗婦」とは、同宗の大夫の婦である。

團覲 見也 禮大夫不見夫人 不言及 不正其行婦道 故列數之也

男子之贄 羔鴈雉脰

④「贄」は、おくりものである。上大夫は羔を用いる。羔が多くの頭目

に従い、かたよらない、ことに取ったのである。下大夫は鴈を用いる。

鴈が時を心得て飛翔し、行列が整っている、ことに取ったのである。

士は、冬に雉を用い、夏に脰を用いる。雉が貞操が固く、交接するの

に定った時があり、別れた後は（雌雄）雜居しない、ことに取ったの

である。「脰」は腊（雉の）乾肉である。雉は必ず、死んでいるも

のを用いる。生きながら服従させることが出来ないためである。夏に

脰を用いるのは、腐敗に備えてである。

團婦人之贄 棗栗鍛脩

④「棗」は、早朝から自分を矜莊（莊嚴）にすることに取ったのである。

「栗」は、敬栗、〔謹敬〕することに取ったのである。「鍛脩」は、斷

斷〔一心〕に自分を脩整することに取ったのである。

團用幣 非禮也 用者 不宜用者也

大夫 國體也

④「國體」とは、君の股肱であることをいう。

團而行婦道 惡之 故謹而日之也

經大水

經冬戎侵曹 曹羈出奔陳

經赤歸于曹 郭公

團赤蓋郭公也 何爲名也 禮諸侯無外歸之義 外歸 非正也

④徐乾が言う『郭公』は郭國の君で、名は『赤』である。おそらく、

その國を治めることが出來ず、捨てて曹に歸したのであろう。君は社稷の主であり、宗廟という重大なものを承けつぐ身である。(それなのに) 安んずることが出來ず、外國に歸した。だから、名だけを書き、罪として懲らしたのである。『赤』と言うだけでなく、さらに(下に)『郭公』と言うのは、赤が誰であるかわからず、魯の微者であるかのように見える、ことを心配したからである。『郭公』を上にかくと、諸侯が國を失った場合の書法と(同じに) なってしまい、微妙な義が示せない」と。

例段玉裁は、「微之義」は「懲之義」に作るべきであるとする。この説に従えば、注の最後は「懲らすという義が示せない」ということになる。

〔莊公二十五年〕

經二十有五年春陳侯使女叔來聘

⑤「女」は氏であり、「叔」は字である。

傳其不名何也

⑤成公三年には「晉侯使荀庚來聘」とあって、名を稱しているから。

傳天子之命大夫也

經夏五月癸丑衛侯朔卒

⑤惠公である。罪を犯し、徳を失ったから、葬を書かないのである。

經六月辛未朔日有食之

傳言日言朔 食正朔也

經鼓用牲于社

傳鼓 禮也 用牲 非禮也

天子救日 置五麾 陳五兵五鼓

⑤「麾」は、旌幡「はた」である。「五兵」は、矛・戟・鉞・楯・弓矢である。

傳諸侯置三麾 陳三鼓三兵 大夫擊門 士擊柝 言充其陽也

⑤音が出来ること「orもの」は、いづれもみな陽事であり、それによって陰氣を抑えるのである。「柝」は、二本の木を撃ち合わせるもの「拍子木」である。「充」は實である。

經伯姬歸于杞

傳其不言逆何也 逆之道微 無足道焉爾

經秋大水 鼓用牲于社于門

⑤「門」は、國門である。

傳高下有水災曰大水 旣戒鼓而駭衆 用牲可以已矣 救日以鼓兵 救水以鼓衆

經冬公子友如陳

〔莊公二十六年〕

經二十有六年春公伐戎

經夏公至自伐戎

經曹殺其大夫

傳言大夫而不稱名姓 無命大夫也 無命大夫而曰大夫 賢也 爲曹羈崇也

④徐邈が言う「當時、微國は衰えて禮に手がとどかず、その大夫は序列をおとし位を失って、下の士と同じであった。だから、略して人と稱し、傳ではこれを『無命大夫』というのである。莒慶〔莊公二十七年〕・莒挐〔僖公三年〕・邾庶其〔襄公二十一年〕・邾快〔昭公二十七年〕の場合、いづれもみな、特に事件の性格上書いたまでで、實際に大夫の貴位を保つことが出来たわけではない。だから、(氏は)略して、名だけをいっているのである。楚は荆蠻であるが、だんだんに自らを諸夏に通じさせた。それ故、莊公二十三年には『荆人來聘』と書き、文公九年には、さらに褒めて、名を書いている。國が強大になればなるほど、書き方がますます詳しくなるのである。しかし、(魯の)僖公・文公當時、楚はまだ、自らを列國と同じくすることは出来なかった。だから、得臣〔僖公二十八年〕も椒〔文公九年、ただし經文では「萩」につくる〕も、略して名だけをいい、ただ屈完が來て諸侯と會した場合〔僖公四年〕に限って、特別に禮遇して、大夫と成しているのである。楚の莊王が興起すると、江・漢の盟主となって、諸夏の君とかりに對等の禮を行ない、その勢いは當時〔or當年〕に盛んで、事は内外に行き交った〔or交錯した〕。それ故に、『春秋』はこれ

を書くのに、かくて中國の例に従っているのである。いったい、政治風俗の興廢は、その人物に依存するものである。三后〔虞・夏・商〕の子孫は日に日にその位次を失い、諸國が間隙に乗じ、これに代わって興起した。詳・略の文によれば、(このような)時事の實際を見る事が出来るのである。秦の爵は伯であり、土地は西周に據り、位次は中夏に列していた。だから、『師』を稱し、(また)大夫があり得るのである。その大夫には名氏をいうはずなのに、文公十二年の秦の術には、略して名だけをいっている。思うに、當時晉は魯の盟をつかさどり、秦は晉に敵對せんとしていたから、魯は秦と交情が疏遠だったであろう。禮によって情を飾るのであるから、情が疏遠であれば、禮は簡略になる。これが、『春秋』が文を略している理由であろう。さらに、吳の札に氏を書かず〔襄公二十九年〕、それによって君に尊稱を成している。宋の盟では、叔孫豹に氏を書かず〔襄公二十七年〕、それによって恭敬できたことを著わしている。これらはいづれもみな、事にちなんで義をなした〔示した〕のである」と。

補注の「其勢彊于當年」について。『韓詩外傳』卷六第十一章に「故先生者 當年而霸 楚莊王是也 後生者 三年而復 宋昭公是也」とある。何かつながりがあるかもしれない。また、注の「上、據西周」の「上」の字は、敦煌本〔P.二五九〇〕に従って、「土」に改める。

なお、疏に引く、薄氏の駁に對する范甯の答では、ここ大夫を羈のことと解しているが、補注・柯劭忞も指摘するように、あるいは別人と解した方がよいかもしれない。

經秋公會宋人齊人伐徐

經冬十有二月癸亥朔日有食之

〔莊公二十七年〕

經二十有七年春公會杞伯姬于洮

②「伯姬」は莊公の女である。「洮」は魯地である。

經夏六月公會齊侯宋公陳侯鄭伯同盟于幽

③同盟者 有同也 同尊周也 於是而後授之諸侯也 其授之諸侯何也 齊

侯得衆也 桓會不致 安之也 桓盟不日 信之也 信其信 仁其仁

衣裳之會十有一 未嘗有歃血之盟也 信厚也

④十三年に北杏で會し、十四年に鄆で會し、十五年にまた鄆で會し、十六年に幽で會し、二十七年にまた幽で會し、僖公元年に濮で會し、二年に貫で會し、三年に陽穀で會し、五年に首戴で會し、七年に寧母で會し、九年に葵丘で會した。

⑤團兵車之會四 未嘗有大戰也 愛民也

⑥僖公八年に洮で會し、十三年に鹹で會し、十五年に牡丘で會し、十六年に淮で會した。(齊桓の)末年になってはじめて「僖公八年以降」、(傳で)「兵車之會」と言い、蔡を侵し、楚を伐ったとき「僖公四年」に言わないのは、ちょうど最盛期のことを書いているから、「兵車」と言わないのである。これはつまり、兵車をもって會したが、征伐を

用いなかった、ということである。

經秋公子友如陳葬原仲

⑦「原仲」は陳の大夫である。「原」は氏であり、「仲」は字である。

⑧團言葬不言卒 不葬者也

⑨外の大夫には、例として卒を書かない。

⑩團不葬而曰葬 諱出奔也

⑪季友が内の難を避けて出奔するのに、原仲を葬ることを口實にした、ということを行うのである。

經冬杞伯姬來

⑫歸省したのである。

經莒慶來逆叔姬

⑬「慶」は名である。莒の大夫である。「叔姬」は莊公の女である。『禮記』檀弓上篇に次のようにある「(齊の)陳莊子が死に、魯に赴告した。魯の人は哭すまいとし、(魯の)繆公が縣子を召してたずねた。

縣子が言うことには『昔の大夫は、束脩をたずさえての聘問のために國境を出ることはありませんでした。(ですから)哭したいと思っても、どうして哭せましたでしょう。今の大夫は、政を中國と交えています。(ですから)哭すまいとしても、どうして哭さなすすみましよう』と。つまり、大夫が國境を越えて女を迎えるのは、非禮なのである。董仲舒が言っている「大夫は、束脩のおくりものをせず、諸

侯との交際をしない。(だから) 國境を越えて女を迎えれば、記して罪するのである」と。

輔「董仲舒曰」は、出典不明。『漢志』に著録されている「董仲舒百二十三篇」の佚文か「？」。

團諸侯之嫁子於大夫 主大夫以與之

⑤ 君は臣と對等にならないのである。

團來者 接内也 不正其接内 故不與夫婦之稱也

⑥ 「接内」とは、君と禮をなすことをいう。「夫婦之稱」であれば、「逆女」と言うはずである。

經杞伯來朝

⑦ 杞が「伯」を稱しているのは、おそらく、時の王に絀けられたためであらう。

經公會齊侯于城濮

⑧ 「城濮」は衛地である。

〔莊公二十八年〕

經二十有八年春王三月甲寅齊人伐衛 衛人及齊人戰 衛人敗績

團於伐與戰 安戰也

⑨ どこで戦ったかをたずねたのである。

團戰衛 戰則是師也 其曰人何也 微之也 何爲微之也 今授之諸侯而後有侵伐之事 故微之也 其人衛何也 以其人齊 不可不人衛也

⑩ 齊桓は方伯の任を受けたばかりで、未だ信を鄰國に著わすことが出来ず、侵伐の事をひきおこした。(だから)「師」を貶して「人」と稱することによって、齊を微にしたのである。「人」は「師」に敵對できず、「師」は「人」と戦えない。だから、衛の師も「人」としたのである。衛に罪があつたわけではない。

輔この注では「授之諸侯」を専ら事實として解しているようだが、補注にも指摘するように、理念「春秋の義」として解するべきであらう。

團衛小齊大 其以衛及之何也 以其微之 可以言及也 其稱人以敗何也 不以師敗於人也

⑪ 「人」は軽く、「師」は重い。

經夏四月丁未邾子貜卒

經秋荊伐鄭

團荊者楚也 其曰荊 州舉之也

經公會齊人宋人救鄭

團善救鄭也

經冬築微

⑫ 「微」は魯の邑である。

團山林藪澤之利 所以與民共也 虞之 非正也

⑬ 「虞」は、禽獸をつかさどる官である。仕切りふさいで築城し、さらに官司を置いて守るのは、民と利を共にしないことである、というこ

とを言うのである。「築」は（普通）記さない。記すのは、いづれも
みな、譏る場合である。「築」には、例として時をいう。

經大無麥禾

團大者 有顧之辭也 於無禾及無麥也

②一災では書かず、冬、禾が無い時點において、後をふりかえって、麥
が無かったことも記録したから、「大」と言うのである。ひどい凶作
であったことを明らかにしたのである。

經臧孫辰告糴于齊

③「臧孫辰」は、魯の大夫、臧文仲である。

團國無三年之畜曰國非其國也 一年不升 告糴諸侯 告 請也 糴 糴
也

不正 故舉臧孫辰以爲私行也

④内「魯」のために諱むから、使を稱さず「如」と言わず、私行であ
るかのように表現したのである。

團國無九年之畜曰不足 無六年之畜曰急 無三年之畜曰國非其國也 諸
侯無粟 諸侯相歸粟 正也 臧孫辰告糴于齊 告然後與之 言内之無
外交也

古者稅什一

⑤宣公十五年の注に詳しい。

團豐年補敗

⑥「敗」とは、凶年をいう。

團不外求而上下皆足也 雖累凶年 民弗病也 一年不艾而百姓饑 君子
非之 不言如 爲内諱也

〔莊公二十九年〕

經二十有九年春新延廡

團延廡者 法廡也

⑦『周禮』に「天子には十二閑〔廡舎〕があり、馬は六種である。邦國
には六閑があり、馬は四種である」〔校人〕とあり、（その鄭注に）
「廡〔二百十六頭〕ごとに一閑である」とある。「法廡」と言うのは、
この六閑の舊制である。

團其言新 有故也

⑧古いものを改めて新しくする、ということ言うのである。

團有故則何爲書也

古之君人者 必時視民之所勤 民勤於力 則功築罕

⑨「罕」は希である。

團民勤於財 則貢賦少

民勤於食 則百事廢矣

⑩「飢饉のときには、儀禮を省略する」〔『周禮』掌客〕。

團冬築微 春新延廡 以其用民力爲已悉矣

⑪「悉」は盡である。

經夏鄭人侵許

經秋有蜚

⑤穀梁説に「蜚は、南方の臭惡の氣が生み出すもので、君臣が淫佚して臭惡な行いがあることの象である」とある。

⑥「穀梁説」について、馬國翰は、尹更始の『章句』であるとしているが、根據は弱い。

團一有一亡曰有

經冬十有二月紀叔姬卒

⑦紀の國は滅んだが、叔姬は節義を守ったから、「紀」に繋げ、賢として記録したのである。

⑧この注は、杜預の注と全く同文である。

經城諸及防

⑨「諸」「防」は、いづれも魯の邑である。

團可城也 以大及小也

⑩傳例に言う「一般に、『城』を記すのは、いづれもみな、譏ってである」〔隱公七年傳文〕と。（だから）今ここで「可」というのは、冬は、城いても農役を妨げずにすむ、ということ言うのであって、城いてもかまわない、ということ言うのではない。

〔莊公三十年〕

經三十年春王正月

經夏師次于成

團次 止也 有畏也 欲救鄆而不能也 不言公 恥不能救鄆也

⑪齊を畏れたのである。

經秋七月齊人降鄆

團降 猶下也 鄆 紀之遺邑也

經八月癸亥葬紀叔姬

團不日卒而日葬 閔紀之亡也

經九月庚午朔日有食之 鼓用牲于社

⑫日〔太陽〕を救うのに牲を用いたことが、すでに正を失っている上に、正陽の月でないのに鼓を撃ったのも、また非禮である。

經冬公及齊侯遇于魯濟

⑬「濟」は、川の名である。

團及者 內爲志焉爾 遇者 志相得也

經齊人伐山戎

團齊人者 齊侯也 其曰人何也 愛齊侯乎山戎也

⑭齊侯を山戎とあたらせない。だから、「人」と稱するのである。

團其愛之何也 桓內無因國 外無從諸侯 而越千里之險北伐山戎 危之也

⑮内には、山戎の左右の國で、こちらに内應する者を、てづるとするところがなかった。外には諸侯がなかったとは、仲間の國の手をかりな

ったということである。

團則非之乎 善之也

⑤ 遠く山戎を伐って、危険であったが、王事に勤め、職貢した〔or王への職貢に勤めた〕から、ほめるのである。

團何善乎爾 燕 周之分子也

⑥ 「燕」は、周の大保、召康公の後裔で、成王に封じられた國である。

「分子」とは、周の別子〔嫡子以外の子〕の子孫をいう。

⑦ この注では、「分子」を別子の子孫とするが、別子そのものと解した方がよからう。

團貢職不至 山戎爲之伐矣

⑧ 山戎が害をなし、燕を攻撃して、周王室と隔絶させたことによる、ということを言うのである。

〔莊公三十一年〕

經三十有一年春築臺于郎

經夏四月薛伯卒

經築臺于薛

⑨ 「薛」は、魯地である。

經六月齊侯來獻戎捷

⑩ 「獻」は、下の者が上の者に奉〔たてまつ〕るという表現である。

《春秋》は魯を尊ぶから、「獻」と言うのである。

團齊侯來獻捷者 内齊侯也

不言使 内與同不言使也

⑪ 泰が言う「齊桓は、内は中國を救い、外は夷狄をしりぞけてくれたから、親しみ頼る気持ちとして、齊を異國とは思えない。だから、『使』を稱さず、同じ國であるかのように表現したのである」と。

團獻戎捷 軍得曰捷

戎菽也

⑫ 「菽」は豆である。

經秋築臺于秦

⑬ 「秦」は魯地である。

團不正罷民三時虞山林藪澤之利

且財盡則怨 力盡則讟

⑭ 「讟」は、怒り恨むことである。

團君子危之 故謹而志之也

或曰 倚諸桓也 桓外無諸侯之變 内無國事 越千里之險北伐山戎

爲燕辟地

⑮ 「辟」は、開である。

團魯外無諸侯之變 内無國事 一年罷民三時 虞山林藪澤之利 惡内也

⑯ 公が齊桓に頼りながら、齊桓と行いが異なる、ことを譏ったのである。

⑰ 「倚諸桓也」を、この注のように解するのはおかしい。王引之のよう

に、「(魯莊が) 齊桓と異なるとしてである」と解するか、補注のように、「齊桓を基準にして〔or 齊桓と比較して〕である」と解するべきであろう。

經冬不雨

〔莊公三十二年〕

經三十有二年春城小穀

⑤「小穀」は、魯の邑である。

經夏宋公齊侯遇于梁丘

團遇者 志相得也

梁丘在曹邾之間 去齊八百里 非不能從諸侯而往也 辭所遇 遇所不

遇 大齊桓也

⑥「遇うことを希望する者〔or 氣が合う者〕をこたわった」とは、八百里の間には、隨從を願う諸侯がいたに違いないが、それらと遇わなかった、ことをいう。「遇うことを希望していない者〔or 氣が合わない者〕に遇った」とは、遠く宋公に遇いにいったことをいう。

經秋七月癸巳公子牙卒

⑦「牙」は、慶父の同母弟である。何休が言っている「傳例に『大夫の卒に日をいわないのは、悪かった場合である』〔隱公元年傳文〕とある。牙は、慶父とともに哀姜と私通し、子般を殺そうと謀った。それ

なのに、卒に日をいうのはなぜか」〔穀梁廢疾〕と。鄭君がこれを釋して言っている「牙は莊公の同母弟であるのに『弟』と言わないことによって、その悪はすでに示されているから、日をとり去る必要がないのである」〔釋穀梁廢疾〕と。甯〔私〕が思うに、傳例に「諸侯(の位)は(非常に)尊く、兄弟であっても、その屬〔肉親關係の次序〕をもって他國に通じることは許されない」〔隱公七年傳文他〕とある。おそらく、禮で諸侯は期〔一年の喪〕をおえると諸父昆弟を臣とすることからして、昆弟を稱すれば、私親を伸ばすことになる、からであろう。宣公十七年に「公弟叔肸卒」とあり、傳で「公弟叔肸」と言うのは、賢としてである」と言っている。とすれば、「弟」を稱さないのが、本來常例なのである。鄭君の説は、私には解せない。

經八月癸亥公薨于路寢

⑧公が薨じた場合は、いつもその場所を書く。凶變を謹しむのである。

團路寢 正寢也 寢疾居正寢 正也

男子不絕于婦人之手 以齊終也

⑨「齊」は、絜である。

經冬十月乙未子般卒

⑩喪中にあったから、「子」を稱するのである。「般」はその名である。莊公の太子である。弑を書かないのは、諱んでである。

團子卒日 正也

⑪襄公三十一年に「秋九月癸巳子野卒」とある。

團不日 故也

⑤ 文公十八年に「冬十月子赤卒」とある。

⑥ 當該經文では、「子赤」ではなくて、「子」に作る。

團有所見 則日

⑦ 閔公に即位を書かないことが、弑された君を繼いだことをあらわしている。だから、慶父が子般を弑しても 子般の卒に日をいえるのであり、わざわざ日を取り去らなくても、(弑は) 明らかなのである。

經公子慶父如齊

團此奔也 其曰如何也

⑧ 閔公二年には「(公子) 慶父(出) 奔莒」とあって、「如」と言わないから。

團諱莫如深 深則隱

⑨ 「深」とは、君が弑され、賊が奔ったことをいう。隱痛のきわみである。だから、子般の卒に日をいい、慶父に「如齊」というのである。

⑩ この注はおかしい。補注及び兪樾に従って、「深」を幽深の意とし、「隱」を微の意とするべきであろう。

團苟有所見 莫如深也

⑪ 閔公に即位を書かないことによって、子般の弑殺と慶父の出奔をあらわすのである。

⑫ この注も、單に「有所見」を説明している、とみることが出来れば「？」、通じないこともないが、疏がいうように、閔公に即位を書かないこと

を「深」に當てているとすれば、おかしい。

經狄伐邢

〔閔公元年〕

經元年春王正月

團繼弑君不言即位 正也

親之非父也

⑬ 兄である。

團尊之非君也

⑭ まだ年を躰えていない。

團繼之如君父也者 受國焉爾

經齊人救邢

團善救邢也

⑮ 齊桓が伯としての道を心得ていた「道にかなっていた」ことをほめるのである。

經夏六月辛酉葬我君莊公

團莊公葬而後舉諡 諡所以成德也 於卒事乎加之矣

經秋八月公及齊侯盟于洛姑

⑯ 「洛姑」は、齊地である。

團盟納季子也

經季子來歸

團其曰季子 貴之也

⑥大夫は（普通）名氏を稱する。今ここで（特に）「子」と言うのは、彼を貴ぶということである。「子」は男子の美稱である。

團其曰來歸 喜之也

⑥大夫が國を出て使した場合、歸ったことは書かない。一度執えられ、後にもどった場合、「歸」とは言わない（「至」と言う）。國內の人には「來」と言わない。今ここで「來」と言うのは、（彼が）本來、そのまま行つたきりで、他國の人に同化しようとしていた、ことを明らかにしたのである。「歸」と言うのは、（彼が）實際は魯人であることを明らかにしたのである。「喜んだ」とは、季子は賢大夫で、亂ゆえに出奔し、（そのため）國人は彼のことを思い、そのまま行つたきりでかえらないのではないかと心配したが、今ここで歸還してくれたから、皆が喜んで「季子來歸」と言ったのである。

⑥補注にも指摘するように、「喜」の直接の主體は、むしろ孔子《春秋》であろう。

經冬齊仲孫來

團其曰齊仲孫 外之也

⑥魯が彼を絶つたから、齊に繋げるのである。

團其不目而曰仲孫 疏之也

⑥「目さない」とは、「公子慶父」と言わないことをいう。

團其言齊 以累桓也

⑥仲孫を齊に繋げ、（齊）桓が有罪を容赦したということを言う（示す）のである。

〔閔公二年〕

經二年春王正月齊人遷陽

經夏五月乙酉吉禘于莊公

⑥三年の喪がおわると、新たに死んだ者の主（位牌）を廟におさめ、（したがって）廟にあった舊い主は太祖の廟に遷ることになり、これに因んで大祭し、昭穆をはっきりさせる。これを「禘」という。莊公の喪の期間がまだおわっていないのに、この時、別に廟を立て、廟が完成すると（その廟で）吉祭し、場所としても、太廟でしなかった。だから、詳しく書いて、譏刺を示したのである。

⑥この注は、杜預の注とほとんど同文である。

團吉禘者 不吉者也 喪事未畢而舉吉祭 故非之也

⑥莊公が薨じてから、この月でようやく二十二箇月になろうとするところであり、喪はまだおわっていない。

經秋八月辛丑公薨

團不地 故也 其不書葬 不以討母葬子也

⑥一般に、君が弑され、その賊が討たれば、葬を書く。哀姜（賊）が實際に討たれたのに、葬を書かないのは、母を討つことによって子の

葬を書くわけにはゆかないからである。

經九月夫人姜氏孫于邾

㊤ 哀姜は、閔公の弑殺に關與したから、出奔したのである。

團孫之爲言 猶孫也 諱奔也

經公子慶父出奔莒

團其曰出 絕之也 慶父不復見矣

㊤ 慶父は、子般・閔公を弑した。弑殺を書かないのは、諱んでである。

經冬齊高子來盟

團其曰來 喜之也 其曰高子 貴之也 盟立僖公也

不言使何也

㊤ 桓公十四年には「鄭伯使、其弟禦來盟」とあって、「使」と言っているから。

團不以齊侯使高子也

㊤ 齊侯は慶父を討たず、魯をその禍害でひどく苦しむようにさせた。

(だから) 今ここで、高子は自分で來たのであり、齊侯には彼を使う資格がなかった、かのように表現したのである。これは、屈完に「使」を稱さない〔僖公四年〕のと同じである。江熙が言う「魯はひきつづいて君を弑し、僖公は正當な後嗣ではなかった。(しかし) 桓公は高侯をつかわして僖公を立て、魯を存続させた。魯人はこの事を有難く思い、その使に名をいわないことによって、これを貴んだのである。

その使を貴べば、その主人が重みを益す」と。

㊤ 「齊侯が高子を使ったとしない」理由について。范注では「齊侯には罪があるから」としているようだが、おかしい。江熙説では、直接ふれていない〔疏は、江熙説の「不名其使」を、「去使文」と曲解している〕。ここは、補注に従って「『高子』は貴稱であるから」と考えるべきであろう。

經十有二月狄入衛

㊤ 僖公二年に楚丘に城いて衛を封じているから、衛が(ここで)狄に滅されたことは明らかである。「滅」と言わずに、「入」と言うのは、《春秋》は賢者のために諱むからである。齊の桓公が夷狄をしりぞけて中國を救うことが出来なかったので、彼のために諱んだのである。

經鄭棄其師

團惡其長也 兼不反其衆 則是棄其師也

㊤ 「長」とは、高克のことをいう。高克が利を好んで、その君を顧みなかったので、文公は彼をにくんで遠ざけようとしたが、出来なかった。(そこで) 高克に、兵をひきいて國境で狄を防がせた。(そして) 軍隊をならべて黄河のほとりを彷徨させたまま、長い間召還しなかった。(そのため) 士衆と將帥とは離ればなれになってしまった。高克は君に仕えるのに禮によらず、文公は臣下を退けるのに道によらなかった。國を危うくし師を亡うものである。

㊤ 「高克好利」以下は、『詩』鄭風〈清人〉の序とほぼ同文である。

〔僖公元年〕

經元年春王正月

團繼弒君不言即位 正也

經齊師宋師曹師次于犇北救邢

⑤「犇北」は、邢地である。

團救不言次

⑥莊公六年には「王人子突救衛」とあって、「次」と言っていないから。

團言次 非救也

⑦「次」は止である。「救」は危急にかけつけるという意味である。今ここでは、まさしく「ちょうど」停止したのであるから、救援したのではなくたことがわかる。

團非救而曰救何也 遂齊侯之意也

⑧その本意を記録したのである。

團是齊侯與

⑨「師」と稱していることを怪んだのである。

團齊侯也 何用見其是齊侯也

⑩經は「齊師」と書いているから。

團曹無師 曹師者 曹伯也

⑪小國は、君が將であれば君を稱し、卿が將であれば「人」と稱し、「師」と稱することは出来ない。（だから）「師」と言えば、曹伯のことである。曹の君が師の下にいるわけにゆかないから、齊侯であることがわかる。

とである。曹の君が師の下にいるわけにゆかないから、齊侯であることがわかる。

團其不言曹伯何也 以其不言齊侯 不可言曹伯也 其不言齊侯何也

以其不足乎揚 不言齊侯也

⑫救援が間に合わなかったから、稱揚するのに不十分なのである。

⑬「間に合わなかった」「邢はすでに滅んでいた」というのは、『公羊傳』にもとづく。補注は、穀梁にこの意はないとする。

經夏六月邢遷于夷儀

⑭狄の難を避けたのである。「夷儀」は、邢地である。

團遷者 猶得其國家以往者也 其地 邢復見也

⑮「宋人遷宿」「莊公十年」のような、滅んで二度とあらわれないケースとはちがう。

經齊師宋師曹師城邢

團是向之師也 使之如改事然 美齊侯之功也

⑯さきの犇北の師である。「遂」と言う「上につづける」べきところであるのに、今ここで、再び三國を羅列したのは、齊桓が亡國を存続させたことをほめてである。

經秋七月戊辰夫人姜氏薨于夷

⑰哀姜である。

團夫人薨不地 地 故也

經齊人以歸

傳不言以喪歸 非以喪歸也 加喪焉 諱以夫人歸也

㊦泰が言う「齊人は實際には、夫人をつれて歸り、夷で殺したのである。

このことを諱むから、(夫人が) 自分で夷まで行き、病氣にかかって死に、その後で齊人が喪「なきがら」を以て歸った、かのように表現したのである。『歸』は(實際には)『薨』の前にあったのに、今ここでは下に書かれている。これは、喪「『薨』」の文を(『歸』の上に) 加えたということである。經が『喪「なきがら」を以て歸った』と言わないのは、本來、喪「なきがら」を以て歸ったわけではないからである。傳例に『へ以』とは、以てはいけなかった場合にいう「桓公十四年傳文他」とある。(ここにも) 微旨が示されている」と。

輔柯劭忞は、傳文の「加」を「如」の誤りとする。

傳其以歸 薨之也

㊦つれて歸り、その後で殺したのである。

經楚人伐鄭

經八月公會齊侯宋公鄭伯曹伯邾人于櫟

㊦「櫟」は、宋地である。

經九月公敗邾師于偃

㊦「偃」は、邾地である。

傳不日 疑戰也 疑戰而曰敗 勝内也

經冬十月壬午公子友帥師敗莒師于麗 獲莒挐

㊦「麗」は、魯地である。傳例に「『獲』とは、(その獲を) 許さないと

いう表現である」(宣公二年傳文)とある。

傳莒無大夫 其曰莒挐何也

㊦大夫でなければ書かないから。

傳以吾獲之 目之也

㊦「獲」は、許さない「悪い」という表現であり、内「魯」には善をつかさどらせるから、「獲」と言わないのである。

傳此其言獲何也

㊦文公十一年には「叔孫得臣敗狄于鹹」とだけあって、「獲長狄」と言っていないから。

傳惡公子之給

㊦「給」は、欺給「あざむく」である。

傳給者奈何 公子友謂莒挐曰 吾二人不相說 士卒何罪 屏左右而相搏

公子友處下 左右曰 孟勞 孟勞者魯之寶刀也 公子友以殺之

然則何以惡乎給也

㊦勝ちを得たのだから。

傳曰 棄師之道也

㊦江熙が言う「經は『莒の師を敗った』と書いているが、傳が『二人が素手で闘った』と言っていることからすれば、師は戦わなかったことになるから、どうして敗ったと言えようか。理として當然通じない。

いったい『王が赫としてここに怒る』『詩』大雅〈皇矣〉とき、その貴さは『ここに（その旅を）整える』『同上』ことにある。男子が憤しむべきものは三つあり、戦はそのうちの一つである。季友は令徳の人であるのに、どうして、三軍を整えることをやめ、軽々しく一人で闘い、刀をかくして殺しあい、それによって勝負を決するはずがあらうか。遠い昔の事は明らかにし難いが、風味がもとめる〔or 目ざす〕ものは、昔も今も変わらない。（したがって）ここもまた〔cf. 桓公二年〕事として不適當〔ありえない事〕であり、傳はおそらくまちがっている」と。

傳注の「風味」は、意味が不明である。すぐれた人品の意か〔？〕。

經十有二月丁巳夫人氏之喪至自齊

團其不言姜 以其殺二子貶之也

②「二子」とは、子般・閔公である。

團或曰 爲齊桓諱殺同姓也

〔僖公二年〕

經二年春王正月城楚丘

團楚丘者何 衛邑也 國而曰城 此邑也 其曰城何也

③元年には「齊師宋師曹師城邢」とあり、邢は國であるから。

團封衛也

④閔公二年に「狄入衛」とあり、そのまま滅んだのである。

團則其不言城衛何也 衛未遷也

其不言衛之遷焉何也

⑤元年には「邢遷于夷儀」とあって、「遷」を言っているから。

團不與齊侯專封也 其言城之者 專辭也

故非天子不得專封諸侯 諸侯（不得）專封諸侯 雖通其仁 以義而不與也

⑥衛を存続させたのは（齊）桓の仁であるから、（その仁を）通じさせて、楚丘に城かせるのである。義として專封できないから、衛を遷したことは言わないのである。

傳傳文の「不得」は、王引之に従って、衍文とみる。

團故曰 仁不勝道

⑦「仁」とは、亡國を存続させることをいう。「道」とは、上下の禮をいう。

經夏五月辛巳葬我小君哀姜

經虞師晉師滅夏陽

團非國而曰滅 重夏陽也 虞無師 其曰師何也

以其先晉 不可以不言師也

⑧「人」は「師」の上にいられない。貴賤の次序である。

團其先晉何也

⑨小國は大國に先んじないから。

團爲主乎滅夏陽也

夏陽者 虞虢之塞邑也

⑨地勢が險要であつたから、二國が塞邑としていた。

團滅夏陽而虞虢舉矣 虞之爲主乎滅夏陽何也 晉獻公欲伐虢 荀息曰

君何不以屈産之乘垂棘之璧而借道乎虞也

⑩「荀息」は、晉の大夫である。「屈」邑からは駿馬が産出され、「垂棘」からは良璧が産出される。

團公曰 此晉國之寶也 如受吾幣而不借吾道 則如之何 荀息曰 此小國之所以事大國也

⑪「此」とは、璧馬の類をいう。

團彼不借吾道 必不敢受吾幣 如受吾幣而借吾道 則是我取之中府而藏之外府 取之中府而置之外廩也

公曰 宮之奇存焉

⑫「宮之奇」は、虞の賢大夫である。

團必不使受之也

荀息曰 宮之奇之爲人也 達心而儒

⑬「儒」は、弱である。

團又少長於君

達心則其言略

⑭明達の人は、ものを言うとき、要綱をくくって擧げるだけである。

「耳を引っぱっていいきかす」「詩」大雅〈抑〉」のでなければ、愚者は悟らない。

團儒則不能彊諫 少長於君則君輕之 且夫玩好在耳目之前而患在一國之

後 此中知以上乃能慮之 臣料虞君 中知以下也 公遂借道而伐虢

宮之奇諫曰 晉國之使者 其辭卑而幣重 必不便於虞 虞公弗聽 遂受其幣而借之道

宮之奇（諫）曰 語曰晉亡則齒寒 其斯之謂與

⑮「語」とは、諺言「ことわざ」である。

⑯後の方の「諫」は、王念孫に従つて衍文とする。つまり、後の方は宮之奇の私論とみる。

團挈其妻子以奔曹 獻公亡虢 五〔四〕年而後舉虞

荀息牽馬操璧而前曰 璧則猶是也 而馬齒加長矣

⑰「猶是」とは、もとのままである、ということを使う。

⑱傳文の「五」は、補注に従つて、「四」の誤りとする。

經秋九月齊侯宋公江人黃人盟于貫

⑲「貫」は、宋地である。

團貫之盟 不期而至者 江人黃人也 江人黃人者 遠國之辭也 中國稱

齊宋 遠國稱江黃 以爲諸侯皆來至也

經冬十月不雨

團不雨者 勤雨也

⑳「不雨」と言うのは、雨がふってほしいと熱心に願った、ということである。君が民を恤んだことを明らかにしたのである。

㉑「勤」は、王念孫・俞樾に従つて、憂の意と解した方がよからう。

經楚人侵鄭

〔僖公三年〕

經三年春王正月不雨

傳不雨者 勤雨也

經夏四月不雨

①一つの季節中、雨がふらなければ、その季節の最初の月を（代表として）書く。「旱」と言わないのは、災害にならなかったからである。

②ここは、杜預の注とほぼ同文である。

傳一時言不雨者 閔雨也

③一つの季節を経過することに「不雨」と言う。民を憂ふことのきわみである。「閔」は憂である。

傳閔雨者 有志乎民者也

經徐人取舒

經六月雨

傳雨云者 喜雨也 喜雨者 有志乎民者也

經秋齊侯宋公江人黃人會于陽穀

④「陽穀」は、齊地である。

傳陽穀之會 桓公委端摺笏而朝諸侯

⑤「委」は、委貌の冠である。「端」は、玄端の服である。「摺」は、插

「さしはさむ」である。「笏」は、事を記すためのものである。これは所謂衣裳の會である。

傳諸侯皆諗乎桓公之志

經冬公子季友如齊莅盟

⑥傳例に「『莅』は位である。内〔魯〕の前定の盟には『莅』と言い、外の前定の盟には『來』と言う」〔昭公七年傳文〕。ただし、原文とはやや異なる」とある。

傳莅者 位也

⑦盟誓の言葉があらかじめ決定されていて、今ここでは、ただその位〔場〕に往って盟ただけなのである。

傳其不日 前定也 不言及者 以國與之也 不言其人 亦以國與之也

經楚人伐鄭

〔僖公四年〕

經四年春王正月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯侵蔡 蔡潰

⑧傳例に「侵には時をいう」〔莊公十年傳文〕とあるのに、ここで月をいつているのは、おそらく「潰」のためであろう。

傳潰之爲言 上下不相得也

⑨君と臣とが不和で、自分から潰れちりちりになったのである。

傳侵 淺事也 侵蔡而蔡潰 以桓公爲知所侵也

⑩罪を得たことを責めようとした。それ故にちょっと侵すと、潰れてし

まった。

團不土其地 不分其民 明正也

經遂伐楚次于陘

㊦楚は強かったが、齊は徳によってこれを安んじようとした。だから、いそいで前進せず、陘で次した〔宿營した〕のである。「陘」は、楚地である。

團遂 繼事也 次 止也

經夏許男新臣卒

㊦十四年には「冬、蔡侯肸卒」とあり、傳で「諸侯の卒に時をいうのは、にくむ場合である」と言っている。宣公九年には「辛酉、晉侯黑臀卒于扈」とあり、傳で「地をいうのは、（國都の）外で卒したからである。日をいうのは、竟を踰えてなかったからである」と言っている。とすれば、新臣は、楚で卒した〔竟を踰えた〕から、日をいわないのである。にくんではない。

團諸侯死於國 不地 死於外地

死於師 何爲不地

㊦宣公九年には「晉侯黑臀卒于扈」とあって、地をいっているから。

團內桓師也

㊦齊桓は威徳がひろく著われ、諸侯がこれに安んじたから、外で卒しても、國（都）で同じなのである。

經楚屈完來盟于師 盟于召陵

㊦屈完が陘の師まで来て盟った。齊桓は、彼〔or 楚〕が義に服したので、彼のために一舍〔三十里〕退いて召陵に次し、彼と盟った。「召陵」は楚地である。

團楚無大夫

㊦（天子から）爵命を受けた卿がいない。

團其曰屈完何也 以其來會桓 成之爲大夫也

㊦齊桓を尊び、卑者と盟わせたくないのである。

團其不言使 權在屈完也

㊦邵が言う「齊桓が江・漢の地を威圧したので、楚人は大變懼れたが、敵の力がわからなかったので、屈完を師に行かせた。完は事の宜しきをはかり、義によって齊をしりぞけ、そのまま結盟にこぎつけ、それによって竟内を安んじた。功績はすべて完にあったのである。だから、『使』と言わないのである」と。

〔補注は、ここの「權」を、權宜の權ではなくて、權力・權利の權であるとする。〕

團則是正乎 曰非正也

㊦臣は、勝手に行動してはならない。

團以其來會諸侯重之也

㊦彼が中國を宗とし、有徳者に歸順した、ことを重んじるのである。

團來者何 內桓師也

㊦「來」は内辭である。桓の師を内とするから、「來」と言うのである。

團于師 前定也

于召陵 得志乎桓公也 得志者 不得志也

㊤ 屈完が來盟し、桓公は召陵に退いた。これは、屈完がその本志を得たということである。屈完が志を得れば、桓公は志を得なかったということになる。

㊤ 「得志」を、范注では屈完に屬せしめているが、補注・俞樾に従って、桓公に屬せしめるべきであろう。

㊤ 團以桓公得志爲僅矣

㊤ (齊) 桓は霸主となり、諸侯を會せしめた。(しかし) 楚子はやって來ず、屈完が盟を受け、(かえて齊に) 昭王のゆくえを江にたずねさせ、言葉も不遜であつて、(齊桓は) わずかに志を得ただけであつた。楚を服従させるのが難しかったことを言うのである。

㊤ 補注にも指摘するように、注の「令問諸江」というのは、『左傳』によるものであつて、下の傳文「我將問諸江」と齟齬する。

㊤ 團屈完曰 大國之以兵向楚何也

㊤ 桓公曰 昭王南征不反 菁茅之貢不至 故周室不祭

㊤ 「菁茅」は、香草で、酒をこすためのものである。楚の貢物である。

㊤ 團屈完曰 菁茅之貢不至 則諾

㊤ 昭王南征不反 我將問諸江

㊤ 江のほとりの民に見た者がいるかどうかたずねるということである。

これは、罪に服そうとしない言葉である。だから、(齊桓は) 召陵に退いて、彼と盟つたのである。これが、屈完が志を得、桓公が志を得なかったわけである。

㊤ 補注は「江」を、江神と解する。

㊤ 經齊人執陳袁濤塗

㊤ 「袁濤塗」は、陳の大夫である。

㊤ 團齊人者 齊侯也 其人之何也

㊤ 於是咻然外齊侯也 不正其踰國而執也

㊤ 江熙が言う『踰國』とは、陳(の國境)を踰えて陳の大夫を執えたことをいう。主人「陳」が客「齊」を敬わなかったのは、客が先に主人を敬わなかったため(という理由のあること)であるから、(陳の)大勢の人がみな、反撥心をもった。だから、『春秋』はそれに従つて譏つたのである。所謂『萬物を心とする』ということである。莊公十七年には『齊人執鄭詹』とあり、傳で、執えることをゆるすとしているのは、詹は奔つて齊におり、そこでそのまま執えたからである」と。㊤ 「咻然」を、注では衆多の貌と解しているようだが、王引之に従って、離散の貌とすべきであろう。また、「外にする」主體も、注では陳人としてゐるようだが、補注に従つて、孔子《春秋》とするべきであろう。なお、注の「以萬物爲心」を、疏では莊子文とするが、今の『莊子』にはみえない。佚文か、あるいは意をとつたものか。

㊤ 經秋及江人黃人伐陳

㊤ 團不言其人及之者何 內師也

㊤ 經八月公至自伐楚

團有二事偶 則以後事致 後事小 則以先事致 其以伐楚致 大伐楚也

⑤鄭君が言っている「會は大事であり、伐は小事である。今ここでは、齊桓は楚を伐ち、その後で召陵で盟ったのであるから、公は當然、會からもどったとするべきである。それなのに、伐からもどったとしてゐるのは、楚は強く、伐てる者がいなかったから、楚を伐ったことを大事としてである」と。

附ここの「鄭君曰」は、出典が不明である「孔廣林の『通德遺書所見錄』では、『釋穀梁廢疾』か、『駁五經異義』かの、どちらかであろうとしている」。なお、補注では、會と伐とは本來、大小の差はない「傳文の「偶」にあたる」としている。

經葬許穆公

經冬十有二月公孫茲帥師會齊人宋人衛人鄭人許人曹人侵陳

⑥莊公十年の春には「二月、公侵宋」とあり、傳で「侵」には（普通）時をいう。ここで月をいうのはなぜか。にくむから、謹んで月をいうのである」と言っている。とすれば、一般に、侵して月をいうのは、いづれもみな、にくんでである。

〔僖公五年〕

經五年春晉侯殺其世子申生

團目晉侯斥殺 惡晉侯也

⑦「斥」は、指斥することである。

經杞伯姬來朝其子

團婦人既嫁不踰竟 踰竟非正也（諸侯相見曰朝） 伯姬爲志乎朝其子也

伯姬爲志乎朝其子 則是杞伯失夫之道矣

⑧凱が言う「『寡妻に、刑（のつと）らしめる』『詩』大雅（思齊）』ことが出来なかったのである」と。

附ここの「諸侯相見曰朝」は、王引之に従って、衍文とみる。

團諸侯相見曰朝 以待人父之道待人之子 非正也

故曰 杞伯姬來朝其子 參譏也

⑨「參譏」とは、伯姬・杞伯・魯侯をいう。桓公九年には「曹伯使其世子射姑來朝」とあり、世子を譏っている。ここで譏らないのは、子が母に随って行っただけで、年がまだ幼く、まだ人の子としての道によって責めるわけにゆかない、ということ明らかにしたのである。伯姬は莊公二十五年の夏に嫁ぎ、この年で十三年であるから、子が幼いことがわかる。

經夏公孫茲如牟

經公及齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯會王世子于首戴

⑩惠王の世子で、名は鄭、後に立って襄王となった。「首戴」は、衛地である。

團及以會 尊之也

⑪「及諸侯」と言い、その後で（別に）「會王世子」と言って、世子を

諸侯と同列にさせない。

傳何尊焉 王世子云者 唯王之貳也 云可以重之存焉 尊之也 何重焉
天子世子世天下也

經秋八月諸侯盟于首戴

②(まとめて)「諸侯」と言うのは、「前では一つ一つあげ、後ではひと
まとめにする」〔公羊傳文〕からである。他の箇所もみな、これに倣
う。

傳無中事而復舉諸侯何也 尊王世子而不敢與盟也 尊則其不敢與盟何也
盟者不相信也 故謹信也 不敢以所不信而加之尊者 桓 諸侯也
不能朝天子 是不臣也 王世子 子也 塊然受諸侯之尊已而立乎其位
是不子也 桓不臣 王世子不子 則其所善焉何也

是則變之正也

③正式な禮ではないが、時宜にかなっている。

傳天子微 諸侯不享覲 桓控大國扶小國統諸侯 不能以朝天子 亦不敢
致天王 尊王世子于首戴 乃所以尊天王之命也 世子含王命會齊桓
亦所以尊天王之命也 世子受之可乎 是亦變之正也 天子微 諸侯不
享覲 世子受諸侯之尊已而天王尊矣 世子受之可也

經鄭伯逃歸不盟

傳以其去諸侯 故逃之也

④自分勝手にして、衆にそむいたから、「逃」と書いたのである。傳例
に「義から逃げるのを『逃』と言う」〔莊公十七年傳文〕とある。

經楚人滅弦 弦子奔黃

傳弦 國也 其不日 微國也

經九月戊申朔日有食之

經冬晉人執虞公

⑤虞公は、璧馬の寶を貪り、兄弟の親を棄て、忠臣の諫言を拒絶し、社
稷の危険をかえりみなかった。それ故、晉の命が虞に行なわれ、下に
上を執えさせ、虞は晉も同然であった。だから「晉人執虞公」と言う
のである。江熙が言う「《春秋》には、州公・郭公・虞公の、全部で
三公がいるが、(公は)爵ではない。傳は、下が執える表現としてい
る。試しに、ここに因んで論じてみよう。五等級の諸侯を、その民は
どれでもみな『公』とよぶが、生存中には王爵の限定があり、没して
始めて、臣民の稱〔『公』〕を伸ばせる。州公はその國を捨てたから、
先に『州公』と書いたのである〔桓公五年〕。郭公はこっそり曹に歸
したから、先に名をいい、その後で『郭公』と稱したのである〔莊公
二十四年〕。夏陽が亡びれば、虞は滅國であるから、『虞公』と稱して
當然なのである。三公はそれぞれ(事情が)異なるが、その歸趣は同
一である。(つまり)生前と死後とで名稱が等しい〔いづれも『公』
と稱する〕のは、思うに、『春秋』に賤しめられたからであろう」と。
傳執不言所於地 經於晉也
⑥當時、虞はすでに包みこまれて、晉に屬していたから、虞で執えたの
に、その場所を書かないのである。

圍其曰公何也

⑩十九年には「宋人執滕子嬰齊」とあって、「公」と言っていないから。

圍猶曰其下執之之辭也

⑪臣民がその君を執えたから、「公」と稱するのである。

圍其猶下執之之辭何也 晉命行乎虞民矣

⑫虞は晉に服したから、晉の命に従って、その君を執えたのである。

圍虞虢之相救 非相爲賜也

今日亡虢而明日亡虞矣

⑬「明日」と言うのは、速やかであったことを喻えたのである。

〔僖公六年〕

經六年春王正月

經夏公會齊侯宋公陳侯衛侯曹伯伐鄭圍新城

圍伐國 不言圍邑 此其言圍何也

⑭元年には「楚人伐鄭」とあって、圍んだことを言っていないから。

圍病鄭也 著鄭伯之罪也

⑮泰が言う「もろもろの、國を伐って邑を圍んだことをいう場合には、

傳はいづれもみな、伐った側の罪としている。それなのに、ここに限

って鄭伯の罪を著わすとするのは、齊桓は霸業を行ない、王室を尊崇

し、諸侯を安んじあつめ、世子をたすけ戴いてこれと盟い、これほど

すばらしいことはないのに、鄭伯は義を避けて逃げ歸り、霸者に叛き、

そのため諸侯が鄭を伐って圍んだ、という事情からである。罪が上

「五年」で著わされ、その討伐が下「ここ」で明らかにされているの

である。伐って圍んだという文章は同じであっても、善惡の義には違

いがある。これは、桓の盟には日をいわないことによって信を明らか

にする「莊公二十七年傳文」のに、葵丘の盟「僖公九年」では、（か

えて）日をいうことによってはめている、のと似ている」と。

經秋楚人圍許 諸侯遂救許

⑯鄭を伐った諸侯である。

⑰この注は、杜預の注にもとづく。

圍善救許也

經冬公至自伐鄭

圍其不以救許致何也 大伐鄭也

〔僖公七年〕

經七年春齊人伐鄭

經夏小邾子來朝

經鄭殺其大夫申侯

傳稱國以殺大夫 殺無罪也

經秋七月公會齊侯宋公陳世子款鄭世子華盟于寧母

④「寧母」は某地「不明」である。
團衣裳之會也

經曹伯班卒

經公子友如齊

經冬葬曹昭公

〔僖公八年〕

經八年春王正月公會王人齊侯宋公衛侯許男曹伯陳世子款盟于洮

⑤「洮」は、曹地である。

團王人之先諸侯何也 貴王命也 朝服雖敝必加於上 弁冕雖舊必加於首

周室雖衰必先諸侯 兵車之會也

經鄭伯乞盟

團以向之逃歸乞之也

⑥「向〔さき〕」とは、五年に首戴の盟から逃げたことをいう。齊桓が

ここで兵車の會をひらくと、おそれて服従し、盟えないことを心配して、盟に参加させてくれるよう乞うたのである。「使」を記さないのは、鄭伯が自分で來たかのように表現したのである。一人の惡を抑え、衆人の善を伸ばすため（の手立て）である。

輔注の「不録使者」以下は、何休の注にもとづく。

團乞者 重辭也

⑦人の道は讓を貴ぶから、「乞」を重辭として、使うのである〔乞は讓に反する。cf. 定公元年傳文〕。

團重是盟也

⑧前に逃げ歸ったことを悔いたから、重辭を使ったのである。

團乞者 處其所而請與也

⑨「乞」と言っているから、自分で來なかつたことがわかる。

團蓋沟之也

⑩血をくみとって、盟に参加したのである。

輔孔黃森は、ここを「齊侯の意を探った」の意とする。

經夏狄伐晉

經秋七月禘于大廟

⑪「禘」は、三年の大祭の名である。「大廟」は、周公の廟である。『禮記』明堂位に「季夏六月、禘禮をもって周公を大廟に祭る」とあり、雜記下に「孟獻子が言った『七月日至〔夏至〕に、祖を祭ってかまわない』と。七月に禘するのは、獻子が（始めて）したことである」とある。思うに、宣公九年に「仲孫蔑、如京師」とあって、ここで獻子が始めて經に現われ、襄公十九年に卒している。とすれば、禮を失つたのは獻子が始めてではない、ということが明らかである。雜記が言っていることは、甯〔私〕には解せない。

經用致夫人

⑫劉向が言っている『夫人』とは、成風のことである。彼女を大廟に

納れ、立てて夫人としたのである」と。

附「劉向曰」について。馬國翰は『春秋穀梁傳說』〔彼の命名〕の佚文とするが、明確な根拠があるわけではない。なお、『通典』七十二の「諸侯崇所生母議」の項に引く異義穀梁説に「魯僖公立妾母成風爲夫人入宗廟 是子而爵母也 以妾爲妻 非禮也」とある。

團用者 不宜用者也 致者 不宜致者也

言夫人 必以其氏姓 言夫人而不以氏姓 非夫人也 立妾之辭也 非正也

⑤「夫人」は正嫡の名稱であって、妾を崇ぶ美名ではない。妾が君と同體になれば、上下の差別がなくなり、その母を尊ぶとしても、その父を卑しむことになるから、「非正」と言うのである。禮では、「君の母が夫人でない」〔『禮記』服間〕場合があり、また、「庶子が後を繼げば、その母のために總する〔三箇月の喪に服する〕」〔『儀禮』喪服〕から、妾が夫と同體でない〔or夫人でない〕ことが明らかである。

附注の最後は、底本では「是妾不爲夫□明矣」とあって、一字分缺けている。閩・監・毛本は、□を「體」に作り、四部叢刊本は「人」に作っている。

團夫人之 我可以不夫人之乎 夫人卒葬之 我可以不卒葬之乎

⑥鄭嗣が言う「君が夫人とし、君が夫人の禮をもって卒葬の事を行なったのであるから、記録する者も、夫人とせざるを得ない。成風は文公四年に薨じ、五年に葬る。傳は事をし、まいまで解説したのである」と。

附傳文の「我」を、この注では（魯の）主書者と解し、補注では孔子と

する。問題があるところだが、今は追求しない〔cf. 莊公七年〕。

團一則以宗廟臨之而後貶焉

⑥臣には君を貶する義はないから、大廟において夫人の氏姓をとり去ることによって、君の不正を明らかにするのである。

附補注は、貶する對象を夫人と解する。

團一則以外之弗夫人而見正焉

⑥「秦人來歸僖公成風之櫬」〔文公九年〕とあって、「夫人」と言っていない。

附「弗夫人」の（書法としての）内實を、この注では『夫人』と言わないこと」としているが、補注に従って、「ただ『成風』と言わずに、『僖公成風』と言うこと」と解するべきであろう。

經冬十有二月丁未天王崩

⑥惠王である。

〔僖公九年〕

經九年春王三月丁丑宋公禦說卒

經夏公會宰周公齊侯宋子衛侯鄭伯許男曹伯于葵丘

⑥「宰」は官である。「周」は采地である。天子の三公には字をいわない。「宋子」は襄公である。「葵丘」は地名である。

團天子之宰通于四海

⑥「宰」は天官の冢宰で、三公も兼ねる者である。三公は道を明らかに

する官で、會盟のことには携わらないが、冢宰は「邦の六典を建て、王を輔佐して邦國を治める、ことをつかさどる」(『周禮』天官冢宰大宰)。だから、「四海に通じる」と言うのである。

團宋其稱子何也 未葬之辭也 禮 柩在堂上 孤無外事

今背殯而出會 以宋子爲無哀矣

⑤木を積んで槨(外棺)のようにし、それに(泥を)塗るのを、「殯」という。「殷人は兩楹の間に殯し」「周人は西階の上に殯する」(『禮記』檀弓上)。宋は殷の後裔である。

經秋七月乙酉伯姬卒

團內女也 未適人不卒 此何以卒也

許嫁 笄而字之 死則以成人之喪治之

⑥女子は、許嫁(いいなづけ)すれば、殤(若死)扱いはなくなり、死ねば、成人の喪禮をもって取り計らう。諸侯という同身分の相手に許嫁すれば、大功九箇月の喪に服する、ことをいう。吉笄は象牙でつくり、その先をほりきざんで飾にする。成人がこれをつける。

經九月戊辰諸侯盟于葵丘

團桓盟不日 此何以日 美之也 爲見天子之禁 故備之也

⑦何休は次のように考えた「もし、日をいうのが美であるとする、日をいわないのはみな悪ということになる。桓公の盟に日をいわないのはみな悪なのであろうか。莊公十三年の柯の盟では、日をいわないのを信とし、ここでは、日をいうのを美としていて、義が相反してい

る」(『穀梁廢疾』)と。鄭君がこれを釋して言っている「柯の盟に日をいわないのは、始めて信としたからであり、それ以後の盟は、日をいわないのが、平常の表現である。陽穀(僖公三年)からこの葵丘までの盟は、いづれもみな、諸侯に天子の禁を命令した。(齊)桓の徳がきわまって、衰え始めようとするところだから、日を備えて、美としたのである。これ以後は、二度と盟わなかった」(『釋穀梁廢疾』)と。

附注の「因」の字は、「固」に作るテキストもある。

團葵丘之會 陳牲而不殺

⑧所謂、血を飲ることのない盟である。鄭君が言っている「盟の牲には、諸侯は牛を用い、大夫は豕を用いる」と。

附ここの「鄭君曰」は、出典が不明である。何かの注か(?)。

團讀書加于牲上 壹明天子之禁

⑨「壹」は專と同じである。

團曰 毋雍泉

⑩水利を獨占して、谷をふさぐ。

團毋訖糶

⑪「訖」は止である。粟を貯えることをいう。

團毋易樹子

⑫「樹子」は嫡子である。

團毋以妾爲妻

毋使婦人與國事

㊦ 女性は、内で位を正すのである。

經甲子晉侯詭諸卒

㊧ 獻公である。世子申生を無實の罪で殺した「五年」。徳を失えば、葬をいわない。

經冬晉里克殺其君之子奚齊

團其君之子云者 國人不予也 國人不予何也 不正其殺世子申生而立之也

㊨ 諸侯は、喪中には（普通、單に）「子」と稱する。國人が君としないので、「其君」に繋げた、ということを用いるのである。

〔僖公十年〕

經十年春王正月公如齊

經狄滅溫 溫子奔衛

經晉里克弑其君卓及其大夫荀息

團以尊及卑也 荀息閑也

經夏齊侯許男伐北戎

經晉殺其大夫里克

團稱國以殺 罪累上也

里克弑二君與一大夫

㊩ 「二君」とは、奚齊・卓子である。「一大夫」とは、荀息である。

團其以累上之辭言之何也

㊪ （里克には）罪があるから。

團其殺之不以其罪也 其殺之不以其罪奈何

里克所爲殺者 爲重耳也

㊫ 奚齊・卓子を殺したのは、重耳を君にしようとしたからである。「重耳」は、夷吾の兄の文公である。

團夷吾曰 是又將殺我乎 故殺之不以其罪也 其爲重耳弑奈何 晉獻公伐虢得麗姬 獻公私之 有二子 長曰奚齊 稚曰卓子

麗姬欲爲亂

㊬ 「亂」とは、申生を殺して、自分の子を立てる、ことをいう。

團故謂君曰 吾夜者夢夫人趨而來曰吾苦畏

㊭ 「夫人」とは、申生の母である。

團胡不使大夫將衛士而衛冢乎 公曰 孰可使 曰 臣莫尊於世子 則世

子可 故君謂世子曰 麗姬夢夫人趨而來曰吾苦畏 女其將衛士而往衛

冢乎 世子曰 敬諾 築宮 宮成 麗姬又曰 吾夜者夢夫人趨而來曰

吾苦飢 世子之宮已成 則何爲不使祠也 故獻公謂世子曰 其祠 世

子祠 已祠 致福於君 君田而不在 麗姬以酖爲酒 藥脯以毒 獻公

田來 麗姬曰 世子已祠 故致福於君 君將食 麗姬跪曰 食自外來

者 不可不試也

覆酒於地 而地賁

㊮ 「賁」は、沸き起つことである。

傳以脯與犬 犬死 麗姬下堂而啼呼曰 天乎天乎 國 子之國也 子何遲於爲君

君喟然歎曰 吾與女未有過切

④わしとそなたの間には、いまだかつて、さしせまった過ちがあったためしはない。

傳是何與我之深也

⑤この「與」は、王念孫に従って、讎の意に解する。

傳使人謂世子曰 爾其圖之 世子之傅里克謂世子曰 入自明 入自明則可以生 不入自明則不可以生 世子曰 吾君已老矣 已昏矣 吾若此而入自明 則麗姬必死 麗姬死 則吾君不安 所以使吾君不安者 吾不若自死 吾寧自殺以安吾君 以重耳爲寄矣

⑥麗姬がさらに重耳をも讒言することを心配した。だから、彼を里克に託して、守らせたのである。

傳刎脰而死 故里克所爲弑者 爲重耳也 夷吾曰 是又將殺我也

經秋七月

經冬大雨雪

〔僖公十一年〕

經十有一年春晉殺其大夫平鄭父

傳稱國以殺 罪累上也

經夏公及夫人姜氏會齊侯于陽穀

經秋八月大雩

傳雩月 正也 雩得雨曰雩 不得雨曰旱

⑦禮では、龍〔東方の七宿、特に角・亢〕が現われると、雩する〔夏至四月〕。定例の雩は書かない。書くのは、いづれもみな、旱のために雩した場合である。だから、雨を得れば喜び、月をいうのを正しい場合〔八月・九月〕とするのであり、雨を得なければ「旱」と書いて、旱による實害がでたことを明らかにするのである。何休が言っている「公羊では、『雩』を書くのは、人君が變に應じて求めたことをほめてであり、雩しなければ『旱』と言ひ、旱でも實害がなければ『不雨』と言う。もし穀梁のようであれば、もともと雩しなかった場合、どうやってその事を明らかにするのか。もし、『不雨』と書くことによってそれを明らかにするというのなら、旱でも實害がなかった場合、どうやってその事を區別するのか」〔穀梁廢疾〕と。鄭君がこれを釋して言っている「雩は、夏に穀物が實ることを祈願する儀禮であり、旱のときにも行なわれる。雨を得た場合に『雩』と書くのは、雩に効果があったことを明らかにするのであり、雨を得なかった場合に『旱』と書くのは、旱による實害がでてしまい、後で雨を得ても間に合わない、ということを明らかにするのである。國君で旱に遭ったものは、（普段は）民のことを氣にかけていなかったとしても、どうして禮の本を廢し、雩しないことがあるうか。精心誠意を盡すことが出来な

ったことを反省するのである。早でも實害がなかった場合は、もともと、長らく、『不雨』であったと言うことによって區別している。文公二年・十三年に『自十有二月〔or自正月〕不雨 至于秋七月』とあるのが、そうである。穀梁傳では『いくつかの季節を経過して始めて〈不雨〉と言うのは、文公が雨を閔〔うれ〕えなかったからである』といっている。文公は雨を憂えなかったから、僖公のように、一つの季節ごとに『不雨』と書く、ことはしなかったのである。文公が雨を閔えなかったわけは、平生から民のことを考えておらず、性質が消極的で弱く、賢明でなかったからである。（文公二年・十三年の經は）また、當時長らく『不雨』であったが、實害はなかった、ということも示しているのである〔『釋穀梁廢疾』〕と。

經冬楚人伐黃

〔僖公十二年〕

經十有二年春王正月庚午日有食之

④この「正月」は、石經に従って、「三月」に作るべきであろう〔公羊・左氏も「三月」に作っている〕。

經夏楚人滅黃

傳貫之盟 管仲曰 江黃遠齊而近楚 楚爲利之國也 若伐而不能救 則無以宗諸侯矣

⑤「宗諸侯」とは、諸侯が宗とすることをいう。

傳桓公不聽 遂與之盟 管仲死 楚伐江滅黃 桓公不能救 故君子閔之也

⑥黃が霸者〔桓公〕を貧り慕って滅亡を招いたことを閔んだのである。

經秋七月

經冬十有二月丁丑陳侯杵臼卒

〔僖公十三年〕

經十有三年春狄侵衛

經夏四月葬陳宣公

經公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯于鹹

⑦「鹹」は衛地である。

傳兵車之會也

經秋九月大雩

經冬公子友如齊

〔僖公十四年〕

經十有四年春諸侯城緣陵

⑧「緣陵」は、杞の邑である。

傳其曰諸侯 散辭也

㊤ただ「諸侯」と言い、大小の序列がないのは、各自が城こうとし、一つにまとめる者がいなかった、ということである。霸者がつかさどったことではないから、「散辭」というのである。

團聚而曰散何也

㊤「諸侯城」と言えば、聚ったということであるから。

團諸侯城有散辭也 桓德衰矣

㊤「諸侯城」と言えば、霸者の仕業でなかったことがわかる。齊桓の徳が衰えたのが、離散した理由である。何休が言っている「思うに、ここ以前に「or」の盟でも『諸侯』と言っているが、離散したのではない。また、穀梁は、九年の『諸侯盟于葵丘』をほめているが、もし離散したのなら、どうしてほめられようか」「『穀梁廢疾』」と。鄭君がこれを釋して言っている「九年に『公會宰周公齊侯宋子衛侯鄭伯許男曹伯于葵丘』とあり、『九月戊辰（諸侯）盟于葵丘』とある。當時、諸侯は會にきたばかりで、まだ歸った者はいなかった。だから、序列しなくてもよかったのである。今ここでは、十三年の夏に『公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯于鹹』とあり、そして『冬公子友如齊』とある。これは聘である。聘を書いているとすれば、會が固まる前に歸っていたのである。（だから）今ここで『諸侯城緣陵』と言って、参加者を序列しないのは、彼らが離散したことを明らかにしたのである。桓公の徳が衰えたのである。どうして、葵丘の事によって、ここを非難できようか」「『釋穀梁廢疾』」と。

經夏六月季姬及繒子遇于防 使繒子來朝

㊤「遇」には、例として時をいう。ここは、遇うべき相手でないから、謹譏して月をいったのである。

團遇者 同謀也

㊤魯女が理由もなく、遠出して諸侯と會し、そのまま淫通までなし得た。ここもまた「cf. 桓公二年・僖公元年」、事として不適當「ありえない事」である。左傳には「繒の季姬が里歸りすると、公は怒った。繒子が朝さなかったからである。防で遇って來朝させた」とある。こちらの方が、人情によく合致している。

衎補注は、注が「同謀」を淫通に限定して解するのを非とする。

團來朝者 來請已也

㊤來朝させ、自分を妻として請求させたのである。

團朝不言使 言使 非正也 以病繒子也

經秋八月辛卯沙鹿崩

㊤「沙鹿」は、晉の山である。

團林屬於山爲鹿

㊤「鹿」は、山のふもとである。

團沙 山名也 無崩道而崩 故志之也 其日 重其變也

㊤劉向が言っている「鹿は、山のふもとの平地で、臣の象であり、陰の位である。崩は、（臣が）散落し、背叛して、上に事えないことの象である」と。

附『漢書』五行志下之上に、同様の文がみえる。

經狄侵鄭

經冬蔡侯貳卒

傳諸侯時卒 惡之也

〔僖公十五年〕

經十有五年春王正月公如齊

經楚人伐徐

經三月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯盟于牡丘

注「牡丘」は、地名である。

傳兵車之會也

經遂次于匡

注徐を救援したのである。時に、楚人が徐を伐ったからである。「匡」は衛地である。

傳遂 繼事也 次 止也 有畏也

注楚を畏れたのである。

經公孫敖帥師及諸侯之大夫救徐

注諸侯は盟がおわると匡に宿營し、いづれもみな、大夫に、兵をひきいて徐を救援させた。だから、再び諸國を列挙しないのである。

傳善救徐也

經夏五月日有食之

注夜食である。

經秋七月齊師曹師伐厲

注徐邈が言う「思うに、齊桓の末年には、師を用いた場合、及び會した場合、いづれもみな、危ぶんで月をいう。當時、霸業はすでに衰え、勤王の誠が心になくなって、尊大な態度が外にあらわれ、わざわいすでに兆して、ややもすれば危理に接した〔?〕。だから、月をいうのである。多くの國の君は、道を失っても、一世の興衰にまでかわることはなかったが、齊桓は、威力を諸侯に示し、政を天下に行なったから、その得失には、いづれにもみな、（一世の）治亂がかかっていた。だから、《春秋》は重んじて詳述し、ほめるべき事件を記録し、危ぶむべき事件を著わすのである」と。

附「動接危理」の意味が不明である。危ぶむべき理に合った〔近づいた〕というような意味か〔?〕。

經八月螽

傳螽 蟲災也 甚則月 不甚則時

經九月公至自會

注莊公二十七年の傳には「桓の會にはもどったことをいわない。安心できるとしてである」とあるのに、ここで、もどったことをいっている

のは、齊桓の徳が衰えたから、危ぶんで、もどったことをいったのである。

經季姬歸于繪

經己卯晦震夷伯之廟

④「夷」は諡で、「伯」は字である。

⑤この注は、杜預の注にもとづく。

團晦 冥也 震 雷也 夷伯 魯大夫也

因此以見天子至于士皆有廟

⑥明らかに、夷伯の廟は定制をこえていた。だから、これに因んで(正)禮を言うのである。

⑦補注にも指摘するように、注の「過制」の説はおかしい。また、注の「因此以言禮」が、傳の「因此以見天子至于士皆有廟」に即應しているのだとすると、「因此以見天子至于士皆有廟」の主體は傳文ということになるから、注はおかしい。この主體はあくまで經文である「あるいは、注の「因此以言禮」は、傳の「天子七廟」以下を指すのか？それなら問題はないが」。

團天子七廟

⑧(『禮記』)祭法に「王は七廟を立てる。考廟・王考廟・皇考廟・顯考廟・祖考廟と、(さらに)二祧がある。遠廟を祧と稱する」とある。

團諸侯五

⑨考廟・王考廟・皇考廟・顯考廟・祖考廟である。

團大夫三

⑩考廟・王考廟・皇考廟である。

團士二

⑪考廟・王考廟である。

團故德厚者流光 德薄者流卑

⑫雍が言う「徳の厚い者は位が尊く、道の隆い者は爵が重い。だから、天子は遠く七世にまで及び、士は祖を祭るだけなのである」と。

⑬注では、「徳」を今の天子等の徳としているようだが「？」、補注にも指摘しているように、むしろ祖先の徳とすべきであろう。

團是以貴始 德之本也 始封必爲祖

⑭契を殷の祖とし、棄を周の祖とするようなものである。

經冬宋人伐曹

經楚人敗徐于婁林

⑮「婁林」は徐地である。

團夷狄相敗 志也

經十有一月壬戌晉侯及秦伯戰于韓

⑯「韓」は、晉地である。

經獲晉侯

⑰「獲」とは、(その獲を)ゆるさないという表現である「宣公二年傳文」。諸侯はお互いに相手を獲ることは出来ない。

團韓之戰 晉侯失民矣 以其民未敗而君獲也

〔僖公十六年〕

經十有六年春王正月戊申朔隕石于宋五

⑤劉向が言っている『石』は陰の類であり、『五』は陽の數である。陰でありながら陽の行ないをし、墜落を招こうとしている、ことの象である」と。

⑥『漢書』五行志下之下に同様の文がみえる。

團先隕而後石何也

⑦莊公七年には「星隕如雨」とあって、先に「星」と言い、後に「隕」と言っているから。

團隕而後石也

⑧隕ちた後ではじめて、石であることがわかったのである。

團于宋 四竟之内曰宋 後數 散辭也 耳治也

⑨『隕石』は、(まず) 聞いたことを記したのである。(まず) 礪然という落下音を聞き、それを視ると石であり、しらべると五つであった」〔公羊傳文〕。

經是月六鵲退飛過宋都

⑩「是月」とは、隕石の月である。劉向が言っている『鵲』は陽であり、『六』は陰の數である。陽でありながら陰の行ないをし、きっと衰退するであろう、ことの象である」と。

⑥『漢書』五行志下之下に、同様の文がみえる。

團是月者 決不日而月也

⑦「石」には日をいい、「鵲」には月をいう、ということを書わしたいから、「是月」と言ったのである。もし「是月」と言わなければ、同じく戊申であるやにまぎらわしい。

團六鵲退飛過宋都 先數 聚辭也 目治也

⑧『六鵲退飛』は、(まず) 見たことを記したのである。(まず) 見ると六つであり、よくみると鵲であり、さらにゆっくりみると退飛していた」〔公羊傳文〕。

團子曰 石無知之物 鵲微有知之物

⑨異論もあるが、一應、孔子の言はここだけとみる。

團石無知 故日之

⑩石には知がないのに隕ちたとすれば、天がそうさせたのに違いない。だから、詳しく日をいうのである。

團鵲微有知之物 故月之

⑪鵲は、時には自分で退飛しようとする。だから、略して月をいうのである。

團君子之於物 無所苟而已 石鵲且猶盡其辭 而況於人乎

故五石六鵲之辭不設 則王道不亢矣

⑫微細な點も遺さないから、王道を昂揚できるのである。

團民所聚曰都

經三月壬申公子季友卒

傳大夫日卒 正也

⑤「季友」は、桓公の子である。

傳稱公弟叔仲 賢也 大夫不言公子公孫 疏之也

經夏四月丙申繒季姬卒

經秋七月甲子公孫茲卒

傳大夫日卒 正也

經冬十有二月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男邢侯曹伯于淮
傳兵車之會也

〔僖公十七年〕

經十有七年春齊人徐人伐英氏

經夏滅項

傳孰滅之 桓公也

何以不言桓公也

⑥莊公十年には「齊師滅譚」とあって、「齊師」と稱しているから。

傳爲賢者諱也 項 國也 不可滅而滅之乎

桓公知項之可滅也

⑦政治が亂れていて、滅ぼしやすい、ということを知っていたのである。

傳而不知己之不可以滅也

⑧覇者は、鄰國をねぎらいあわれみ、強きをくじき、弱きをたすけるもので、義として人の國を滅ぼしてはならない。

傳既滅人之國矣 何賢乎

君子惡惡 疾其始

⑨その始めを絶てば、惡で終わらなくてすむ〔or 惡をきわめなくてすむ〕。邵が言う「はじめて惡事をなしたのをにくみ、最後までではくまない、ことをいう」と。

傳注の前半は、何休の注にもとづく。

傳善善 樂其終

⑩賢者がその行ないを完うするのを楽しむ。邵が言う「はじめて善事があれば、最後までほめる、ことをいう」と。

傳注の前半は、何休の注と同文である。

傳桓公嘗有存亡繼絕之功 故君子爲之諱也

⑪邵が言う「『存亡』とは、邢・衛を存続させたことをいう。『繼絶』とは、僖公を立てたことをいう。（これが）桓公の善行を完うさせる理由である」と。

經秋夫人姜氏會齊侯于卞

⑫「卞」は、魯地である。

經九月公至自會

⑬（齊）桓の會には、もどったことをいわない（莊公二十七年傳文）はずだったのに、今ここでは、會からもどったことをいつている。

桓公は徳が衰えて、威信が著われず、兵車をならべて、さらに項を滅したからである。(僖公は) 往って會するだけでもよくないのに、そのうえ、年を踰えてからようやくもどった。だから、往復いづれも月をいって危ぶんだのである。

經冬十有二月乙亥齊侯小白卒

傳此不正 其日之何也

②二十四年には、「晉侯夷吾卒」とあって、日を書いていないから。

傳其不正前見矣 其不正之前見何也

以不正入虛國 故稱嫌焉爾

③莊公九年に「齊小白入于齊」とあり、貶して、「公子」を稱していない。「虚國」とは、齊に君がいなかったことをいう。傳例に「國をもつて氏をいうのは、(國君に) まぎらわしい場合である」(莊公八年傳文)とある。

〔僖公十八年〕

經十有八年春王正月宋公曹伯衛人邾人伐齊

傳非伐喪也

④喪を伐つのは「or伐つて」無道であるから、謹譏して月をいっただのである。

經夏師救齊

⑤魯の師である。

傳善救齊也

經五月戊寅宋師及齊師戰于甌

⑥「甌」は、齊地である。

經齊師敗績

傳戰不言伐 客不言及 言及 惡宋也

⑦何休が言っている「戰で『及』と言うのは、客と主、直と不直を區別するため(の手立て)」である。だから、文公十二年には『晉人秦人戰于河曲』とあって、兩方が不直なため、『及』と言わないのである。

今ここで、宋に『及』と言うのは、直が宋の方にあることを明らかにしたのであって、宋をにくむため(の手立て)ではない。もし、『及』と言うのが、にくむということであれば「or惡ということであれば」、河曲の戦は、兩方をほめた「or兩方が善である」ということか。しかし、穀梁では、河曲で『及』と言わないのは略したのである、としているから、おのづと矛盾する「『穀梁廢疾』と。鄭君がこれを釋して言っている『及』は、客と主とを區別するだけであって、直と不直とは係わらない。直・不直は、事件そのものに自然と示されている。義兵ならば、客「伐った方」が直なのであって、宣公十二年の夏に『晉荀林父帥師及楚、戰於邲 晉師敗績』とある。兵が不義ならば、主人「伐たれた方」が直なのであって、莊公二十八年の春に『衛人及齊人戰 衛人敗績』とある。今ここでは、齊桓が卒して、まだ葬っていないのに、宋襄が霸事を興こそうとして喪を伐った。禮に反するこ

と甚しい。だから、文をさかさまにして、宋を先に書いて齊に及んだのである。もし、宋を先に書いて齊に及ぶのが、直が宋の方にあることを明らかにしたものであるならば、邲の戦で、直が楚にあるのに、楚を先に書いて晉に及ぶというふうにしないのはなぜか。秦と晉とが河曲で戦って、『及』と言わないのは、彼らがしばしば舉兵して戦争したことをにくむから、その先後「順序」を略したのである」『釋穀梁廢疾』と。

經狄救齊

團善救齊也

經秋八月丁亥葬齊桓公

①「豎刁・易牙が權を争い」「公羊傳文」、五公子が立つことを争った「十七年の左氏傳文に近い」。だから、(日をいって)危ぶんだのである。

經冬邢人狄人伐衛

團狄其稱人何也 善累而後進之

②「累」は、積である。

團伐衛 所以救齊也

③何休が言っている「もし、衛を伐って齊を救援したのなら、(伐・救の)兩方をあげて、『伐楚救江』『文公三年』のようにするはずである。また、その傳では、江は遠く楚は近いから、楚を伐って江を救援した

のである、としているが、今ここで、狄もまた衛に近くて齊に遠いから、事件としては同一である。(それなのに)義が異なるのはなぜか」『穀梁廢疾』と。鄭君がこれを釋して言っている「文公三年の冬に『晉陽處父帥師伐楚救江』とあって、(伐・救の)兩方をあげているのは、晉に、江を救援したという文がなかったから、それを明言したのである。今ここでは、春に『宋公曹伯衛人邾人伐齊』とあり、夏に『狄救齊』とあり、冬に『邢人狄人伐衛』とあるから、(衛を伐ったのは)齊を救援するためであったことがわかる。だから、文を省いたのである。事件として同一であり、義もまたどうして異なろうか」『釋穀梁廢疾』と。

團功近而德遠矣

④衛を伐ったのは、功としては近小である。(しかし)夷狄の身で中國のことを心配したのだから、その徳は遠大である。

附補注にも指摘するように、ここの傳文は、齊桓のことをいったものと解するべきであらう。

〔僖公十九年〕

經十有九年春王三月宋人執滕子嬰齊

經夏六月宋公曹人邾人盟于曹南

⑤「曹南」は、曹の南鄙である。

經繒子會盟于邾 己酉邾人執繒子用之

傳微國之君因邾以求與之盟

㊦「與」とは、まじりあづかることである。

傳人因己以求與之盟 己迎而執之 惡之 故謹而日之也

用之者 叩其鼻以衄社也

㊦「衄」とは、血ぬることである。鼻の血を取って、それを社を祭る器にぬったのである。

經秋宋人圍曹

經衛人伐邢

經冬會陳人蔡人楚人鄭人盟于齊

㊦會に主名がないのは、内〔魯〕の卑者だからである。四國が「人」と稱するのは、外の卑者だからである。杜預が言っている「場所を『齊』としているから、齊も盟に参加したのである」と。

經梁亡

傳自亡也 洩於酒淫於色 心昏耳目塞 上無正長之治 大臣背叛 民爲

寇盜 梁亡 自亡也

如加力役焉 洩不足道也

㊦もし、伐たれて滅亡したというふうに表現すると、酒色に溺れたことが告發できない。自分から亡んだというふうに表現して始めて、その惡が明らかになるのである。

傳俞樾は、「力役」を、攻撃ではなくて、土功の意と解する。

傳梁亡 鄭棄其師 我無加損焉 正名而已矣

梁亡 出惡正也

㊦「正」とは、政教をいう。

傳鄭棄其師 惡其長也

㊦「長」とは、高克のことをいう。

〔僖公二十年〕

經二十年春新作南門

傳作 爲也 有加其度也

㊦改め加えて、大きくしたのである。

傳言新 有故也 非作也

㊦舊制を改めたことを責めたのである。

傳南門者 法門也

㊦「法門」とは、天子諸侯がいづれもみな南面して治め、法令が出入するところをいう。だから、「法門」というのである。

傳補注では、禮法で定められた門とする。

經夏郕子來朝

經五月乙巳西宮災

傳謂之新宮 則近爲禰宮

㊦閔公は僖公の父ではないから「新宮」と言わない、ということを行っているのである。

團以諡言之 則如疏之然

②だから、「閔宮」と言わずに、「西宮」と言ったのである。
團以是爲閔宮也

經鄭人入滑

經秋齊人狄人盟于邢

團邢爲主焉爾 邢小 其爲主何也

(其)爲主乎救齊

③十八年に「邢人・狄人が衛を伐ち」、齊を救援したのが、そうである。
傳文の「其」は、王引之に従って衍文とみる。

經冬楚人伐隨

團隨 國也

〔僖公二十一年〕

經二十有一年春秋侵衛

經宋人齊人楚人盟于鹿上

④宋は盟主となった〔orであった〕から、齊の上におかれたのである。

「鹿上」は、宋地である。

⑤この注は、杜預の注にもとづく。

經夏大旱

⑥傳例に「(雩して) 雨を得たときには『雩』と言ひ、雨を得なかったときには『旱』と言う」〔僖公十一年傳文〕とある。

團旱時 正也

經秋宋公楚子陳侯蔡侯鄭伯許男曹伯會于雩

⑦「雩」は宋地である。「雩」は、「字」につくるテキストもある。

經執宋公以伐宋

團以 重辭也

⑧傳例に「『以』とは、以てはいけなかった場合にいう」〔桓公十四年傳文他〕とある。この傳、及び定公七年の「齊人執衛行人北宮結以侵衛」の傳では、いづれも「『以』は重辭である」と言っている。とすれば、「以」には二つの義があることになる。國が重んじていた人物であるから、「重辭」と言うのである。

經冬公伐邾

經楚人使宜申來獻捷

⑨楚が「人」と稱するのは、「宋公を執えたために貶したのである」〔公羊傳文〕。

團捷 軍得也

其不曰宋捷何也

⑩莊公三十一年には「齊侯來獻戎捷」とあるから。

團不與楚捷於宋也

⑨夷狄が中國から戰利品をとることをゆるさないのである。

附注の「以」は、四部叢刊本に従って、「與」に改める。あるいは、「以」は、「與」に通じるか〔?〕。

經十有二月癸丑公會諸侯盟于薄

⑩雩で會した諸侯である。

團會者 外爲主焉爾

經釋宋公

團外釋不志 此其志何也 以公之與之盟目之也 不言楚 不與楚專釋也

⑪何休が言っている「《春秋》は、執えることを罪とし、釋放すること

は罪としない。(だから) 楚子の專釋を責めるのは、理に合わない。公羊では、公が諸侯と會して釋放したから、再び楚を出すことはしないのである、としている」『穀梁廢疾』と。鄭君がこれを釋して言

っている「『楚の專釋をゆるさない』というのは、楚を責めているわけではない。傳に『外が釋放したことは記さない。ここで記している

のはなぜか。公がいっしょに盟ったから、目して記したのである』とある。公が諸侯と盟って宋公を釋放したから、公に(も)功績があった、という意味である。(つまり) 公羊と、義はくい違っていない」『釋穀梁廢疾』と。

附補注にも指摘するように、ここの鄭玄の釋はおかしい「專」とは、單獨でという意味ではなくて、勝手にという意味である」。

〔僖公二十二年〕

經二十有二年春公伐邾取須句

經夏宋公衛侯許男滕子伐鄭

經秋八月丁未及邾人戰于升陘

⑫「升陘」は魯地である。

團內諱敗 舉其可道者也 不言其人 以吾敗也 不言及之者 爲內諱也

經冬十有一月己巳朔宋公及楚人戰于泓 宋師敗績

團日事遇朔曰朔 春秋三十有四戰 未有以尊敗乎卑 以師敗乎人者也

以尊敗乎卑 以師敗乎人 則驕其敵 襄公以師敗乎人而不驕其敵何也 責之也

泓之戰 以爲復雩之恥也

⑬前年、宋公は楚に執えられた。

團雩之恥 宋襄公有以自取之 伐齊之喪 執滕子 圍曹 爲雩之會 不顧其力之不足而致楚成王 成王怒而執之 故曰 禮人而不答 則反其敬 愛人而不親 則反其仁 治人而不治 則反其知 過而不改 又之

⑭「又」は、復〔ふたたび〕である。

團是謂之過 襄公之謂也 古者被甲嬰冑 非以興國也 則以征無道也 豈曰以報其恥哉

宋公與楚人戰于泓水之上 司馬子反曰 楚衆我少 鼓險而擊之 勝無幸焉

⑨もし、(岸邊で) まちかまえて撃てば、きつと破ることが出来る。僥倖ではない。

帥王念孫は范注を非とし、「鼓險而擊之勝 無幸焉」と句讀して、「幸」を好機の意とする。

團襄公曰 君子不推人厄 不攻人厄 須其出

⑩楚が險から出るのを待った。

團既出 旌亂於上 陳亂於下 子反曰 楚衆我少 擊之 勝無幸焉

襄公曰 不鼓不成列

⑪「列」は、陳「陣」である。

團須其成列而後擊之 則衆敗而身傷焉 七月而死

⑫何休が言っている「もし、宋公自身が傷ついたらのなら、『公』と言うはずで、『師』と言うはずはない。成公十六年に『楚子敗績』とあるように。また、成公十六年の傳では『師』と言わないのは、君は師よりも重いからである』と言っている。もし、成公十六年が正しければ、二十二年「ここ」はうそである。もし、二十二年が正しければ、十六年はまちがっている」(『穀梁廢疾』)と。鄭君がこれを釋して言っている「傳では、『楚子敗績』を解説して、『四體「手足」がばらばらになる(のを「敗」と言う)。ここは目をやられたのである』と言っている。これは、君の目と手足がやられて始めて、『敗』とみなす、ということである。今ここでは、宋の襄公は、軀が傷ついただけ

であって、鼓を持つことはできたはずである。(つまり) 軍事に障害がなかったのに師が敗れたから、『宋公敗績』と言わないのである。

傳が『それで、衆は敗れ、自分の軀も傷ついた』と言う理由は、信であつても道に合せず、そのため大きな恥辱をうけた、ことをにくむからである」(『釋穀梁廢疾』)と。

⑬傳文の「身」を、鄭玄は軀の意としているようだが、傳文に即して考えれば、「衆」との對應から、自分、自身の意とするべきであらう。

團倍則攻 敵則戰 少則守

人之所以爲人者 言也 人而不能言 何以爲人 言之所以爲言者 信也 言而不信 何以爲言 信之所以爲信者 道也 信而不道 何以爲信 道之貴者 時也 其行勢也

⑭凱が言う「道には時があり、事「時」の誤りか?」には勢がある。道については何を貴ぶのか。時に合することを貴ぶのである。時については何を貴ぶのか。勢に順うことを貴ぶのである。宋公は匹夫の狷介を守り、無意味に夷狄から恥を蒙った。どうして、大通の方・至道の術を識っているといえようか」と。

⑮傳文の「何以爲道」は、王引之に従つて、「何以爲信」に改める。

〔僖公二十三年〕

經二十有三年春齊侯伐宋圍閔

團伐國不言圍邑 此其言圍何也 不正其以惡報惡也

⑯以前の十八年に宋が齊の喪を伐ったのが、(「報惡」の)「惡」である。

今ここで、齊が（楚の）勝利に乗じて報復したのが、「以惡報惡」である。

經夏五月庚寅宋公茲父卒

④桓公の子の襄公である。

團茲父之不葬何也 失民也 其失民何也 以其不教民戰 則是棄其師也

爲人君而棄其師 其民孰以爲君哉

⑤何休が言っている「所謂民に戰を教えるとは、練習させることである。《春秋》は、偏戰を貴び、詐戰をにくむ。宋の襄公が泓で敗れた理由は、禮を守って偏戰したからであって、民に（戰を）教えなかったからではない。孔子は『君子が仁から離れたら、どうして君子といえよう。忙しいときでも仁からはずれず、危急のときでも仁を忘れない』『論語』里仁篇』と言っている。正を守って敗れたのに、それをにくむ、ということはないのである。公羊では、葬を書かないのは、襄公のために、殯に背いて出て會したことを諱んでであり、（それは）襄公が齊桓の後を承けて周室を尊ぼうとするりっぱな志をもっていたことをほめるため（の手立て）である、としている」『穀梁廢疾』と。

鄭君がこれを釋して言っている「民に教えて戰を習わせておきながら用いないのも、『不教』ということである。詐戰とは、期日を約束しないものをいうのであって、期日を約束した以上、敵の様子を觀察して對策をねり、『倍すれば攻め、匹敵すれば戦い、劣れば守る』『二十年傳文』のが當然である。ところが、宋の襄公は、泓の戦において

これに違反し、また、臣下の策謀を用いずに敗れた。だから、『無意味に善の一點張りで、賢良を用いなければ、霸主の功を興こすことは出來ず、無意味に信の一點張りで、權譎の謀を知らなければ、鄰國と交わり遠國と會することは出來ない』『春秋緯考異郵』のである。だから、〈易〉では、『鼎が足を折る〔身にあまる大任を負って失敗する〕』『鼎卦九四爻辭』のを譏り、〈詩〉では、良士を用いなかったことを刺っている〔鄭風〈狡童〉及び〈揚之水〉〕のである」『釋穀梁廢疾』と。この説（の方）がよい。

⑥『詩』大雅〈大明〉 正義に引く『箴左氏膏肓』中に、「考異郵云」として、次のような文がみえる。「襄公大辱 師敗于泓 徒信不知權譎之謀 不足以交鄰國定遠疆也」と。この文に従って、鄭君の『釋』中の「徒言不知權譎之謀」の「言」は、「信」に改める。なお、『釋』中の「徒善不用賢良云」も、考異郵の文と推定される。

經秋楚人伐陳

經冬十有一月杞子卒

⑦莊公二十七年では「伯」を稱しているのに、今ここで、「子」を稱しているのは、おそらく、時の王に黜けられたためであろう。

〔僖公二十四年〕

經二十有四年春王正月

經夏狄伐鄭

經秋七月

經冬天王出居于鄭

㊦襄王である。天子は天下を家とするから、どこにいても「居」と稱する。

團天子無出 出 失天下也

㊦王者には外が無い。「出」と言うと、外があるという表現になってしまふ。江熙が言う「天子は必ず、巡守するということではじめて、外出するのである。だから、河陽の（巡）守は、『天王の行（外出）』を完全にした」〔二十八年傳文〕のである。平王の東遷以後、その詩は以前のように雅正であることが出来なくなって、〈國風〉の列に入れられた「つまり、〈王風〉である」。襄王は鄭に奔り、天王の行を完全にすることが出来なかった。これでは、諸侯と異なるところがない。だから、『出』と書いたのである。夫子は『堯舜を祖述し、文武を憲章する』〔中庸〕から、斯文がおれば、道を人に借すことはないのだが、傳で『天下を失った』と言っているように、（ここでは、徳が）闕けて完備してなかったのである」と。

附補注にも指摘するように、江熙の説の後半は、意味がよくわからない。

團居者 居其所也 雖失天下 莫敢有也

㊦邵が言う「實際には出奔したとしても、王者には外が無いから、王が居る所は（どこでも）王畿ということになり、鄭はそこを國として所

有できないのである」と。

附補注・俞樾も指摘するように、「莫敢有」の「有」は、天下を所有するの意と解した方がよからう。

經晉侯夷吾卒

㊦傳に「諸侯の卒に時をいうのは、にくむ場合である」〔十四年〕とある。葬をいわないのは、文公から位を奪って立ち、徳を失ったからである。

〔僖公二十五年〕

經二十有五年春王正月丙午衛侯燬滅邢

團燬之名何也

㊦宣公十二年には「楚子滅蕭」とあって、名をいってないから。

團不正其伐本而滅同姓也

㊦先祖の肢體を絶つというのはゆゆしきことである。だから、名をいって、ひどいとしたのである。

附この注は、すぐ前の注とともに、何休の注にもとづく。

經夏四月癸酉衛侯燬卒

經宋蕩伯姬來逆婦

㊦「伯姬」は魯女で、宋の大夫蕩氏の妻となっていた。自分で、その子のために、（魯に）来て婦を迎えたのである。

附この注は、杜預の注とほぼ同文である。

團婦人既嫁不踰竟 宋蕩伯姬來逆婦 非正也 其曰婦何也 緣姑言之辭也

經宋殺其大夫

團其不稱名姓 以其在祖之位尊之也

②何休が言っている「『曹殺其大夫』〔莊公二十六年〕でも名姓を稱してないが、どうして、それもまた祖であるとするのが出來ようか」「『穀梁廢疾』」と。鄭君がこれを釋して言っている「宋の大夫はすべて同姓〔底本は『名姓』に作るが、四部叢刊本に従って改める〕である。禮では、公族に罪があれば、甸師氏のもとで処刑し、國人が兄弟を慮ることをゆるさない。尊んで特別扱いするため（の手立て）である。孔子の祖の孔父が宋の殤公に連累して死に〔桓公二年〕、今ここで、骨肉が同じ位にいて殺された。だから、これを尊び、隠んで名氏を稱するに忍びないのである。罪が大きいときには、名だけはいいい、異姓であるかのように表現する。これは、祖〔親〕についてはかえって表現を疏にする、ということである。『曹殺其大夫』の場合は、これはこれで、大夫がないという理由で名氏を稱さないのである。《春秋》は、表現が同じで事件〔内容〕が異なることが非常に多い。隱公では、『即位』をとり去ることによって讓意を示し、莊公では、『即位』をとり去ることによって弑された君を繼いだことを示している。これなども、比例ということをもちだして非難することが出来るだろ

うか」〔『釋穀梁廢疾』〕と。

附鄭玄は、「祖之位」を宋の大夫の位と解している〔？〕ようだが、補注では、司馬の位とする。なお、鄭玄の『釋』中の「禮云云」について、『周禮』甸師に「王之同姓有辜則死刑焉」とあり、『禮記』文王世子に「刑于隱者不與國人慮兄弟也」とある。

經秋楚人圍陳 納頓子于頓

團納者 內弗受也

圍一事也 納一事也 而遂言之

②事件が異なるのに、ことばが連なっていて、事を繼いだ表現のようである、ことを怪しんだのである。

團蓋納頓子者陳也

②陳を圍んで、（陳に）頓子を納めさせたのである。

經葬衛文公

經冬十有二月癸亥公會衛子莒慶盟于洮

②衛が「子」と稱するのは、喪中だったからである。「洮」は魯地である。

團莒無大夫 其曰莒慶何也 以公之會目之也

②小國には大夫がない。公が會に参加したから、進めたのである。その時、衛子がいたから、（大夫が）公に匹敵するという心配はない。

《附 録》

〔莊公元年〕

經元年春王正月

傳 弑された君を繼いだ時に即位を言わないのは、正當な場合である。弑された君を繼いだ時に即位を言わないのが正當な場合であるのはなぜか。先君がまっとうな死に方をしなかった場合、子は即位するに忍びないからである。

經三月夫人孫于齊

傳 「孫」というのは、(子孫の) 孫と同じである。奔を諱んだのである。(實際には既に齊にいたのに、ここで「孫」と書いているのは) 練時に際して母の事變を記録し、始めてこれをあわれんだのである。氏姓を言わないのは(夫の命に順わなかったから) 貶したのである。人は天に對しては、道によって命を受け、人に對しては、言によって命を受ける。道に順わない者は、天がこれを絶ち、言に順わない者は、人がこれを絶つ。(だから) 臣子「妻も含む」は命を受けることを尊ぶのである。

經夏單伯逆王姬

傳 「單伯」とは何者か。わが國の大夫で、天子から(直接に) 爵命を受けた者である。天子から(直接に) 爵命を受けた大夫であるから、名を言わないのである。「如(京師)」と言わないのはなぜか。義として、

(命令を) 京師から受け(たように表現す)るわけにゆかないからである。義として、京師から受けるわけにゆかないのはなぜか。(魯) 君自身が齊に殺されたのに、(天子は) 魯に命じて婚姻の主人役とし、(仇敵の) 齊と禮を行なわせたことになる。(だから) 義として、當然受けるわけにゆかないのである。

經秋築王姬之館于外

傳 築くこと(自體)は禮であるが、(城) 外に築くのは非禮である。築くことが禮であるのはなぜか。王姬の主人役は必ず公門からおくり出す「？」のだが、廟に置いたのでは尊すぎるし、寢に置いたのでは卑すぎる。(そこで) 王姬のために(別に) 築造するのである。(ところでこの場合) 外に築いたのは變の正である「權宜の處置として認可される」。外に築いたのが變の正であるのはなぜか。仇讎の人「齊」は婚姻を結ぶべき相手ではなく、(また) 衰麻「喪服、魯莊公を指す」は弁冕「祭服、齊侯を指す」と接するべき服装ではない、からである。齊侯が(魯に) 来て迎えたことを言わない、のはなぜか。齊侯にわが國と禮を行なわせないからである。

經冬十月乙亥陳侯林卒

傳 諸侯の卒に日をいうのは、正當だった場合である。

經王使榮叔來錫桓公命

傳 禮では、(諸侯の方が京師まで行って) 命を受けることはあるが、

(天子の方が) 来て命を與えることはない。(来て) 命を與えるのは不正である。(また) 生きているときに服を加え、死んだときにそれを行なわせる「？」のが、禮である。生きているときに服を加えず、死んでから追って與えるのは、不正の甚しきものである。

傳「死行之」は、意味がよくわからない。

經王姬歸于齊

傳(魯が) 主「主人役」となった場合は、「歸」を書く。

經齊師遷紀邢鄆部

傳「紀」は國である。「邢鄆部」は國である「齊の師が、紀と邢鄆部と(の二國)を遷したのである」。一説に、(齊の師が) 紀を邢鄆部に遷したのである。

〔莊公二年〕

經二年春王二月葬陳莊公

經夏公子慶父帥師伐於餘丘

傳國の場合に「伐」と言う。「於餘丘」は邾の邑である。(それなのに) ここで「伐」と言うのはなぜか。「公子」は貴く、「師」は重いのに、(そんな大がかりで) 他國の一邑を相手にした。(だから、「伐」と言つて) 公子を病ましめる「非難する」のである。公子を病ましめるのは、(莊) 公を譏るため(の手立て) である。一説に、(邾の) 君がこ

こにいたから、重んじたのである。

經秋七月齊王姬卒

傳(魯が) 主「主人役」となった場合は、卒をいう。

經冬十有二月夫人姜氏會齊侯于禚

傳婦人は嫁げば竟を踰えない。竟を踰えるのは正しくない。婦人には「會」と言わない。「會」と言うのは、正しくない場合である。「饗」はもっとひどい。

經乙酉宋公馮卒

〔莊公三年〕

經三年春王正月溺會齊師伐衛

傳「溺」とは何者か。公子溺である。「公子」と稱さないのはなぜか。仇讎「齊」と會して同姓「衛」を伐ったことをにくむから、貶して名(だけ)をいっただのである。

經夏四月葬宋莊公

傳葬に月をいうのは、事變があつた場合である。

經五月葬桓王

傳傳に言う、改葬である。改葬の禮では、總服する。(五服のうちで) 最下級のものにするのは、(死から) 遠くへだたっているからである。

一説に、(改葬ではなくて、この時まで)尸をそのままにしておいて「or下柩の時期を遅らせて」、諸侯に會葬を要求したのである。天子には「崩」を記し、「葬」は記さない。必ず定まったとき「死後七箇月」に葬るからである。なぜ定まっているのか。天下をあげて一人を葬るため、その義に疑いがないからである。「葬」を記すのは、事變があった場合である。葬ることが出来ないのではないかと危ぶむのである。(魯は京師に)近いのだから、(天子の)崩をのがすはずがない。(だから)「崩」を記さないのは、(天子が)天下を失った場合である。(萬物or人は)陰「母」だけでは生ぜず、陽「父」だけでは生ぜず、ただけでは生じない。三者が合してはじめて生じるのである。だから、母の子でもよく、天の子でもよい。(そこで)尊者は尊稱「天子」を取り、卑者は卑稱「母子」を取るのである。「王」と言うのは、民が歸往するところだからである。

經秋紀季以鄫入于齊

團「鄫」は紀の邑である。「齊に入った」とは、鄫を以「ひきい」て齊に事えたのである。「入」とは、内「この場合は齊」が(義として)受け入れないということである。

經冬公次于郎

團「次」とは、止の意味である。(齊を)畏れたからである。紀を救おうとして出来なかったのである。

〔莊公四年〕

經四年春王二月夫人姜氏饗齊侯于祝丘

團(この場合)饗したのは、ひどい非禮である。「齊侯を饗した」と書いたのは、齊侯を病ましめる「にくむ」ため(の手立て)である。

經三月紀伯姬卒

團外夫人には(普通)卒をいわない。ここで「卒」と言うのはなぜか。わが國の(公)女だからである。(魯の公女が)他の諸侯のところに嫁げば、尊が同等であり、わが國は彼女のために變ずるから、卒をいうのである。

經夏齊侯陳侯鄭伯遇于垂

經紀侯大去其國

團「大去」とは、一人も遺さないという表現である。民が四年で、ことごとく紀侯に従って國を出てしまった、ということである。紀侯は賢であるのに、齊侯がこれを滅した。「滅した」と言わずに、「その國を大去した」と言うのは、小人「齊侯」に君子「紀侯」をしのがせないためである。

經六月乙丑齊侯葬紀伯姬

團外夫人には(普通)葬を書かない。(それなのに)ここで葬を書いているのはなぜか。わが國の(公)女であって、國を失った。だから、

痛んで葬を書いたのである。

經秋七月

經冬公及齊人狩于郕

團「齊人」とは、齊侯のことである。「人」と言うのはなぜか。公の敵を卑んでであり、それは公を卑むため（の手立て）である。なぜ公を卑むのか。復讐してないのだから、怨はとけていないはずである。（それなのに）怨をといたことを譏るのである。

〔莊公五年〕

經五年春王正月

經夏夫人姜氏如齊師

團師について「如」と言うのは、（師が）多人數の場合である。婦人は嫁げば竟を躐えない。竟を躐えるのは非禮である。

經秋鄆黎來來朝

團「鄆」は國である。「黎來」は微國の君で、（天子から）爵命を受けていない者である。

經冬公會齊人宋人陳人蔡人伐衛

團これは齊侯・宋公である。「人」と言うのはなぜか。諸侯を人とする〔貶する〕のは、公を人とするため（の手立て）である。公を人とす

るのはなぜか。天王の命にさからったからである。

〔莊公六年〕

經六年春王三月壬子突救衛

團「王人」とは卑者である。名〔or字〕を稱するのは、貴んでである。（この記事は）衛を救援したことを善した〔ほめた〕のである。救援した者がほめられれば、伐った者は不正である。

經夏六月衛侯朔入于衛

團「衛を伐って朔を納めた」と言わないのはなぜか。天王の命に逆らわせないためである。「入」とは、内〔この場合は衛〕が（義として）受け入れないということである。なぜ受け入れないのか。王命によって絶ったからである。朔に〔or「朔」と〕名をいうのは、悪いからである。朔は、入るのが逆であれば、出るのは順である。朔に出入とも名をいうのは、王命によって絶ったのである。

朔朔の出奔は、桓公十六年にみえる。

經秋公至自伐衛

團惡事には（普通）もどったことをいわない。ここでもどったことをいうのはなぜか。もどったことをいわないと、公の惡事の完成をあらわせないからである。

經螟

經冬齊人來歸衛寶

團齊を首領とするのは、惡を齊に分けてである。(實際には衛が直接おくれたのであるが) いったん齊に下って、それからわが國に來た、かのように表現したのである。(これによって、魯の) 惡戰(の罪)は減じられる。

補注によれば、「(實際には齊を経由して賂としておくれたのであるが) 齊がへり下って、わが國に(單なる) おくりものをしに來た、かのように表現したのである」という意味になる。公羊傳文には「衛人歸之」とあるから、補注の説はうがち過ぎかもしれない。

〔莊公七年〕

經七年春夫人姜氏會齊侯于防

團婦人には「會」といわない。「會」というのは、正しくない場合である。

經夏四月辛卯昔恒星不見

團「恒星」とは、經常の星のことである。日が入ってから星が出るまでを「昔」「夕」という。「現われなかった」とは、本來現われるはずであるということである。

經夜中星隕如雨

團隕ちるのが雨のようであったのは、夜の真中の出來事なのか。《春秋》は、明らかなことは明らかなまま伝え、疑わしいことは疑わしいまま

伝える。真中は微妙(でわかりにくいもの)だが、「夜中」と言っているからには、明らかなのであつたのである。何によって真中であることが

わかつたのか。異變の始めはのがしたが、隕ちた時を録しておい(て、水時計で測つ)たら、夜の真中だったのである。恒星が隕ちたと言わないのはなぜか。恒星が現われなかったことはわかつたが、隕ちたのは何の星だかわからなかつたからである。隕ちて地に接したのを見たのならば、「雨(星)」と言ってよいのではないか。上「落下中」に明らかに見え、下「地上におちた結果」にも見えるのを、「雨」と言う。下に明らかに見え、上には見えないのを、「隕」と言う。(星の場合は普通、地上におちた結果を隕石としてみるだけであるから) どうして「雨」と言えようか。

團實はこの場合は、星にもかかわらず、上「落下中」に見えたのである。そこで、一應原則にしたがつて「隕」と言い、その後に(特に)「如雨」を加えたのである。

なお、この傳文を解釋するのに、山田琢氏の「公羊傳の『不修春秋』をめぐって」(『東京支那學報2』)を参考にした。ただし、傳文の「我」について、氏が孔子をさすとしているのには賛同できない。特に譯出しなかつたが、魯(の實見者)をさすするべきであろう。

經秋大水

團高・下のいづれにも水災があるのを「大水」という。

經無麥苗

團 麥と苗とを同時になくしたのである〔cf. 二十八年〕。

經 冬夫人姜氏會齊侯于穀

團 婦人には「會」といわない。「會」というのは、正しくない場合である。

〔莊公八年〕

經 八年春王正月師次于郎以俟陳人蔡人

團 「次」は、止である。「俟」は、待である。

經 甲午治兵

團 出るときは「治兵」と言う。戦を習わすのである。入るときは「振旅」と言う。戦を習わすのである。治兵したら、陳・蔡はやって來なかつた。嚴整をもって兵事を終えたからである。たくみに陳する者は戦わないとは、この事を言つたのである。（一般に）たくみに國を治める者は師をおこさず〔or 備えず〕、たくみに師をおこす〔or 備える〕者は陳せず、たくみに陳する者は戦わず、たくみに戦う者は死なず、たくみに死ぬ者は亡びない。

例 「善爲國者不師」 以下については、『逸周書』・『鹽鐵論』・『漢書』刑法志等に、同様の文がみえる。

經 夏師及齊師圍郕 郕降于齊師

團 （「齊の師が郕を降した」と言わずに）「（郕が）齊の師に降った」と

言うのはなぜか。齊の師に、郕に對して威力を加えさせないためである。

經 秋師還

團 「還」とは、事がおわっていない〔その事を果さなかつた〕ということである。（同姓を滅したことを）はばかつたのである〔or（魯は齊を畏れて、齊を伐たず）退き逃げたのである〕。

經 冬十有一月癸未齊無弒其君諸兒

團 大夫がその君を弒するのに、國をもつて氏をいうのは、（國君に）まぎらわしい場合である。（つまり）弒して、これにとって代わろうとした場合である。

〔莊公九年〕

經 九年春齊人殺無知

團 （國をもつて氏をいわず）「無知」と、ただ名だけをあげるのは、（國君に匹敵する）きらいがなくなつたからである。「人」を稱して（大夫を）殺すのは、有罪を殺す場合である。

經 公及齊大夫盟于暨

團 公は（外の）大夫とともにしない。（ここでもにしてゐるのは、齊に君がいなからである。）大夫に名をいわないのは、君がいなからである。（この盟は、齊に）子糾を納めることを盟つたのである。日

をいわないのは、その盟が変わってしまったからである。齊に君がない状況で、齊の事は公の意のままになったはずである。(容易に)納めることが出来る状況であるのに、(すぐに)納めなかった。だから、内〔魯〕をにくむのである。

經夏公伐齊納糾

傳(容易に) 納めることが出来る状況であるのに、(すぐに) 納めず、齊が盟を變えてから伐った。だから、乾時の戦で「敗」を諱まない〔下八月の經文〕。魯をにくんでである。

經齊小白入于齊

傳大夫が出奔し、(また國に) かえるのに、好〔善〕をもってする場合「歸」と言い、惡をもってする場合「入」と言う。齊の公孫無知が襄公を弑したため、公子糾・公子小白は國に出来ること出来ず、出亡した。齊の人が無知を殺し、公子糾を魯から迎えようとする、公子小白は公子糾に譲らず、先に(國に) 入り、さらに子糾を魯で殺した。だから、「齊の小白が齊に入った」と言う。彼をにくんでである。

經秋七月丁酉葬齊襄公

經八月庚申及齊師戰于乾時 我師敗績

經九月齊人取子糾殺之

傳外には「取」〔内から取る〕と言わない。ここで「取」と言うのは、

内〔魯〕を病ましめて「にくんで」である。「取」とは、容易であったという表現である。「自分たちの子糾を取って、これを殺した」と言うようなものである。十室の邑があれば、難を逃れることができ、百室の邑があれば、死罪をかくすることができる。(それなのに) 千乗の魯をもってして、子糾を生きたがらせることが出来なかった。(だから) 公を病〔惡〕とするのである。

經冬浚洙

傳「洙(水)を浚った」とは、洙(水)を深くしたのである。力が足りなかったことを著わしている。

〔莊公十年〕

經十年春王正月公敗齊師于長勺

傳日をいわないのは、疑戦の場合である。疑戦なのに「敗」と言うのは、勝利が内〔魯〕にあったからである〔or内をひどいとしてである〕。

經二月公侵宋

傳「侵」には(普通) 時をいう。ここで月をいうのはなぜか。(正月に齊を敗って) かえって齊に怨みを深くし、さらに(今度は) 退いて宋を侵し、敵を多くした。これをにくむから、謹んで月をいうのである。

經三月宋人遷宿

傳「遷」〔他動詞〕とは、亡辭〔亡んだという表現〕である。(遷した先

の) 地をいわないのは、宿が二度と(經文に)あらわれないからである。「遷」「自動詞」とは、なおその國家「or 國・家」を失わず、以「ひきい」て(他所へ) 往く場合である。

經夏六月齊師宋師次于郎

傳「次」は、止である。わが國を畏れたのである。

經公敗宋師于乘丘

傳日をいわないのは、疑戰の場合である。疑戰なのに「敗」と言うのは、勝利が内「魯」にあったからである「or 内をひどいとしてである」。

經秋九月荆敗蔡師于莘 以蔡侯獻武歸

傳「荆」とは、楚のことである。なぜ「荆」と言うのか。狄としてである。なぜ狄とするのか。(楚は) 聖人が立っても、いつも最後に服従し、天子が弱いと、いつも最初に叛くから、「荆」と言って、狄とするのである。蔡侯には、なぜ名をいうのか。絶つてである。なぜ絶つのか。獲られたからである。中國には(普通)「敗」「夷狄が敗った」と言わない。(それなのに) ここで「敗」と言っているのはなぜか。中國が敗られなければ、蔡侯はどうして獲られようか。(つまり)「敗」と言うのは、蔡侯が獲られたことのいいわけをしたのである。「以歸」というのは、「執」「獲」よりはましである。

經冬十月齊師滅譚 譚子奔莒

〔莊公十一年〕

經十有一年春王正月

經夏五月戊寅公敗宋師于鄆

傳内「魯」事には、「戰」を言わない。重大な方「敗」をあげるのである。日をいうのは、(魯が)敗ることを立派に成したからである「or (孔子が) 敗ったことを顯彰してである」。(この時) 宋の萬が獲られた。

經秋宋大水

傳外災は(普通) 書かない。ここではなぜ書いたのか。(宋は) 王者の後だからである。高・下のいづれにも水災があるのを「大水」という。

經冬王姬歸于齊

傳記したのは、わが國を通過したからである。

〔莊公十二年〕

經十有二年春王三月紀叔姬歸于鄫

傳國の場合に「歸」と言う。ここは邑である。(それなのに)「歸」と言うのはなぜか。(叔姬は) わが國の(公)女であって、國を失った「嫁ぎ先の紀が減んだ」。(だから) 安住の地を得たことを喜んで、「歸」と言ったのである。

經夏四月

經秋八月甲午宋萬弑其君捷

傳「宋萬」とは、宋の卑者である。卑者には、國をもつて氏をいう。

經及其大夫仇牧

傳《春秋》では、尊を（先に）書いて、卑に及ぶ。仇牧は君の扞禦〔守り手〕だったのである。

經冬十月宋萬出奔陳

〔莊公十三年〕

經十有三年春齊人宋人陳人蔡人邾人會于北杏

傳これは齊侯・宋公である。「人」と言うのはなぜか。《春秋》が（始めて齊を疑つてである。なぜ疑うのか。（齊）桓は（天子から）受命した伯ではないのに、《春秋》は）伯事を齊桓に授けようとするからである。（授けても）かまわないだろうか、まだだめだろうか、ということである。「人」をあげるのは、衆多という表現である。

經夏六月齊人滅遂

傳「遂」は國である。日をいわないのは、微國だからである。

經秋七月

經冬公會齊侯盟于柯

傳これは曹劌〔人名〕の盟である。齊侯を信とするのである。（齊）桓の盟には、内〔魯〕が参加しても、日をいわない。信だからである。

〔莊公十四年〕

經十有四年春齊人陳人曹人伐宋

經夏單伯會伐宋

傳事が完成した後に會したのである。

經秋七月荆入蔡

傳「荆」とは、楚のことである。「荆」というのはなぜか。州〔名〕を擧げたのである。州（をいうの）は國（をいうの）に及ばず、國は名（をいうの）に及ばず、名は字（をいうの）に及ばない。

經冬單伯會齊侯宋公衛侯鄭伯于鄆

傳またいっしょに會したのである。

〔莊公十五年〕

經十有五年春齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯會于鄆

傳またいっしょに會したのである。

經夏夫人姜氏如齊

傳婦人は、嫁げば竟を踰えない。竟を踰えるのは非禮である。

經秋宋人齊人邾人伐鄭

經鄭人侵宋

經冬十月

〔莊公十六年〕

經十有六年春王正月

經夏宋人齊人衛人伐鄭

經秋荊伐鄭

經冬十有二月會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯滑伯滕子同盟于幽

傳「同」とは、いっしょに（なにか）したということである。いっしょに周を尊んだのである。「公」を言わないのは、（《春秋》が）外・内に「魯」の諸侯について、一度づつ、齊を疑うからである「外について、は、莊公十三年で疑った。内「魯」については、ここで疑う」。

經邾子克卒

傳「子」と言うのは、進めてである。

〔莊公十七年〕

經十有七年春齊人執鄭詹

傳「人」とは、衆多という表現である。「人」をもって執えるのは、（執えることを）ゆるすという表現である。「鄭詹」は、鄭の卑者である。卑者は（普通）記さない。ここで記しているのはなぜか。（後で魯に）逃げて来たから、記したのである。逃げて来たなら、なぜ記するのか。後で事のゆく末を書く都合上、あらかじめその事のおこりを記録しておかざるを得ないのである。「鄭詹」は、鄭の佞人である。

經夏齊人殲于遂

傳「殲」とは、盡である。それならば、なぜ「遂の人が齊の人を盡くした」と言わないのか。遂（という國）は（もはや）無いという表現である。遂が無いならば、なぜ「遂」と言うのか。それでもなお、遂を存在させたのである。遂を存在させたのは、どういうわけか。齊の人は遂を滅し、人をおいて守らせたが、遂の因氏が（齊の）守備兵に酒を飲ませて殺し、齊の人が殲きたからである。ここは、敵をあなどり輕んじること（の報い）を言っ（て戒め）たのである。

經秋鄭詹自齊逃來

傳義から逃げるのを、「逃」と言う。

經冬多麋

〔莊公十八年〕

經十有八年春王三月日有食之

團日を言わず、「朔」も言わないのは、夜食の場合である。何によって夜食がわかったのか。王者が（早朝）日〔太陽〕に朝するからである。天子であっても（その上に）必ず尊〔日〕がある。諸侯の身分でも（その上に）必ず長〔天子〕がある。だから、天子は日〔太陽〕に朝し、諸侯は朔〔天子から班けられた朔政〕に朝するのである。

經夏公追戎于濟西

團戎がわが國を伐ったことを言わないのはなぜか。公が追ひ拂ったから、《春秋》は）戎をわが國に近づけさせないのである。「于濟西」というのは、大として「ほめて」である。なぜ大とするのか。公が追ひ拂ったからである。

經秋有蜚

團あつたりなかつたりする場合に「有」と言う。「蜚」は、人を射つものである。

經冬十月

〔莊公十九年〕

經十有九年春王正月

經夏四月

經秋公子結媵陳人之婦于鄆 遂及齊侯宋公盟

團「媵」は淺事であるから、（普通）記さない。ここで記しているのはなぜか。（魯が）要盟〔強要する盟〕を避けたからである。（經文は）何によって魯が要盟を避けたことを示しているのか。「媵」は禮の輕いもの、「盟」は國の重大事であるが、（ここでは）輕事を國の重大事が繼いでいて、他説がない、（ということによる）のである。「陳人之婦」と言うのは、略してである。日を言わないのは、（盟が）すぐに變わってしまったから、にくんでである。

經夫人姜氏如莒

團婦人は、嫁げば竟を踰えない。竟を踰えるのは正しくない。

經冬齊人宋人陳人伐我西鄙

團「鄙」と言うのは、遠いとしてである。遠いとするのはなぜか。（《春秋》は）兵難をわが國に近づけさせないからである。

〔莊公二十年〕

經二十年春王二月夫人姜氏如莒

團婦人は、嫁げば竟を踰えない。竟を踰えるのは正しくない。

經夏齊大災

團記したのは、ひどかったからである。

經秋七月

經冬齊人伐戎

〔莊公二十一年〕

經二十有一年春王正月

經夏五月辛酉鄭伯突卒

經秋七月戊戌夫人姜氏薨

傳婦人には、(薨じた地を) 名指して言わない。

經冬十有二月葬鄭厲公

〔莊公二十二年〕

經二十有二年春王正月肆大眚

傳「肆」は失^シ〔赦免する〕である。「眚」は災^{セイ}〔罪惡(人)〕である。災は治めるべきものである。それを赦免したのには、わけがある。(赦免しなければ) 天子の(許可した) 葬にまぎらわしかったからである。

經癸丑葬我小君文姜

傳小君は君ではない。(それなのに) 「君」と言うのはなぜか。公の配偶であるから、「小君」と言えるのである。

經陳人殺其公子禦寇

傳「公子」と言って、「大夫」と言わないのは、公子(禦寇)が爵命を受けて大夫となっていなかったからである。(大夫でないなら)「公子」

と言うのはなぜか。公子の重さは、(爵命を受けた)大夫に比せられるからである。(大夫は) 爵命を受けると、公子(と同等の禮)を執る「氏を稱する？」ことが出来る。

經夏五月

經秋七月丙申及齊高傒盟于防

傳「公」を言わないのは、高傒が伉した「公と匹敵した」からである。

經冬公如齊納幣

傳「納幣」は、大夫の仕事である。禮には、納采があり、問名があり、納徵「納幣」があり、告期がある。(以上の) 四者が備わった後で娶る「親迎する」のが、禮である。(親迎する以前に) 公が自分で幣を納めるのは、非禮である。だから、譏ったのである。

〔莊公二十三年〕

經二十有三年春公至自齊

經祭叔來聘

傳「使」「王使」or「祭公使」と言わないのはなぜか。(祭叔or祭公は) 天子の内臣であるが、その外交を不正とするから、「使」という表現を與えない「or許さない」のである。

經夏公如齊觀社

傳常事には「視」と言い、非常事には「觀」と言う。「觀」とは、(朝會の)事がなかったという表現である。(《春秋》は)この事件を、女を主「目的」としたものである、とするのである。(禮では)事がなければ、竟を出ない。

經公至自齊

傳公が(國外へ)行ったとき、往きに時をいうのは、正しかった「危懼がなかった」場合である。致「かえり」に月をいうのは、變故があった場合である。往きに月をいい、致に月をいうのは、危懼があった場合である。

經荆人來聘

傳《春秋》では)善行が積みかさなって始めて、夷狄を進める。(それなのに)ここで「人」と言う「進める」のはなぜか。(聘することが出来たから)進め方として、一舉に進めたのである。

經公及齊侯遇于穀

傳「及」とは、魯の方が希望したということである。「遇」とは、お互いに氣が合ったということである。

經蕭叔朝公

傳「蕭叔」は)微國の君で、(天子から)爵命を受けていない者である。「來」と言わないのは、外でしたからである。朝は、廟するのが正しい。外でするのは正しくない。

經秋丹桓宮楹

傳禮では、天子諸侯は黝堊「黑色」、大夫は倉「青色」、士は黹「黄色」である。楹を丹「赤色」塗りにするのは、非禮である。

經冬十有一月曹伯射姑卒

經十有二月甲寅公會齊侯盟于扈

〔莊公二十四年〕

經二十有四年春王三月刻桓宮桷

傳禮では、天子の桷は、けづり(粗く)みがき、(さらに)きめの細かい砥石でみがく。諸侯の桷は、けづり(粗く)みがく。大夫のは、けずる。士のは、本(だけ)をけずる。桷に刻するのは非正である。夫人(を迎えるの)は、宗廟を崇ぶためである。非禮と非正とを宗廟に加え、夫人に見せびらかすのは、非正である。「桓宮の桷に刻した」「桓宮の楹に丹塗りした」「前年」というふうに、「桓宮」を名ざして言っているのは、それによって莊公をにくんだのである。

經葬曹莊公

經夏公如齊逆女

傳親迎は常事であるから、記さない。(それなのに)ここで記しているのはなぜか。(讎國の)齊に親迎したことを不正とするからである。

經秋公至自齊

團迎える者は、進んでいる時も、止まっている時も、(いつも)相手を見守っているべきである。(自分だけ)先にもどるのは正しくない。

經八月丁丑夫人姜氏入

團「入」とは、内「魯」が受け入れないということである。入に日を入れるのは、入をにくんでである。なぜ受け入れないのか。宗廟が受け入れないからである。宗廟が受け入れないのはなぜか。仇人「齊」の子弟を娶って、(先祖の)前に進置したから、義として受け入れられないのである。

經戊寅大夫宗婦覲用幣

團「覲」は見「まみえる」である。禮では、大夫は夫人にまみえない。「及」「大夫及宗婦」と言わないのは、大夫が婦道を行なったことを不正とするから、ならべて数えたのである。男子の贄は、羔・鴈・雉・牾、婦人の贄は、棗・栗・鍛脩である。幣を用いるのは、非禮である。「用」とは、用いるべきでなかったときにいう。大夫は國の體であるのに、婦道を行なった。これをにくむから、謹譏して日を用いるのである。

經大水

經冬戎侵曹 曹羈出奔陳

經赤歸于曹 郭公

團「赤」とは、おそらく、「郭公」のことであろう。なぜ「赤」と名をいうのか。禮では、諸侯に外歸の義はなく、外歸するのは正しいからである。

〔莊公二十五年〕

經二十有五年春陳侯使女叔來聘

團名をいわないのはなぜか。天子に爵命を受けた大夫だからである。

經夏五月癸丑衛侯朔卒

經六月辛未朔日有食之

團日を言い、「朔」を言うのは、食が朔に当たった場合である。

經鼓用牲于社

團鼓をうつのは禮であるが、牲を用いるのは非禮である。天子は日「太陽」を救うのに、五麾を置き、五兵・五鼓をならべる。諸侯は三麾を置き、三鼓・三兵をならべる。大夫は門を撃ち、士は柝を撃つ。陽を充たすということである。

經伯姬歸于杞

團迎えたことを言わないのはなぜか。迎える方法が正しくなかったから、(わざわざ)言うに値しないのである。

經秋大水 鼓用牲于社于門

團高・下のいづれにも水災があるのを「大水」という。既に鼓をうちながらして衆をうごかした「集めた」以上、牲を用いるのはやめるべきであった。日を救うには、鼓・兵をもってし、水を救うには、鼓・衆をもってする。

經冬公子友如陳

〔莊公二十六年〕

經二十有六年春公伐戎

經夏公至自伐戎

經曹殺其大夫

團「大夫」と言って、名姓を稱さないのは、（曹には）爵命を受けた大夫が無いからである。爵命を受けた大夫が無いのに、「大夫」と言うのは、（曹羈が）賢だからである。曹羈のために崇んだのである。

經秋公會宋人齊人伐徐

經冬十有二月癸亥朔日有食之

〔莊公二十七年〕

經二十有七年春公會杞伯姬于洮

經夏六月公會齊侯宋公陳侯鄭伯同盟于幽

團「同」とは、いっしょに（なにか）したということである。いっしょに周を尊んだのである。ここでようやく（《春秋》は）齊侯に諸侯をあづける「方伯として認める」。齊侯に諸侯をあづけるのはなぜか。齊侯が衆（心）を得たからである。（齊）桓の會にはもどったことをいわない。安心できるとしてである。桓の盟には日をいわない。信頼できるとしてである。桓の信を信と認め、桓の仁を仁と認めるのである。衣裳の會「平和の會」は十一回あったが、（そのうちで）血をすすった盟は一回もなかった。信が厚かったからである。兵車の會は四回あったが、（そのうちで）大戦は一回もなかった。民を愛したからである。

經秋公子友如陳葬原仲

團葬を言い、卒を言わないのは、（本來）葬をいうべきものではないからである。葬をいうべきものでないのに、葬を言っているのは、（公子友の）出奔を諱んでである。

經冬杞伯姬來

經莒慶來逆叔姬

團諸侯が子を大夫に嫁がせるときには、（同姓の？）大夫を主人役として、嫁がせる。「來」とは、内「魯公」に接したということである。大夫が内に接したことを不正とするから、夫婦の稱「女」を與えない〔or許さない〕のである。

經杞伯來朝

經公會齊侯于城濮

〔莊公二十八年〕

經二十有八年春王三月甲寅齊人伐衛 衛人及齊人戰 衛人敗績

團伐った時に、ともに戦ったのである。どこで戦ったのか。衛（都）で戦ったのである。戦であれば、師のはずである。（それなのに）「（齊）人」と言うのはなぜか。微にしてである。なぜ微にするのか。齊侯に諸侯をあづけた「方伯として認めた」のに、その後で侵伐の事があった。だから、微にするのである。衛を「人」とするのはなぜか。齊を「人」とするから、衛を「人」としないわけにゆかないのである。衛は小で、齊は大であるのに、衛を先に書いて齊に及ぶのはなぜか。齊を微にするから、（衛を先にして）「及」と言えるのである。（衛が）「人」と稱して敗れるのはなぜか。「師」が「人」に敗れた、とするわけにゆかないからである。

經夏四月丁未邾子貜卒

經秋荊伐鄭

團「荊」とは、楚のことである。「荊」と言うのは、州（名）を擧げたのである。

經公會齊人宋人救鄭

團（この記事は）鄭を救援したことをほめたのである。

經冬築微

團山林藪澤の利は、民と共にするべきものである。これを虞する「管理し獨占する」のは正しくない。

經大無麥禾

團「大」とは、後をふりかえっての表現である。禾が無い時点において、（過去の）麥が無かったことに（言い）及んだのである「cf. 七年」。

經臧孫辰告糴于齊

團國に三年分の畜えが無いのを「國がその國のものでない」と言う。（ここは）一年みのらなかっただけで、糴を諸侯に告したのである「一年分の畜えも無かった」。「告」は請である。「糴」は糴「かいよね」である。正しくないから、臧孫辰の私行であるかのように表現したのである。國に九年分の畜えが無いのを「不足」と言い、六年分の畜えが無いのを「急」と言い、三年分の畜えが無いのを「國がその國のものでない」と言う。諸侯に粟が無いとき、諸侯が互いに粟をおくり合うのは正しい「告するのは正しくない」。（ここは）臧孫辰が糴を齊に告し、告した後で（齊が）與えたのだから、内「魯君」に外交が無かった「私行であった」ということを言っているのである「魯君が告糴という不正行爲を命ずるはずはない」。昔は、十分の一税であり、豊

年（の餘分）で凶年（の不足分）を補い、外に求めずに上下みな足りた。凶年がつづいても、民は疲弊しなかった。（ところがここでは）一年收穫がなかっただけで、百姓が餓えた。（だから）君子はこれをそののである。「如」と言わないのは、内〔魯〕のために諱んである。

附「糴 糴也」について。補注では「『糴』〔かいよね〕も『糴』〔うりよね〕も、昔は『糴』に作っていた。つまり經文では『糴』となり、傳をつくった時には『糴』『糴』がすでに行なわれていたから、經の『糴』は『糴』のことであると説明したのである」と解している。また、柯劭忞は「昔は『糴』の一字で、かいよねとうりよねとを兼ねていた。後になって『糴』の字がつくられて、二字で分担して意味をになうことになった。そこで、經文の『糴』は、今の『糴』の方であると、傳文が説明したのである」と解している。

〔莊公二十九年〕

經二十有九年春新延廩

團「延廩」は、法廩である。「新」と言うのは、故〔古いもの〕があったということである。故があったのなら、なぜ書いたのか。昔の人君は、必ず時々民が憂えているものを視察し、民が勞働力（の不足）を憂えていれば、土木工事をまれにし、民が財（の不足）を憂えていれば、貢賦を少なくし、民が食（の不足）を憂えていれば、百事〔儀禮〕を廢したものである。（それなのに莊公は）冬に微に「orを」築き、

春に延廩を新たにした。（《春秋》は）莊公の民力の用い方を、全く用い盡くすひどいものだと考えるのである。（だから譏って書いたのである。）

附「勤」は、僉慥に従って、憂の意とする。

經夏鄭人侵許

經秋有蜚

團あつたりなかつたりする場合に、「有」と言う。

經冬十有二月紀叔姬卒

經城諸及防

團（この場合は）城いてもよろしい〔or農役を妨げずに城くことが出来る〕。大〔諸〕を先に書いて、小〔防〕に及ぶのである。

〔莊公三十年〕

經三十年春王正月

經夏師次于成

團「次」は、止である。（齊を）畏れたからである。鄆を救おうとして出来なかつたのである。「公」と言わないのは、鄆を救うことが出来なかつたのを恥じてである。

經秋七月齊人降鄆

傳「降^か」は、下と同じである。「鄆」は、紀の遺邑である。

經八月癸亥葬紀叔姬

傳卒に日をいわず、葬に日をいうのは、紀が亡んだことを閲んでである。

經九月庚午朔日有食之 鼓用牲于社

經冬公及齊侯遇于魯濟

傳「及」とは、魯の方が希望したということである。「遇」とは、お互いに氣が合ったということである。

經齊人伐山戎

傳「齊人」とは、齊侯のことである。「人」と言うのはなぜか。齊侯（という稱）を、山戎に對して惜しむからである。惜しむのはなぜか。（齊）桓は、内には因國「てづるとする國」がなく、外には隨從する諸侯がなく、（單獨で）千里の險を越え、北して山戎を伐ったため、危ぶむからである。（危ぶむ）とすれば、そしめるのか。（いや）ほめるのである。なぜほめるのか。燕は周の分子であるが、（燕から周への）貢職がとどかなかった。山戎が燕を伐ったからである。（その山戎を伐ったのであるから、ほめるのである。）

〔莊公三十一年〕

經三十有一年春築臺于郎

經夏四月薛伯卒

經築臺于薛

經六月齊侯來獻戎捷

傳「齊侯が來て、捷を獻じた」とは、齊侯を内にした表現である。「使」を言わないのは、内「魯」と同一國とみなして、「使」を言わないのである。「戎の捷を獻じた」とは、戦利品を「捷」と言う。戎菽「戎で産する豆」であった。

經秋築臺于秦

傳民を三時「春・夏・秋」にわたって疲勞させ、山林藪澤の利を管理し獨占した、ことを不正とする。かつ、（民は）財が盡されば怨み、力が盡されば怒り恨むものである。君子はこれを危ぶむから、謹んで記したのである。一説に、（魯莊が）齊桓と異なるとしてである「or齊桓と比較してである」。（齊）桓は、外には諸侯の變「侵伐の變」がなく、内には國事「災喪の事」がないという状態で、千里の險を越え、北して山戎を伐ち、燕のために地「道」を開いた。（一方）魯は、外には諸侯の變がなく、内には國事がないという状態で、一年に民を三時にわたって疲勞させ、山林藪澤の利を管理し獨占した。（だから）魯をにくんで記したのである。

經冬不雨

〔莊公三十二年〕

經三十有二年春城小穀

經夏宋公齊侯遇于梁丘

團「遇」とは、お互いに気が合ったということである。「梁丘」は曹・邾の間にあり、齊から八百里であった。(途中) 諸侯を従えて往けないわけではなかったが、(それらの) 遇うことを希望する者〔or 氣が合う者〕をことわり、遇うことを希望していない者〔or 氣が合わない者〕に遇った。(だから) 齊桓を大とする〔尊ぶ〕のである。

經秋七月癸巳公子牙卒

經八月癸亥公薨于路寢

團「路寢」は、正寢である。病氣になったときは、正寢に居るのが、正である。(つまり) 男子は、婦人の手で絶えず、齊〔清絜〕をもって終わるのである。

經冬十月乙未子般卒

團子の卒に日をいうのは、正常だった場合である。日をいわないのは、變故があった場合である。(變故があったことを) あらわしている經文が(他に) あれば、(變故があっても) 日をいう。

經公子慶父如齊

團これは奔である。「如」と言うのはなぜか。(深く諱んでである。) 諱むのは、深いにしたことはない。深ければ(事實は) 隠れる。(事實を) あらわしている經文が(他に) あれば、(諱むのは) 深いにしたことはないのである。

經狄伐邢

〔閔公元年〕

經元年春王正月

團弑された君を繼いだ時に即位を言わないのは、正當な場合である。(子般は閔公にとって) 親としては父ではなく、尊としては君ではない。(それなのに) 君父を繼いだかのようにするのは、國を受けるからである。

經齊人救邢

團邢を救援したことをほめたのである。

經夏六月辛酉葬我君莊公

團莊公に、葬った後で諡をあげるのは、諡は徳を成す〔表わす〕ためのものであり、事をおえるときに加えるものだからである。

經秋八月公及齊侯盟于洛姑

團季子を納めることを盟ったのである。

經季子來歸

傳「季子」と言うのは、貴んでである。「來歸」と言うのは、喜んでである。

經冬齊仲孫來

傳「齊仲孫」と言うのは、外にしてである。目さず「公子」と言わずに、「仲孫」と言うのは、疏んじてである。「齊」と言うのは、これによって、(齊)桓を同罪とするのである。

〔閔公二年〕

經二年春王正月齊人遷陽

經夏五月乙酉吉禘于莊公

傳「吉禘した」とは、吉禘してはいけなかった場合にいう。喪事がまだおわっていないのに吉祭を舉行したから、そしつたのである。

經秋八月辛丑公薨

傳地をいわないのは、變故があつた「弑された」からである。葬を書かないのは、母を討つことによって子の葬を書くわけにはゆかないからである。

經九月夫人姜氏孫于邾

傳「孫」というのは、(子孫の)孫と同じである。奔を諱んだのである。

經公子慶父出奔莒

傳「出」と言うのは、絶つてである。慶父は(經文に)二度と現われない。

經冬齊高子來盟

傳「來」と言うのは、喜んでである。「高子」と言うのは、貴んでである。僖公を立てることを盟つたのである。「使」と言わないのはなぜか。(「高子」は貴稱であるため)齊侯が高子を使つたとするわけにゆかないからである。

經十有二月狄入衛

經鄭棄其師

傳(この事件は、鄭伯が)その長をにくんだことによる。(鄭伯は)兼ねて、その士衆もかえさなかったから、「その師を棄てた」ということになる。

〔僖公元年〕

經元年春王正月

傳弑された君を繼いだ時に即位を言わないのは、正當な場合である。

經齊師宋師曹師次于聶北救邢

傳救援したときは、「次」と言わない。ここで「次」と言っているのは、(實は)救援したのではなかったからである。救援したのではなかつ

たのに「救」と言うのはなぜか。齊侯の本意を（經文上で）遂げたのである。（「齊師」とは）齊侯なのか。齊侯である。（經文は）何によって齊侯であることをあらわしているのか。曹には師がないから、「曹師」とは曹伯のことである。（この曹伯の上におくことによって、あらわしているのである。）「曹伯」と言わないのはなぜか。「齊侯」と言わないから、「曹伯」と言うわけにゆかないのである。「齊侯」と言わないのはなぜか。稱揚するのに不十分だから、「齊侯」と言わないのである。

經夏六月邢遷于夷儀

傳「遷」（自動詞）とは、なおその國家「or 國・家」をたもち、以「ひきい」て（他所へ）往く場合である。（遷った先の）地をいうのは、邢がまた（經文に）現われるからである。

經齊師宋師曹師城邢

傳さきの（聶北の）師である。事を改めた「一連の事ではない」かのように表現したのは、齊侯の功績を美として「ほめて」である。

經秋七月戊辰夫人姜氏薨于夷

傳夫人の薨には（普通）地をいわない。ここで地をいっているのは、變故があった「殺された」からである。

經齊人以歸

傳「喪」「なきがら」を以て歸った」と言わないのは、（實は）喪「なきが

ら」を以て歸ったわけではないからである。喪「薨」を「歸」の上に）加えたのは、夫人をつれて歸ったことを諱んでである。（實は）つれて歸り、薨じた「殺した」のである。

經楚人伐鄭

經八月公會齊侯宋公鄭伯曹伯邾人于櫟

經九月公敗邾師于偃

傳日をいわないのは、疑戦の場合である。疑戦なのに「敗」と言うのは、勝利が内「魯」にあったからである「or 内をひどいとしてである」。

經冬十月壬午公子友帥師敗莒師于麗 獲莒挐

傳莒には大夫が無い。（それなのに）ここで「莒挐」と言うのはなぜか。わが國が獲たから、目したのである。内「魯」には「獲」と言わない。（それなのに）ここで「獲」と言っているのはなぜか。公子が欺いたことをにくんでである。欺いたとはどういうことか。公子友が莒挐に言った「我々二人がうまくゆかないのだ。士卒どもに何の罪がある」と。左右の者をしりぞけて、素手で闘った。公子友が下になった。左右の者が言った「孟勞を」と。孟勞とは魯の寶刀である。公子友はその刀で莒挐を殺した。それならば、なぜ欺いたことをにくむのか。師を棄てる道だからである。

傳どういう意味で師を棄てることになるのか、よくわからない。

經十有二月丁巳夫人氏之喪至自齊

團「姜」と言わないのは、彼女が二子を殺したため貶してである。一説に、齊桓のために同姓を殺したことを諱んでである。

〔僖公二年〕

經二年春王正月城楚丘

團「楚丘」とは何か。衛の邑である。國の場合に「城」と言う。ここは邑である。(それなのに)「城」と言うのはなぜか。衛を(ここに)封じたからである。それならば、「衛に城いた」と言わないのはなぜか。衛がまだ(ここに)遷っていないからである。(後で)衛が遷ったことを言わないのはなぜか。齊侯の專封をゆるさないからである。

(主語を出さずにただ)「城いた」と言うのは、專辭である。天子でなければ、諸侯を專封することは出来ない。諸侯が諸侯を專封するのは、その仁を通じさせるけれども、義によってゆるさない。(つまり)仁は道〔義〕にまさらないのである。

附「專辭」は、定公五年の注に従って、「魯が單獨で行なったという表現」の意と解する。

經夏五月辛巳葬我小君哀姜

經虞師晉師滅夏陽

團國ではないのに「滅」と言うのは、夏陽を重んじてである。虞には師が無いのに、「師」と言うのはなぜか。晉(師)の先〔上〕に置かれ

ているから、「師」と言わないわけにゆかないのである。晉の先に置かれているのはなぜか。夏陽を滅すのに主となったからである。夏陽は、虞・虢の塞邑であり、夏陽が滅されると、虞・虢はとられてしまった。(それほど重要な邑なのである。)虞が夏陽を滅すのに主となったのはなぜか。晉の獻公が虢を伐とうとした。荀息が言った「君はどうして、屈で産する馬と垂棘の璧をつかって、虞に道を借りないのですか」と。公が言った「これらのものは、晉國の寶である。もし、こちらの幣〔おくりもの〕を受けとって、道を貸してくれなかったら、どうしよう」と。荀息が言った「これらのものは、小國が大國に事えるしるしでありますから、あちらが道を貸さないつもりなら、必ずやこちらの幣を受けとらないでしょう。もし、こちらの幣を受けて、道を貸してくれば、それは、こちらが璧を中府から取り出して(一時)外府に藏し、馬を中廡から取り出して、外廡に置くようなものです」と。公が言った「宮之奇がいる。彼はきっと受け取らせないだろう」と。荀息が言った「宮之奇の人となりは、明達にして懦弱であります。また、小さいころから君のそばで育ちました。明達であれば、その言葉は簡略であります。懦弱であれば、強いて諫めることは出来ません。小さいころから君のそばで育てば、君は(狎れすぎていて)軽んじます。それに、玩好〔すきなもの〕が耳目の前にあって、憂患が一國の後にひそんでいるということは、中知以上の者であって始めて、考え及ぶことであります。臣〔私〕が虞の君を料りますに、中知以下であります」と。公はかくて、道を借りて虢を伐つことにした。宮之奇が

諫めて言った「晉の國の使者は、挨拶が丁寧で、幣もりっぱなものです。必ずや、虞にとって不都合なことになりましょう」と。虞公はきき入れず、そのままその幣を受けて、晉に道を貸してしまった。宮之奇が言った「ことわざに『唇が亡くなれば、齒は寒い』というのは、このことであろう」と。その妻子をつれて曹に奔った。獻公は虢を亡ぼし、四年後には虞をとった「僖公五年」。(その時)荀息は、馬をひき璧をもって、すすみ出て言った「璧はもとのままですが、馬は年をとってしまいました」と。

經秋九月齊侯宋公江人黃人盟于貫

團貫の盟で、約束してなかったのにやって來た者は、江人・黃人である。「江人、黃人」とは、遠國の辭である。中國では齊・宋を稱し、遠國では江・黃を稱するのは、諸侯がみなやって來たとする表現である。

經冬十月不雨

團「雨がふらなかった」とは、(僖公が)雨を憂えたということである。

經楚人侵鄭

〔僖公三年〕

經三年春王正月不雨

團「雨がふらなかった」とは、(僖公が)雨を憂えたということである。

經夏四月不雨

團一つの季節ごとに(その最初の月に)「雨がふらなかった」と言うのは、(僖公が)雨を閔「うれ」えたということである。雨を閔えたとすることは、民のことを考えていたということである。

經徐人取舒

經六月雨

團「雨がふった」と言うのは、(僖公が)雨を喜んだということである。雨を喜んだということは、民のことを考えていたということである。

經秋齊侯宋公江人黃人會于陽穀

團陽穀の會では、桓公は委「冠」・端「服」を身につけ、笏を搢「さしはさ」んで、諸侯を朝見させた。諸侯はいづれもみな、桓公の志を理解した。

經冬公子季友如齊莅盟

團「莅」は、位「臨む」である。日をいわないのは、前定の盟だからである。「及」と言わない「相手を言わない」のは、(相手が)國をもつて「舉げて」参加した場合である。その人「主語」を言わないのも、(その個人ではなくて)國をもつて参加した場合である。

經楚人伐鄭

〔僖公四年〕

經四年春王正月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯侵蔡 蔡潰

團「潰」とは、上・下が仲がよくなかったということである。「侵」は浅事である。蔡を侵しただけで、蔡は潰れた。桓公は侵す相手を知っていた、とするのである。(この時、桓公は)その地を自分の領土とせず、その民を自分のものとせず、正であることを明らかにした。

經 遂伐楚次于陘

團「遂」は、事を繼ぐということである。「次」は、止である。

經 夏許男新臣卒

團 諸侯が國(都)で死んだ場合には、地をいわない。(國都の)外で死んだ場合には、地をいう。(ここでは)師「つまり外」で死んだのに、どうして地をいわないのか。(齊)桓の師を内としてである。

經 楚屈完來盟于師 盟于召陵

團 楚には大夫が無い。(それなのに)ここで「屈完」と言うのはなぜか。來て(齊)桓と會したから、彼を大夫と成したのである。「使」と言わないのは、權が屈完にあったからである。それならば、(屈完は)正しいのか。正しくない。(しかし)來て諸侯と會したから、(特に)重んじるのである。「來」とは何か。桓の師を内としたのである。

「師で(盟った)」というのは、前定の盟だったからである。「召陵で(盟った)」というのは、(表現上)桓公が志を得たとしてである。志を得たとは、(實際には)志を得なかったのである。桓公が志を得たのは、ほんのわずかだった、とするのである。屈完が言った「大國が兵をひきいて楚に向かわれるのはなぜですか」と。桓公が言った「昭

王が南征したまま、もどられなかった。(また)菁茅の貢物がとどかないので、周室では、祭に供せないでいる」と。屈完が言った「菁茅の貢物がとどかない件につきましては、承知いたしました。昭王が南征したままもどられなかった件につきましては、私が江にきいてみることに致しましょう」と。

經 齊人執陳袁濤塗

團「齊人」とは、齊侯のことである。人とするのはなぜか。ここで咻然として「離れて」齊侯を外にするからである。國(境)を踰えて執えたことを不正とするのである。

經 秋及江人黃人伐陳

團 主語を言わないのはなぜか。内「魯」の師だからである。

經 八月公至自伐楚

團 二事があつて、大小の差がなければ「or二事に大小の差がなければ」、後事からもどつたとする。後事が小であれば、先事からもどつたとする。ここで、楚の討伐「先事」からもどつたとするのは、楚を伐つたことを大としてである。

經 葬許穆公

經 冬十有二月公孫茲帥師會齊人宋人衛人鄭人許人曹人侵陳

〔僖公五年〕

經五年春晉侯殺其世子申生

傳「晉侯」と名ざして、殺したことを言うのは、晉侯をにくんでである。

經杞伯姬來朝其子

傳婦人は、嫁げば竟を踰えない。竟を踰えるのは、正しくない。伯姬はその子を朝させようと志したのである。伯姬がその子を朝させようと志したのであれば、杞伯は夫としての道を失ったことになる。諸侯が相まみえるのを「朝」という。人の父を待遇する道を用いて、人の子を待遇するのは、正しくない〔魯も正を失った〕。つまり「杞の伯姬が来て、その子を朝せしめた」というのは、三者を譏ったのである。

經夏公孫茲如牟

經公及齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯會王世子于首戴

傳「及」と言い、後で（別に）「會」と言うのは、王の世子を尊んでである。なぜ尊ぶのか。王の世子というものは、王の貳〔副〕である。（だから）これを重んじて存すべしということ、尊ぶのである。なぜ重んじるのか。天子の世子は天下を世々にする〔代々うけつぐ〕からである。

經秋八月諸侯盟于首戴

傳中間に他の事件がないのに、再び諸侯をあげるのはなぜか。王の世子を尊んで、いっしょに盟わなかったからである。尊んだのなら、いっしょに盟わなかったのはなぜか。盟うとは、信じ合わないことである。だから、信を謹んだのである。不信のしるしを尊者に加えなかったのである。桓公は諸侯であるのに、天子に朝することが出来なかった。

これは不臣である〔臣としての道に反する〕。王の世子は子であるのに、塊然〔王引之によれば獨尊の貌〕として、諸侯が自分を尊ぶのを受け、その位に立った。これは不子である〔子としての道に反する〕。桓公が不臣であり、王の世子が不子であるならば、ほめるのはなぜか。これは變の正だからである。（當時）天子は微弱で、諸侯は享觀しなかった。桓公は、大國を引きよせ〔orおさえ〕、小國を扶け、諸侯を統べた。（諸侯を）ひきいて天子に朝することは出来なかったが、天王をよび出すようなことはせず、王の世子を首戴で尊んだのであり、これは天王の命を尊ぶため（の手立て）である。世子が王の命を含んで齊桓と會したのも、また天王の命を尊ぶため（の手立て）である。世子は受けてよかったのか。これもまた變の正である。（當時）天子は微弱で、諸侯は享觀しなかった。世子が、諸侯が自分を尊ぶのを受ければ、天王が尊ばれることになるから、世子は受けてもよいのである。

經鄭伯逃歸不盟

傳諸侯から去ったため、「逃」というのである。

經楚人滅弦 弦子奔黃

傳「弦」は、國である。日をいわないのは、微國だからである。

經九月戊申朔日有食之

經冬晉人執虞公

傳執えて、その地をいわないのは、(虞がすでに) 晉に包みこまれていたからである。「公」と言うのはなぜか。下が執えたというような表現である。下が執えたような表現にするのはなぜか。晉の命が虞の民に行なわれたからである。虞・虢が互いに救い合うということは、(單に) 互いのために賜「おくりもの」をし合うことではない。(眞の意味で助け合わなければならない。それをしなかったから、晉が) 今日、虢を亡ぼし「二年」、明日、虞を亡ぼしてしまった「ここ五年」のである。

傳「虞虢之相救」以下は、僖公二年の公羊傳文中の宮之奇の言と、ほぼ同じである。

〔僖公六年〕

經六年春王正月

經夏公會齊侯宋公陳侯衛侯曹伯伐鄭圍新城

傳國を伐った場合には、邑を圍んだことは言わない。ここで「圍」と言っているのはなぜか。鄭を病ましめて「にくんで」である。鄭伯の罪を著わしたのである。

經秋楚人圍許 諸侯遂救許

傳許を救援したことをほめたのである。

經冬公至自伐鄭

傳許の救援からもどったとしないのはなぜか。鄭を伐ったことを大としてである。

〔僖公七年〕

經七年春齊人伐鄭

經夏小邾子來朝

經鄭殺其大夫申侯

傳國を稱して大夫を殺すのは、無罪を殺した場合である。

經秋七月公會齊侯宋公陳世子款鄭世子華盟于寧母

傳衣裳の會「平和の會」である。

經曹伯班卒

經公子友如齊

經冬葬曹昭公

〔僖公八年〕

經八年春王正月公會王人齊侯宋公衛侯許男曹伯陳世子款盟于洮

團王人が諸侯の先になるのはなぜか。王命を貴んでである。朝服は、やぶれていても必ず上につける。弁冕は、古くなっても必ず頭につける。周室は、衰えていても必ず諸侯の先になるのである。(一)兵車の會である。

經鄭伯乞盟

團さき「五年」に逃げ歸ったから、「乞」というのである。「乞」は重辭「その対象を重んじる表現」である。この盟を重んじたのである。「乞」とは、自國にいて(使を出し)参加を請うたのである。おそらく、血をくみとったのであろう。

經夏狄伐晉

經秋七月禘于大廟 用致夫人

團「用」とは、用いるべきでなかったときにいう。「致」とは、致す「納れる」べきでなかったときにいう。夫人のことを言う場合には、必ずその氏姓をもつてする。(ここで)夫人のことを言うのに、氏姓をもつてしないのは、(實は)夫人ではないからである。妾を立てたという表現であって、正しくないのである。(僖公が)彼女を夫人としたのであるから、夫人とみとめざるを得ない。夫人には卒葬を記するのが常法であるから、卒葬を記さざるを得ない。(ただし)一つは、宗廟

をもつてこれに臨んで、貶する「この場合」。一つは、外が夫人としなかったという(假託)表現によって、正(道)を示す「文公九年」。

經冬十有二月丁未天王崩

〔僖公九年〕

經九年春王三月丁丑宋公禦說卒

經夏公會宰周公齊侯宋子衛侯鄭伯許男曹伯于葵丘

團天子の宰「官名」は、四海に通じる。宋が「子」と稱するのはなぜか。まだ葬っていないという表現である。禮では、柩が堂上にあるうちは、孤は外事に赴いてはならない。(それなのに)今ここでは、殯に背いて、出て會した。(だから)宋子には哀痛の心がないとするのである。

經秋七月乙酉伯姬卒

團内「魯」の(公)女である。人に嫁いでいなければ、卒をいわない。ここではなぜ、卒をいっているのか。(許嫁「いいなづけ」していたからである。)許嫁すれば、笄「こうがい」をさして字をいい、死ぬと、成人の喪禮をもつて取り計らう。

經九月戊辰諸侯盟于葵丘

團(齊)桓の盟には日をいわない。ここでは、なぜ日をいっているのか。美として「ほめて」である。天子の禁を示したから、日を備えたのである。葵丘の會では、牲をならべて殺さず、(誓約)書を読みあげて、

これを牲の上に置き、ひとえに天子の禁を明らかにしたのである。
「泉をふさいではいけない。糴を止めてはいけない。嫡子を易えてはいけない。妾を妻にしてはいけない。婦人を國事に参加させてはいけない」と。

經甲子晉侯詭諸卒

經冬晉里克殺其君之子奚齊

團「其君之子」と言うのは、國人が子〔正當な後繼者〕としない、という表現である。國人が子としないという表現にしたのはなぜか。獻公が世子申生を殺して、奚齊を立てた、ことを不正としてである。

〔僖公十年〕

經十年春王正月公如齊

經狄滅溫 溫子奔衛

經晉里克弑其君卓及其大夫荀息

團（《春秋》は）尊を（先に）書いて、卑に及ぶ。荀息は君の守り手だったのである。

經夏齊侯許男伐北戎

經晉殺其大夫里克

團國を稱して殺すのは、罪を上にも累及させる〔君の罪とする〕表現である。里克は二君と一大夫を弑した。（それなのに）上に累及させる表現で言うのはなぜか。殺すのに、しかるべき罪〔弑君の罪〕を理由にできなかったからである。殺すのに、しかるべき罪を理由にできなかったとは、どういうことか。里克が（二君を）殺したのは、重耳のためであった。夷吾が言った「私まで殺すのではあるまいか」と。（そこで、害を恐れて、里克を殺した。）だから、殺すのに、しかるべき罪を理由にしなかった、ということになるのである。重耳のために弑したとは、どういうことか。晉の獻公は虢を伐ち、麗姫を手にいれた。獻公は彼女を寵愛し、二子ができた。上の方を奚齊といい、下の方を卓子といった。麗姫は亂をなそう〔自分の子を立てよう〕とした。そこで、君に言った「私は夜、夢をみました。夢の中で、夫人〔申生の母〕が走って来て『私は畏しさに苦しんでいます』と言いました。大夫に、衛士をひきいて冢をまもらせなさいませ」と。公が言った「だれがよろうか」と。麗姫が言った「臣の中では、世子より尊い者はおりませんから、世子がよろしいでしょう」と。それで、君が世子（申生）に言った「麗姫の夢の中で、夫人が走って来て、『私は畏しさに苦しんでいます』と言ったそうだ。そなたが衛士をひきいて往き、冢をまもってくれ」と。世子が言った「かしこまりました」と。（そこで）宮を築き、宮が完成した。（すると）麗姫がまた言った「私は夜、夢をみました。夢の中で、夫人が走って来て『私は飢えに苦しんでいます』と言いました。世子の宮が完成したのですから、（世子に）祠らせな

さいませ」と。それで、獻公が世子に言った「祠りをせよ」と。世子が祠りをし、祠りがおわって、福「祠りに供えた餘りの酒肉」を君のもとにとどけた。君は狩に出て不在であった。麗姫は酖「毒鳥の羽」を酒にひたし、脯「乾肉」に毒藥をつけた。獻公が狩からもどると、麗姫が言った「世子は祠りをとおえたので、福を君にとどけてまいりました」と。君がそれを口にしようとする、麗姫が跪いて言った「外から来た飲食物は、調べてみなければなりません」と。酒を地面にこぼすと、地面が沸き起った。脯を犬に與えようと、犬は死んでしまった。麗姫は堂からおりて、なきさけんで言った「天よ、天よ「なんとひどいことでしょう」。國は、あなた「世子」の國ですのに、あなたはなぜ、君となるのを待ちきれないのでしょうか」と。君は歎いて言った「わしとそなたの間には、いまだかつて、さししまった過ちがあったためしはないぞ。（それなのに）わしを讎とすることの、何と深いことよ」と。人をやって世子にいわせた「そなたは、自分で始末をつけよ」と。世子の傳の里克が世子に言った「參内して釋明なされて下さい。參内して釋明なされば、生きながらえることが出来ますが、參内して釋明なされなければ、生きながらえることは出来ません」と。世子が言った「わが君はすでに年をとられ、昏くなられた。私がそのようにして、參内して釋明すれば、麗姫が死ななければならなくなります。麗姫が死ねば、わが君は心安らかでなくなります。わが君を安らかでなくするくらいなら、私が死んだ方がましです。私はむしろ、自決して、わが君を安らかにしましょう。重耳をたのみます」と。

（そこで）脰「くび」をはねて死んだ。だから、里克が（二君を）弑したのは、重耳のためだったのである。夷吾が言った「私まで殺すのではあるまいか」と。

經秋七月

經冬大雨雪

〔僖公十一年〕

經十有一年春晉殺其大夫丕鄭父
團國を稱して殺すのは、罪を上累及させる「君の罪とする」表現である。

經夏公及夫人姜氏會齊侯于陽穀

經秋八月大雩

團雩に月をいうのは、正しい場合である。雩して雨を得たときには「雩」と言い、雨を得なかったときには「旱」と言う。

經冬楚人伐黃

〔僖公十二年〕

經十有二年春王正月庚午日有食之

經夏楚人滅黃

團貫の盟「二年」に際して、管仲が言った「江・黄は、齊には遠く、楚に近い國です。楚は利のためにうごく國です。（したがって、楚は必ず江・黄を伐ちましょう。）もし伐ったときに、（盟を結んでいながら）救うことが出来なければ、諸侯の長としての資格がなくなります。（どうか、江・黄と盟って救援の義務を負われませんように。）」と。桓公は聴きいれず、そのまま江・黄と盟ってしまった。管仲が死ぬと、（果して）楚は江を伐ち、黄を滅し、桓公は救うことが出来なかった。だから、君子は黄を閔んだのである。

經秋七月

經冬十有二月丁丑陳侯杵臼卒

〔僖公十三年〕

經十有三年春秋侵衛

經夏四月葬陳宣公

經公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯于鹹

傳兵車の會である。

經秋九月大雩

經冬公子友如齊

〔僖公十四年〕

經十有四年春諸侯城緣陵

團（ただ）「諸侯」と言うのは、散辭「ばらばらという表現」である。聚ったのに「散」と言うのはなぜか。諸侯が城くのに散辭をつかったのは、桓公の徳が衰えたからである。

經夏六月季姬及繒子遇于防 使繒子來朝

團「遇」とは、共謀したのである。「來朝」とは、來て、季姬を（妻として）請うたのである。朝には（普通）「使」と言わない。（ここで）「使」と言うのは、正しくなかったからである。これによって、繒子を病ましめる「にくむ」のである。

經秋八月辛卯沙鹿崩

團林が山につらなる部分を「鹿」という。「沙」は、山の名である。崩れる理由がないのに崩れたから、記したのである。日をいうのは、その異變を重大視してである。

經狄侵鄭

經冬蔡侯肸卒

團諸侯の卒に時をいうのは、にくむ場合である。

〔僖公十五年〕

經十有五年春王正月公如齊

經楚人伐徐

經三月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯盟于牡丘

團兵車の會である。

經遂次于匡

團「遂」は、事を繼ぐということである。「次」は、止である。(楚を) 畏れたからである。

經公孫敖帥師及諸侯之大夫救徐

團徐を救援したことをほめたのである。

經夏五月日有食之

經秋七月齊師曹師伐厲

經八月蝻

團「蝻」は、蟲災である。ひどい場合には月をいい、ひどくない場合には時をいう。

經九月公至自會

經季姬歸于緡

經己卯晦震夷伯之廟

團「晦」は、冥である〔晦日には月が出ないから冥い〕。「震」は、雷である。「夷伯」は、魯の大夫である。これに因んで、天子から士に至るまで、みな廟がある、ことをあらわしたのである。天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三廟、士は二廟である。つまり、徳の厚い者は流澤が遠く後世にまで及び、徳の薄い者は流澤が近くにだけ及ぶ、ということである。だから、始めて封ぜられた者を貴ぶ。徳の本だからである。始めて封ぜられた者は、必ず祖とする。

經冬宋人伐曹

經楚人敗徐于婁林

團夷狄が夷狄を敗った場合は、記録する。

經十有一月壬戌晉侯及秦伯戰于韓 獲晉侯

團韓の戰で、晉侯は民を失ったといえる。民が敗れていない〔晉師敗績〕と言わない〕のに君が獲られたからである。

〔僖公十六年〕

經十有六年春王正月戊申朔隕石于宋五

團「隕」を先にして「石」を後にするのはなぜか。隕ちた後で、石であることがわかったからである。「于宋」とは、四竟の内を「宋」と言

う。(石の) 數を後にするのは、散辭「ばらばらに、宋の各地に隕ちた、という表現」である。(この事件は、まず) 耳で聞いたのである。

經是月六鵬退飛過宋都

傳「是月」とは、日をいわずに月をいう、ということをはっきりさせたのである。「六鵬退飛過宋都」とあって、(鵬の) 數を先にするのは、聚辭「まとまって、宋都を通過した、という表現」である。(この事件は、まず) 目で見たのである。孔子が言っている「石は知のない物である。鵬はわずかに知のある物である」と。石は知がないから日をいい、鵬はわずかに知がある物だから月をいうのである。君子は物に對して、かりそめにするのではない。石や鵬に對してすら、表現を嚴密にするのであるから、ましてや、人に對してはなおさらである。だから、五石や六鵬に對する表現がきちんとなされなければ、王道は昂揚しないのである。民の聚まる所を「都」と言う。

經三月壬申公子季友卒

傳大夫の卒に日をいうのは、正しかった場合である。「公弟叔仲」「公弟伯□」「公弟仲□」「公弟叔□」「公弟季□」と稱するのは、賢とする場合である。大夫に「公子」「公孫」と言わないのは、疏んじめる場合である。

經夏四月丙申緡季姬卒

經秋七月甲子公孫茲卒

傳大夫の卒に日をいうのは、正しかった場合である。

經冬十有二月公會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男邢侯曹伯于淮

傳兵車の會である。

〔僖公十七年〕

經十有七年春齊人徐人伐英氏

經夏滅項

傳誰が滅したのか。桓公である。なぜ桓公を言わないのか。賢者のために諱んである。「項」は、國である。滅してはいけないのに滅したのか。(そうである。) 桓公は、(ただ) 項が滅しやすいということを知っていて、自分が滅してはいけないということは知らなかった「忘れてしまった」のである。人の國を滅したのに、なぜ賢とするのか。君子は、惡をにくむのに、その始め(だけ)をにくみ、善をほめるのに、その終り(まで)を楽しむ、からである。桓公にはかつて、亡國を存續させ、絶世を繼續させる、という功績があった。だから、君子は彼のために諱むのである。

經秋夫人姜氏會齊侯于卞

經九月公至自會

經冬十有二月乙亥齊侯小白卒

團小白は不正である〔「正當な君でない」〕のに、日をいうのはなぜか。不正であることが、前に示されているからである。不正であることが前に示されているというのはなぜか。(莊公九年に) 虛國に入ったことを不正として、嫌稱〔「齊小白」という、國君にまぎらわしい表現〕をつかっているからである。

〔僖公十八年〕

經十有八年春王正月宋公曹伯衛人邾人伐齊
團喪を伐ったことをそしつたのである。

經夏師救齊

團齊を救援したことをほめたのである。

經五月戊寅宋師及齊師戰于甌 齊師敗績

團「戰」には、「伐」を言わない。客には、「及」と言わない〔伐った方は、上に書かない〕。(正月に「伐」を言い、ここで、客に)「及」と言う〔伐った方の宋を上を書く〕のは、宋をにくんでである。

經狄救齊

團齊を救援したことをほめたのである。

經秋八月丁亥葬齊桓公

經冬邢人狄人伐衛

團狄が(ここでようやく)「人」と稱するのはなぜか。善行が積みかさなって始めて、進めるからである。衛を伐ったのは、齊を救うためであった。(齊桓は) 功績は卑近なものであった〔中國に限られた〕が、徳は遠く(夷狄に) まで及んだのである。

〔僖公十九年〕

經十有九年春王三月宋人執滕子嬰齊

經夏六月宋公曹人邾人盟于曹南 繒子會盟于邾 己酉邾人執繒子用之
團微國の君〔繒子〕が、邾にたよって、この盟に参加することを求めたのである。(邾は) 人が自分にたよって、この盟に参加することを求めたのに、自分は、迎えてこれを執えたのである。邾〔orこのこと〕をにくむから、謹議して日をいうのである。「これを用いた」とは、その鼻を叩いて(血を取り)、その血で社を祭ったのである。

經秋宋人圍曹

經衛人伐邢

經冬會陳人蔡人楚人鄭人盟于齊

經梁亡

團自分から亡んだのである。(梁君は) 酒色に溺れ、心は昏く、耳目は塞がった。上に正長〔君主 or 長官〕の治がなく、大臣は背叛し、民は

寇盜をなした。(だから)「梁亡」とは、自分から亡んだのである。もし、伐たれて滅亡したというふうに表示すると、酒色に溺れたことが告發できない。「梁亡」や「鄭棄其師」「閔公二年」のような表現は、手直したものではないが「orなく」、(そのまま)正名の意は「orが」示されているのである。「梁亡」は、(君が)悪政を出したことによるのであり、「鄭棄其師」は、(君が)その長をにくんだことによるのである。

傳傳文の「我」を、補注では孔子とする。問題があるところだが、ここでは追求しない〔cf. 莊公七年・僖公八年〕。

〔僖公二十年〕

經二十年春新作南門

傳「作」は、爲である。(ただの修繕「新」ではなく)古いものよりりっぱにしたのである。「新」と言うのは、(創建したのではなく)古いものがあつたからである。(この記事は)「作」をそしつたのである。「南門」とは、法門のことである。

經夏鄆子來朝

經五月乙巳西宮災

傳これを「新宮」と言うと、禰宮〔父廟〕のようである。諡をもって

(「閔宮」と)言うと、疏祖〔遠祖〕の宮のようである。(そこで)

「西宮」をもって、閔宮の呼び名としたのである。

經鄭人入滑

經秋齊人狄人盟于邢

傳邢が(地)主となったのである。邢は小國であるのに、(地)主となつたのはなぜか。齊を救援するのに主となった〔僖公十八年〕からである。

經冬楚人伐隨

傳「隨」は、國である。

〔僖公二十一年〕

經二十有一年春狄侵衛

經宋人齊人楚人盟于鹿上

經夏大旱

傳早に時をいうのは、正しい場合である。

經秋宋公楚子陳侯蔡侯鄭伯許男曹伯會于雩 執宋公以伐宋

傳「以」は、重辭〔宋が宋公を重んじていたという表現〕である。

經冬公伐邾

經楚人使宜申來獻捷

傳「捷」は、戦利品である。「宋捷」と言わないのはなぜか。楚が宋か

ら戦利品をとることをゆるさないからである。

經十有二月癸丑公會諸侯盟于薄

團「會」とは、外「ここでは楚」が主となった場合である。

經釋宋公

團外「ここでは楚」が釋放したことは（普通）記さない。ここで記しているのはなぜか。公がいつしよに盟ったから、目して記したのである。楚が釋放したと言わないのは、楚の專釋「勝手に釋放すること」をゆるさないからである。

〔僖公二十二年〕

經二十有二年春公伐邾取須句

經夏宋公衛侯許男滕子伐鄭

經秋八月丁未及邾人戰于升陘

團内「魯」に對しては「敗」を諱むから、支障のない表現「戰」をつかったのである。その人「公」等の主語」を言わないのは、わが國が敗れたからである。（つまり）これに及ぶ者「公」等の主語」を言わないのは、内のために諱んでである。

經冬十有一月己巳朔宋公及楚人戰于泓 宋師敗績

團日をいふべき事件が朔にあたれば、「朔」と言う。《春秋》の三十四の

戰で、尊が卑に敗れ、「師」が「人」に敗れた、という表現をとっているものはない。尊が卑に敗れ、師が人に敗れた場合は、（表現上）相手「卑・人」を（こちら「尊・師」と）對等にさせる。（ところがここで）襄公の場合は、師が人に敗れたのに（そのまま「楚人」といい）相手を對等にさせないのはなぜか。襄公を責めてである。泓の戰は、零の恥「前年」に報復しようとしたのである。（しかし）零の恥は、宋の襄公がみづから招いたものである。（襄公は）齊の喪を伐ち「十八年」、滕子を執え「十九年」、曹を圍み「同上」、零の會をなして、自分の力の不足を顧みずに、楚の成王をよびよせた。（それで）成王が怒って、これを執えたのである。だから、次のようなことばがある「人に禮を盡しても報いられない時には、自分の敬意に足りないところがあるのではないかと反省せよ。人を愛しても相手から親しまれない時には、自分の仁愛が至らないのではないかと反省せよ。人を治めてもうまく治まらない時には、自分の智が足りないのではないかと反省せよ」『孟子』離婁上と同文。ただし、順序が異なる。）、「過ちを犯して改めず、また犯すことを、『過』という」『論語』衛靈公と同文。ただし、『論語』の方には、「又之」がない。と。襄公のことを言ったのである。昔は、甲「よろい」を着て胃「かぶと」をかぶるのは、國を興こす場合か、無道を征伐する場合かに限られていた。どうして、それで恥に報いようか。宋公が楚人と泓水のほとりで戦おうとすると、司馬子反が言った「楚は多勢、こちらは無勢です。（楚が）險にある〔泓水を渡りきらない〕うちに、鼓をならして撃てば、勝利は

僥倖とはいえませんが「or鼓をならして撃ち、勝利を得ましょう。今が絶好の機會です」と。襄公が言った「君子は、人の厄危につけこんで、推しおとしたり〔orのけたり〕、人の厄危につけこんで、攻撃したりは、しないものだ」と。楚軍が險から出る「泓水を渡りきる」のを待った。（楚軍は）險から出たが、旌〔はた〕は亂れ、陣も亂れていた。子反が言った「楚は多勢、こちらは無勢です。いま撃てば、勝利は僥倖とはいえませんが〔or撃って勝利を得ましょう。今が絶好の機會です〕と。襄公が言った「陣列が整わぬうちは、攻撃しないものだ」と。楚が陣列を整えるのを待って、攻撃した。それで、衆は敗れ、自分自身も傷ついたのである。（そして）七箇月後に死亡した。（兵力が相手に）倍すれば攻め、匹敵すれば戦い、劣れば守るべきである。人を人としてなりたせるものは、言である。人であっても、きちんと言うことが出来なければ、どうして人といえようか。言を言としてなりたせるものは、信である。きちんと言っても、信でなければ、どうして言といえようか。信を信としてなりたせるものは、道である。信であっても、道に合しなければ、どうして信といえようか。道の中で貴いものは、時〔時に合すること〕である。（つまり）行動が勢〔時勢に順うもの〕でなければならない。

〔僖公二十三年〕

經二十有三年春齊侯伐宋圍閔

傳國を伐った場合には、（普通）邑を圍んだことは言わない。ここで

「圍」と言っているのはなぜか。惡をもって惡に報いたことを不正としてである。

經夏五月庚寅宋公茲父卒

團茲父に葬を書かないのはなぜか。民を失ったからである。民を失ったのはなぜか。教育訓練もしない人民を用いて戦うのは、その師を棄てるようなものである〔cf.『論語』子路篇〕。人君でありながら、その師を棄てれば、その民の誰がいったい君として認めようか。

傳「以其不教民戰」というのは、文字どおりの意味なのか、もしそうでないとしたら何を指しているのか、よくわからない。

經秋楚人伐陳

經冬十有一月杞子卒

〔僖公二十四年〕

經二十有四年春王正月

經夏狄伐鄭

經秋七月

經冬天王出居于鄭

傳天子には「出」といわない。（それなのにここで）「出」というのは、天下を失ったからである。「居」とは、自分の所に居るということで

ある。たとえ（天子が）天下を失ったとしても、諸侯がそれを所有することはない（との意である）。

經管侯夷吾卒

〔僖公二十五年〕

經二十有五年春王正月丙午衛侯燬滅邢

團「燬」と「or燬に」名をいうのはなぜか。本「先祖」を伐ち、同姓を滅した、ことを不正としてである。

經夏四月癸酉衛侯燬卒

經宋蕩伯姬來逆婦

團婦人は、嫁げば竟を踰えない。「宋の蕩伯姬が来て婦を迎えた」のは正しくない。「婦」と言うのはなぜか。姑にちなんだ表現である。

經宋殺其大夫

團名姓を稱さないのは、その大夫が祖「孔子の祖の孔父」と同じ位にいたから、尊んだのである。

經秋楚人圍陳 納頓子于頓

團「納」とは、内「この場合は頓」が（義として）受け入れないということである。圍んだ事と納めた事とは、別々の事件であるのに、つづけて言っている。おそらく、頓子を納めたのが陳だったからであろう。

經葬衛文公

經冬十有二月癸亥公會衛子莒慶盟于洮

團莒には大夫が無い。（それなのに）ここで「莒慶」と言うのはなぜか。公が會したから、目したのである。

〔一九八六年十一月七日受理〕